# 柏葉歌

安井小太郎先生

柏葉兒兮柏葉兒。
有時痛飲旗亭酒。
黑龍之歌聲悲壯。
一千健兒心如錢。
寂寂溪門春不關。
一望村園靡蕪綠。
勸君須期一世雄。
富貴榮華任君取。
誰道材大難爲用。
滔々天下皆婦女。
思之思之心切切。
柏葉歌罷起大息。

昔何勇銳今何衰。
連袂高唱爛熳詞。
海內齊仰歲寒姿。
彌生岡上樹旌旗。
桃花流水出人間。
芳草啼鳥斜日閑。
勸君須期千秋功。
成業多在艱難中。
誰道慷慨空誤身。
維持頹在興風。
落落悒瞻生毛。
月黑風急雁聲高。

# 辯論部史

# 辯論部部史

矢内原忠雄

文は以て委細を盡すべく辯は直に人を動かすべし。山上の垂訓、論語を始め眞に萬古を通じて世を動かせる權威は多く口より述べられたるもの、彼のウォルムスの會議に於けるルーテルの數言は彼が一生の著述にも勝りて力强く響けるにあらずや。余は我部二十年の歷史と三年間の親炙とにより、我壇上の叫は其聲素より小なりと雖も侮蔑迫害興起發展の時代を通じて常に人道の大義を宣揚し向陵思潮の健實なる進取的主張を代表せるを見、且つ之を通じて先輩諸氏の眞摯なる人格と向上の意氣とを仰ぎて肅然たらざるを得ざるなり。以下聊か本部の歷史を通觀せんとす。

## 一、校友會加入以前

### 辯論會——講論會——修辯會

遠く大學豫備門の古を尋ねずとも明治二十三年第一高等中學校々友會成りし當時、宗教學術音樂等の諸會と並びて辯論の練磨を目的とせる會合校友有志間に多く、成器社、攻辭會、風生會、辯論會等最も著る。就中辯論會は當時の文藝部委員伊吹山德司氏之が牛耳を取りし故か校友會雜誌第五號（明治二十四年三月）雜報欄に始めて其記事を見る。之によれば同月十九日午後六時より第一大教場に於て第五回演說會を開き會員赤沼田島兩氏及び教授寺田勇吉氏演說し聽衆三百餘名に達せりと云ふ。かくて辯論會は演說會又は討論會を月次開會し他の諸會も亦辯論の練習を繼續したりしが、孰れも一部分に偏したるを以て本科一二年の有志は風生會と攻辭會とを合併して新に講論會を起し會員を廣く全校に募り二十五年十一月十九日を以て發會式を兼ねて大會を第一大教場に開き佐藤宏（講論會歷史の概略）、松浦鎭次郎（維新の受動者）、逸見

晋（蘇士運河開鑿後に於ける歐亞貿易の變動）、村田俊彦（大久保利通論）の諸君及び穗積陳重、井上哲次郎の兩博士の演說あり。穗積博士が木下校長に代りて傳へられし「講論會は如何なる艱難に遭遇するも永へに繼續する覺悟なかるべからず」との箴言はうたゝ前途の風雲を豫想せしむるものゝ如くなりき。然れども二十六年二月四日の第二回大會には木下校長今村教頭始め數名教授の來聽せらるゝあり生徒五名及び坂谷芳郎、梅謙次郎兩來賓の演說あり「聽衆辯士互に勵まし勵まされつゝ、六時間の長きに亘りたれども博士の演說終る迄は上野の鐘聲の暮を報ずるに耳を傾くる者も無く、流石は有爲の青年、一中の生徒と思はれ」て講論會新進の光彩を示しぬ。五月に開きし臨時大會は本科二年生の卒業を送りしものにして今の送別演說會の濫觴、九月の大會には竹田太郎司氏新入生に講論會を紹介して今日の紹介演說會の嚆矢を作りぬ。その後大會を開く事三度にして明治二十七年六月遂に高等學校令發布に遭ひて修業年限は三年に短縮されぬ。講論會の幹事たりし井上、佐藤、竹田、村田、松浦の諸氏及び當時の辯士、島文治郎、下村宏、末廣重雄、筧克彦の諸氏は皆健實なる人格の養成と校風の發展とを期せし人々にして、下村氏は二十七年三月三日の大會に於て「國家と宗教」と題して基督教佛教共に根本眞理に溯りて論ずる時は其眼中國家なしと雖も其世俗に對する方面より觀察すれば二者共に國家に反對するものにあらずとて此二教の改良策を述べ佛教は　一、僧侶の世襲を廢す　二、大に戒位を嚴にして品行を高尙にすべし　三、宗派娼妓の念を去るべし　四、僧侶の教育を改良すべし。基督教には　一、教師の平凡なるを廢すべし　二、無益に信者を造るを廢すべし　三、儀式教則を日本的にせよ　四、布教には專ら日本の教師之に從事すべし、と論じ又筧氏は五月二十六日の大會にて「校風」と題し校友相互の制裁の弛緩せるを慷慨せり、即ち當時の演壇には既に一面に於て校風振興の叫あると共に一方には時事問題以外に歷史的宗教的の問題多く論ぜられしを見る。今日の實驗的主觀的なるに比し當時の演說は多く議論的客觀的なるが如しと雖も眞率なる攻究と熱誠なる態度とは昨今何の異る處あらんや。加ふるに傍聽子の親切にして熱心なる批評は我部の礎石を固うせるものなり。演說に關する注意を述べて演說を講義的にするを止め



よ、力ある活潑の演說をなせ、品格を高め誠實なるべし、なるべく簡單にすべし、修辭法を研究し有名なる日本文辭を學習し熟練なる批評家をして其秀逸なる點及び不完全の點を指示せしむべし等の數條を擧ぐるあり。辯論術の練磨に就て斯くの如く熱心なりしと共に演說の內容に關しても亦冷淡ならざりき、某氏の宗教を野蠻未開時代の殘物にして文明の厄介物なりと論ぜしに六頁の批評を加へて其の根據なき說なるを立證し、某氏の校風のみならず天下萬事皆非なりと言へるに對し「何故に、何處がといふ事を說明せずして獨斷的に彼も非也此も非也といふも余輩は遽に同情を表する能はざるなり」と言へるが如き、禮を失せず筆を曲げざる批評の眞率に敬服せざるを得ず。聽者また「背緊にあたれる批評」をなし且能く禮を守りて最後まで席を離れず、「君子人の集會」と稱するも誣言にあらざりき。徒に詞華態度の末に流れて氣體器識の練磨を忽諸に附する時流に逆つて屹立せる精神は每會の景況に明かなり。將來に於ける講論會の責任や大なりと云ふべしとは是れ一文藝部委員の言にあらずや。それ此の如く眞摯なり。此の如き奬勵あり、講論會の前途は陽々たる春の日なりし乎。順風に孕める白帆乎。否。否とよ。

講論會は廣く會員を全校に募りしと雖も要するに基礎薄弱なる有志の會なり。熱心なる盡力家を失へば會勢忽ち傾くべく、殊に其の眞摯を認めしが如きは僅かに一小部分の人士のみ。校友の大部は辯論を喜ばず、校風の精髓は運動にして辯舌の如きは輕薄子の爲す所寧ろ校風を危くするものなりとし常に之を白眼視しき。第一高等中學校の第一高等學校と改稱せられし頃より講論會誠に落日枯野に入る如く、又楫櫓碎けし破帆の如くなりき。壇上聲なく二三の憂士の今や暫く壘を代へて文筆により以て大に辯論の振興を說けるを見るのみ。二十七年十月二十日の大會には松浦氏始め八人の演說ありしと雖も、「劍を以て舟を以て球を以て筆を以て其名宇內に高き我校林列の士よ、ウエブスター、ビット、デモステネスの辯必ずしも不可ならず、正義の爲め、忠良の國民の爲に錬磨するの言葉は敢て不快ならずとせば少しく意を講論會に留めて可ならずや」との言は偶々以て會の不振を知るべく、次會は二十八年六月に開きしも定期に及んで開會の運びに至るを得ず

人影の三々五々聞として散在せるを見るのみ、「當時の學風たる懇親會席上無用の饒舌に耽り放飲縱食の荒むべき心起りて麗澤切磋の力むべき心起らず、品性學識を陶冶する鴻益の如きは夢想も及ばず」との浩嘆を洩さしめたり、二十九年三月鶴澤總市氏等五名及來賓一名壇に登りし事あるも聽衆極めて稀にして往年の盛況影だにあらず、あゝ講論會の不振衰頽は其の人なかりしが故か、人に倦かれしか、或は言論の事遂に校友の容るる處とならざりしが故か。

校友會雜誌第五十九號（二十九年九月）に大橋虎雄氏の論說「言說の要を述べて元氣の樹立に及ぶ」あり。往時の校風を以て理想の校風と成し難きは其に養成せられし弊衣破帽の徒の大學に入りて忽ち豹變する者頻々たるを以てなり。完全なる校風とは吾人の理想にして寧ろ道と稱すべし各人自ら克己禮に復へらば校風は求めずして揚らん、運動家中より偶然有元氣者を輩出せし結果は運動萬能となり遂に形式に流るゝの餘弊を生じ運動に隱れて箇の元氣を裝ふ者を出し而も一方には此の弊害をも尙武に伴ふ好風習とし以て柔弱を排するに至ると謂ふ者あり。盲者の動くや斯の如し余輩の默する能はざるは之が爲めのみ、重んずべきは運動よりも先づ氣力にあり、而して氣力を保持する者は文章辯論確に其一也」と。これ大橋氏所論の大要なり。以て當時一般校友の言論に對する態度を窺ふべし。第六十二號には原信太郎の論說「講論會」あり。日清戰爭の影響により向陵の衆木すべて其華を競ふの時獨り講論會落葉憔悴せるを嘆き其不振の理由を擧げて、

(一)、歷史的原因——孔子の道の稍消極的にして萬事謙遜を主とし三言ふべくして二言ひ四語るべくして三語るを可とす、蓋し當時の學者多く詭辯を馳せ空論を事とせるを患ひて然りしにて孔子も決して辯論を不可なりと言ひしにあらず。又德川家康に處士橫議して民間異心起り論客縱論して諸侯叛かんことを怖れたり。且つ我國の武人教育はスパルタ教育に類し多少壓迫的にして多言を禁ぜり。(二)辯論と所謂校風なるものとの關係——勤儉尙武を維持發育せしもの多く運動に由りしが故に其極一派の人士をして講演の如きは校風に害ありとて之を輕侮するの念を起さしめしが、一方に於て辯論を盛にして調和の用をなさしめば全く運動する能はざるものも之によりて精神上の大運動をなし又運動に從事する人は精神の發達を助け貧腦の笑を免れん。然る時は校風の範圍も從つて擴張し大學に入りて俄に大反對を生ずる等の事なく各人は其獨特の才を發達せしむるを得て眞に二十世紀の英雄を養成するに至らん、(三)講論の興味少きこと——講論は軍談師の如き興味を主とする者と玩すべからず。且つ學力經驗大差なき校友相互の演說なれば別に名論卓說のある道理なし、吾人は直接に之より智識を得んとするにあらずして只方法の攻究と傍ら精神の錬磨とを目的とするもの也故に講論會を一種の學校として切磋の實をあげんとす。(四)小團體講論會の存在——辯論の爲に喜ぶと共に學校一般の爲に講論會に盡力せられん事を望む。云々。第六十三號。(三十年一月)には松原一雄氏の講論會の隆盛を望める論說ありて原氏の說と大同小異なるが、これら着實なる言說は今日直に移して吾人の論とするも何等の不可を見ざるなり。殊に當時校內の思潮を背景として此の言の最も適切なるを見る。然れども此等の言は新しき種子を蒔きしものにて倒れんとする木を支へ得るものにあらざりき。講論會の開かるゝ事は誠に雨夜の星の如く、雜誌は三十年五月の、討論會を記して「討論題は某々の二題」とのみいへる冷淡さ、之を彼の數年前眞摯の演說と直誠なる批評と相俟ちし當時と較ぶれば實に隔世の感あり。あゝさしも一時は幸運と見えし講論會は今や頹勢止め難く音なくして倒れ行かんとす。之を支ふる者なし。されど其の未だ倒れ終らざる間に新緑の色鮮き若木は生ひ立てり。これを修辯會とす。

修辯會は原信太郎、松原一雄、長島隆二、石坂音次郎、宮島次郎、杉田鐵次郎諸氏の發起せしものにして揭示場の大半をも橫領せんずる大廣告を以て滿校の耳目を聳てしめたる裡に、明治三十年十一月六日を以て第一大教場に其初會を開きぬ。かくて左の三氏幹事に選擧せられたり。

▽**長島隆二、杉田鐵次郎、松原一雄**

新進氣銳の修辯會は演說會及討論會を交互に月次開會し我壇上再び活氣を呈しぬ。此の間岩崎勳氏は「行路難」と題して浮世の夢幻と人慾の增長複雜より行路難の生ずるを說き、今更之を避けず恐れず脫然として其上に超出し千難を排して

邁進すべきを論じ、石坂氏は「人乎法乎」と題し韓非子の言を引いて法治の必要を論じ、法は權力の平均に起原し而して立憲國は法治國の終局なりと述べ、宮島氏は「大政治家と宗教」と題し宗教を定義して「永久と永久とにわたる或る存在と人間との關係を附けたるものなり」と云ひ大政治家たるの素養は宜しく宗教の上に於てすべしと述べたり。かくて諸氏の熱誠と盡瘁とにより從來容れられざりし言說談論も稍一生面を開くに至り、光榮ある修辯會創立者はその巨大なる努力の足跡を向陵辯論史の砂上に印して三十一年六月卒業送別會を受くるに至りぬ。新幹事の當選せし者は左の三氏なり。

**△岩崎勳、齊藤愛二、村山鄕太郎**

從前より希望せる擬國會は遂に三十一年十一月一日第一大教場にて開かれぬ。岩崎氏は議長、齊藤氏は特別委員長、村山氏は內閣總理大臣をつとむ。議題は德川家光內閣の提出に擬せる鎖國案にして左の如し。

第一條　御朱印船を禁ず

第二條　三檣の大船を禁ず

第三條　外國渡航を禁ず

第四條　右三ケ條の禁を犯したる者は嚴刑に處す

第五條　從來貿易せる各港を鎖し外人と貿易することを禁ず、但和蘭國のみは長崎港に限りて交易を許す

寬永十四年十月二十八日

總理大臣の提出理由を說明するあり、代議士の質問討論は遂に政府彈劾上奏案朗讀となり民黨諸氏凱歌をあげんとせる時忽ち詔勅は降りて議會は解散を命ぜられぬ。歷史的議題にして且つ萬事不整頓の裡に却つて多くの興味を覺ゆ、當日無邪氣の討論をなせし人は現今社會に活討論をなす人なり。「議場見聞錄」は當日の逸事を錄し以後擬國會每に其例に倣ひしが、その中「議長が登壇者を麾くや常に低聲にて某と呼捨てにしたる殊に內閣總理大臣德川家光君と呼ぶべきを僅に村山



と指顧したる」等は殊に吾人をして今昔の感を深からしむるものあり。

十二月三日第九回修辯會開かれ此時幹事の改選あり。左の三氏新に當選す。

**▽佐藤善十郎、中西四郎、太田一郎**

新幹事は三十二年一月二十一日を以て其初會を開き新に校長たられし狩野亨吉先生亦臨場せられたり。

修辯會は先輩の熱心に依て創められ兎も角も維持せられて玆に至れり。途中擬國會の擧は多少校內の人氣を得たらんと察せらるゝも一般の空氣は猶辯論に冷かなりき。八年が中に四度迄起きては仆れ仆れては起きし辯論の會は誠に浮萍の如く、固むべき根なき修辯會も亦講論會と終を一にするの憂切なりき。所謂校風の眞髓たる籠城主義勤儉尙武は唯運動を以てのみ維持すべしとは不知不識の裡に養はれし一般校友の信條にして辯論の如きは輕薄、校風を害ふ者とせられき。故に辯論の校風に伴ひ運動部と並行し得ることは當時の我等が光輩の筆を禿にし口を酸くして極論せる處なりき。三十一年十月時の修辯會幹事の校友に訴ふるや眞に切なるものあり。「出でてオリンピア祭に勇躍奮鬪龍虎の活劇を演ぜし希臘の健兒は亦是アデン花の庭に口角火を吹き舌端雷を鼓するの辯士にあらざりしや。オールを取りてテームスの閑鷗を驚かす牛津劍橋の壯士は亦是三寸の舌端に雲烟を捲く辯論の會を好む士にあらずや、」とは此會と運動部との相容るべきを論ぜるなり。「校友會の組織は我校の率先して天下の耳目を驚かし諸校をして之に倣はしめし所にあらずや、而して今や談論部は二高四高五高山口高等學校等後進諸校の夙に設立する所となりて我校は只有志者一派の徒に放任せらるるを見るなり」とは修辯會の根柢定まらずして不振なるを歎き之を校友會の一部に編入するの必要を說けるなり。「由來我校は辯論を容迎せず口角泡を飛ばして談論する者あれば直に目して輕薄兒といへり、ああ輕薄兒輕薄兒何ぞ忌はしき語ならずや。然りと雖吾人心に顧みて疚しからず自ら信ずる所にして正しからんには何を苦しんで惡評の爲に動かんや。嘲弄あらばあれ、吾人は超然たらんのみ。罵詈あればあれ、吾人は信ずる所に猛進せんのみ。是亦品性修養の所」と云ひ「吾人は今性格修養時代

にあらずや而も辯論は之に資する所なしと云ふか。若し爾か言ふ者あらば我は口を緘せんのみ」と言へるは彼等の堅き決心を吐露せるなり。「我れ駑鈍自ら揣らず誤て乏を此會幹事の職に受け日夜苦思すと雖其責を竭す能はず而も事屢々蹉跎し所思屢々違ふ」と言ふに至つては悽慘として十餘年後の吾人をしてなほ落涙を禁ずる能はざらしむ。岩崎、齋藤、村山の三幹事はかくの如く校友會雜誌に於て校友一同に訴ふると共に一方に於ては時の校長澤柳政太郎先生に設立請願書を出して修辯會を校友會に加へられん事を請ひ百方奔走して其目的を達せんことを期せり。澤柳校長は居ること一學期にして去られ狩野校長新に臨まれしが村山氏等の靈力は毫も衰ふることなかりき、遂に三十二年二月十三日臨時校友會委員會の議事終りし後校長より修辯會を校友會の一部に加入するの件は附議せられ先の歎願書は讀み上げられ村山氏熱心に說明する處ありしが討議に入るや一度び經費の點に躓きて漸く活路を得、再び一部專有の說に蹉跌し又漸く辯ずるを得、形勢可ならんとして而も可ならず突如次會迄延期するの說出でて滿場を動かすに至れり。あゝ此會遂に我校に容れられざるか、先輩諸氏の苦衷察するに餘りあり。然れども熱誠は巖をも透す、況んや其の要求の正當なる叫なるをや。二月十七日の校友會委員會は再び激烈なる討議の末修辯會入部の件は纔かに可決せれ名を辯論部と改め部費一ヶ年五圓を給する旨を定められたり。玆に於て教授松本源太郎先生を部長に戴き、修辯會幹事佐藤中西太田三氏は就任して僅か二ヶ月なりしが、此際辭任して新に辯論部委員三名を選び、こゝに全く我部の成立を見たり。

辯論の會の我校に於ける運命や誠に數奇なるものありき。校友會創められてより七年の間嘲弄と輕侮、罵詈と迫害との間一起一仆其の燈消えんとして又明かに、時に光焰を發すと雖も又薄暗、その命脈纔に縷の如かりしなり。本校に於て辯論の會の虐遇せられし所以はこれ迄の叙述にて略明かなるべし。即ち籠城の性質は專ら武事を重んずるに至り、延いて形式の骸を祀りて校風の眞髓とするの輩多く言說をなして進步的氣象を皷吹する者は此の神體を冒瀆するものなりとせり。然れども精神を發展せしめて形式を廢れしむるは時の力なり。當時にありては形骸力强うして言說を壓迫し先輩は多大の



苦痛と隱忍との苦き杯を口にしたりき。今日は言說籠城主義の形骸餘弊に鞭ち之を驅逐せずんば止まざらんとす。誰か今昔の感に堪へざらんや。新しき酒は新しき革囊に盛られざるべからず。弊害たる形式は運動よりも言論よりも之を除き共に眞精神を發揮して一高の美を濟さんこと、之れ我部の力め來りし所又努むる所なり。吾人は今辯論部創業の章を終るにあたりて深く苦境に處し嘲罵に怖れず奮鬪邁進、常に眞摯なる議論を以て性格の養成人道の發揚校風の扶翼を計り今日の基を据ゑられし先輩諸氏に敬意を表するものなり。

## 二、辯論部の興隆

明治三十二年より三十八年まで

### ▽初代委員　中隅尙友、太田一郎、佐藤善十郎（明治三十二年度）

修辯會は辯論部となりて其の初會を三月十三日校長始め四五の先生臨場の下に開き、太田舊修辯會幹事の開會の辭、松本部長の「一部分に偏するなく普及の法を講じ巧拙差別なく本會を利用して練磨すべし」との希望演說あり。村山鄕太郎氏は辯論部成立の歷史を述べ部員の覺悟を論じて曰く、「人は性の高きを以て第一となす、之を以て其高き者は之を卑みし者も遂には貴ぶに至るべし。不肖の諸君に望む所は本部をして彼が如き品性の高き者あるが故に辯論なる者は決して卑むものならざる事を校友に知らしめ武に於て天下に覇たる如く、文に於ても亦天下の伯となり、兩々相並行して以て永く校名を損はざらんこと之なり」と。雄辯家たるより前に人となり人物を以て辯論に生命を與へんとの決心はその眞摯且つ正鵠なる點に於て正に千斤の重みあり。殊に一般校友の冷眼視せる中に校友會の一部となり長き旅出に出で立てる當時の部員が此の決心を抱けるは異教の地に入れる基督の心にも似て淋しくも又强きかな。幸ひ我部は人常に辯を用ひて辯に用ひらるゝ事なく主眼は寧ろ精神氣魄にありしを以て本校壇上の聲たるや眞面目、而して赤門に入り社會に出づるも或る一派

の人々の如く忽ち豹變して在校當時の左券を破ることなし。常に渝らざるの正義の鼓吹者人道の戰士を輩出せしむるは我部の光榮にして又責任とする所なり。

當時の開會は一月一回にして演說會と討論會となり。前者は普通午後一時より開き生徒數人及來賓あり、今日の大會練習會を合せるが如し、討論題に「社會の上層と下層と何れが其教育を急とすべきや」ありて下層論者の勝に歸せり。萬事未だ十分の整頓を見るべからず。委員は校友會雜誌の餘白を借りて登壇者には雜を去りて純を取り、之を所定の時間に了し一名にても多く練磨し得ん事を求め聽衆には辯士の身振口調等にも留意批評せん事を請へり。

三十二年五月松本(源太郎)部長辭任し、松本(文三郎)文藝部長之を兼ねしが十月に至り教授山川信次郎先生辯論部長に任ぜられ、演說會に出でて生徒演說を評さるる等熱心に指導せられき。此年演說會を開くこと八度。

**▽第二代委員　平田和夫、多尾玄乘、片岡貞藏**（明治三十三年度）

演說會を開けども聽衆多からず、來賓に氣の毒に思ひし事さへありし程なるも其論ずるは青年、修養にして人物を擧げて之に至る道を說く等演壇に立つ者志の高きを見る。又校內の時事に關し親切なる忠告をなす者多し。(龜津定吉氏「興風會と同志會とに就ての希望」。齋藤良衛氏「總代會改良意見」)

**▽第三代委員　大河平隆光、三浦通太、中內久壽賴**（明治三十四年度）

三月十六日の演說會に三浦委員就任の辭を述べて本部の目的は修辯と校風振興とにありと云へり。我校は校友會雜誌第三號に野田氏の校風論を見し以來校風振肅の聲絕えず、此頃また自治寮の危機なる論文川田氏の手になれり。されば我壇上亦校風に關する論議ありて其多くは著しく進步的にして當時多數の反對を蒙れるが如きさへありぬ。齋藤良衛氏は「禁酒



會の設立を促し」て殊に本校に多き偶然飲酒家一名交際的飲酒家に痛棒を加へ村上恭一氏は「校風に關する一問題」と題してストーム賊征伐の復興を以て振起すべき元氣は眞の元氣ならずと述べ矢田七太郎氏は「校風論者を戒」めて、校風論者の謂ふ所は千篇一律皆な「昔に歸れ」と之れ恰も口を開けば三皇五帝を說く支那の死學者に似たり何ぞ進んで光輝ある希望を未來に置いて樂しく進まざると叫べり。

九月二十八日の演說大會は新入生に紹介の意を含めるものなるが生徒演說終りて來賓未だ臨場せられざる間を以て「吾等の先輩赤門の某君」修養に就て演說あり。これ飛び入り乍ら我壇上に於ける大學生演說の嚆矢なり演說練習會も一週一回開くことと成りたるが如きも實際は其の開會極めて少數なりき。擬國會は三十五年一月二十五日開かれ議長三浦通太氏、總理大臣大河平隆光氏にして切支丹宗禁止令(寛永十五年正月)を議し保守黨代議士村上恭一氏と改進黨議員杉村陽太郎氏との論戰最も見るべし、新夜多加羅亭に至りて部員懇親會を開く。以後擬國會毎に懇親會あり。

**▽第四代委員　野山忠幹、村上恭一、河原賀市**（明治三十五年度）

四月十五日の練習會は地位と事業(赤塚源助)愛の力(野山忠幹)卒業式の祝辭(村上恭一)圓滿主義(北田正平)罪の悔悟(大河平隆光)自己の信仰(原達)日英同盟論(菅武時)の七演說あり、終りて校友會事務室に茶話會を開き宗教道德談百出し歡を盡せり、果然辯論部は皮相の辯を弄ぶ輕薄兒にはあらざりき。宗教道德談は彼等が切に聞くを欲し又語るを欲せし處なりき、我部の特色は宗教的色彩に富める事其の一なり。吾人は玆に既にその薰香を見て會心に堪へざるものあり。

學術講演會を創めて專門學の名士を聘し、又練習會は其度數を增し、大會は辯士の數を減じ次第に現狀に近づけり。安倍能成氏は「獲得の覺悟」(十月十日)を以て、青木得三氏は「新入生の自治寮觀」(十一月廿九日)を以て始めて我壇上

に其の姿を現はせり。あゝ幾多の鳳雛が向が岡に育まれつゝありしなり。其脚強く翼延ぶるに及んでや向陵論壇は俄かに光榮に燿かんとす。此年山川教授に代り谷山初七郎教授新に部長となる。

▽**第五代委員　澤逸與、西村二郎、郷古潔**（明治三十六年度）

三十六年五月二十二日ケンタッキー號との野球試合ありし日藤村操君は十六年十ケ月のうら若き身を以て巖頭之感を殘してあはれ華嚴の瀑に玉碎しぬ。沈滯せる社會は愕然として或は怒り或は嘲笑せり。然れども之が爲め眞面目なる青年はその思索的良心の琴線のいたく振動するを感じぬ。安倍能成氏は直に感想を書して「いつはり多き我、眞摯ならざる我、願くば君が導きに待たん哉」と曰ひ、魚住影雄氏は「自殺論」を作りて「予の恥づるなくして選び得るもの三、曰く狂、曰く自殺、曰く信仰」と云へり。眞面目なる同窓青年の心琴動く、我論壇亦その聲を傳へざらんや、學生の悲觀的思想（村上恭一）、悲觀の美（勝山勝司）、人生の眞面目（堀口滿貞）死（梅谷光貞）等藤村氏の死と相前後して我が練習會報に見るを得。殊に十一月廿八日の大會に於て池田立基氏は「哲學者か詩人か」と題し藤村氏に於て哲學者の一大要件たる冷靜なる性の欠けるに却て溫き情の溢るゝを見る故寧ろ彼を詩人と呼ばんとす。或は曰はん藤村氏は一の詩を作りたる事も一の散文を公にしたる事もなしと、されど彼は其一生に於て唯一つの詩、然かも頗る美なる詩を作りて之を世に公にせり、彼の華嚴巖頭百四十七の文字これなりと辯じぬ。

昨秋大學校庭に千載の恨を殘し又駒場原頭に敗を重ぬること三回、多年運動界の覇權を稱せし健兒も鼎の輕重を問はれんとする時に方り、我部は運動の技をして校友の間に普遍せしめ之が旺盛を謀らん爲め斯道の大家法學士武田千代三郎氏を特聘して臨時講演會を開くこと三度、運動に關せる理論的經驗的の講話を聽けり。澤委員は柔道界に於ても重鎭たりしを以て特に此事有りしならんも、辯論部が公然運動部を助けし美談は之を以て最となす。



前田多門氏は「順序を誤る勿れ」（五月十二日）を以て、鶴見祐輔氏は「多年敬仰の向陵」（十一月二十八日）を以て孤々の聲を我壇上に擧げぬ。練習會未だ十分盛ならずと雖も發展の素地既に成れるものゝ如し。

當時日露の風雲急にして練習會上時に慨然として東亞の形勢を痛論する者ありしが、遂に三十七年二月十日を以て宣戰の大詔は喚發せられぬ。その後二日校友滿腔の熱血を横溢せしめんが爲め第二大教場に對露演說會を開き青木、郷古、川越、西村、澤の諸氏其の熱辯を振ひたり。

▽**第六代委員　前田多門、武富敏彦、丸山鶴吉**（明治三十七年度）

此皇國の飛躍を劃せし大戰の火蓋の切られし頃我部新に三名の委員を得て洋々たる大海に舟の乘り出でたる如く辯論部興隆の機運に際會しぬ、嘗ては講論會の先輩は日清戰爭の當時嘆じて曰く戰爭の刺戟を以て各科各部共活潑に活動せるなど獨り辯論の會は斯くの如く賤しめられ斯くの如く振はざると云へり。十年を經て再び大戰は戰はれぬ。而して今や辯論の會は他の諸部にも勝りて一段の活氣を呈するの勢となれり。これ抑も時の力か、努力の故か、吾人の胸中云ひ難きものあり、況して當時の當局者の心中感慨果して奈何。

三月十七日の大會に丸山委員就任の辭を述べし後來賓大塚文學博士の演說ある筈なりしも聽衆僅かに點々とし　場の各隅に倚坐するのみなりしを以て博士に乞ひて其講演を次會に延期せり。この不運にも屈せずして四月二十三日擬國會を第一大教場に開き其夜は大學集會所に懇親會を開きて三十三名の出席あり未曾有の成功を收め得き、擬國會も此度より歷史的議題を去りて時事問題とし政府は移民法案を附議し其の第三條に於て移民事業を政府の管轄内に置くを規定せり、議長郷古潔、内閣總理大臣澤逸與、左黨（政府黨）院内總理青木得三、右黨（在野黨）院内總理西村次郎、中立派領袖丸山鶴吉、其他各大臣、書記官長、代議士等各々辯舌を振ひ、殊に青木氏の賛成演說の後、その演說中頻りに外國語を用ゐしは議院

法を無視せしものなれば懲罰に附すべしとの動議西村氏より提出せられし等異常の活氣を呈しぬ。

然れども委員の最も力を用ひしは大會にあらず擬國會にあらずして實に練習會なりき。由來辯論部は辯論の練習を目的とせるもの、練習會は主にして所謂大會は賓なりとの見解を以て爾後毎週一回宛練習會を開くことに定め常に熱心なる數名の登壇者を見或は抽籤を以て即席題を取り之に就て演說する等の事を試み、練習會を開くこと十二、幾多の少壯辯士を養ひぬ、然れども其人數多からず顏振又同じきを遺憾とし、要は品質にして數量にあらず以後益々奮勵して品質の大を以て數量の小を補はずやと部報子の云へるは各代委員の等しく考へて今日に至れる所なり。

此年五月藤村操氏の一周忌を以て魚住影雄氏は「自殺論」を草して之を公にし理想を探究する個人の權威を絕叫せり從來も飲酒、田樂風、ストーム等の惡習又は總代會の不振等を慨する校風論絕ゆる時なかりしが今や大膽なる個人の權威の宣言を聞き舊き藩城主義は驚愕して共同の風を破壞し自治寮の基礎を危くするものとし議論囂々として起り一高思潮は甚しき動搖時代に入りぬ。五月十五日の大會に於て切山篤太郎氏は「宗教的見地より校風を評して」叫べり。「校風々々と叫びつゝ野次馬を事とする人、個人の靈性を基礎として修養の道に進まんとする者を見んか指して彼は個人主義なり我向陵の風に背けりと云ふ。所謂自治制度なるものを作らん爲には人は遂に個人を滅却せざるべからざるか」然れども人は機械にあらず制度の犧牲にあらず。措く靜思せよ、諸君の胸中に疑は起らざるか。君父も朋友も先輩も乃至は道德も法律も慰め得ざる衷心の寂寞悲哀は諸君の胸をつかざるか。人若し此を感ずる切なれば煩悶の極遂に絕對無限の或物に歸一するを得かくして眞生活は起らん。かく云はば定めし大人君子を以て任ぜらるゝ諸君の氣には入らぬなるべし。內硬にして外柔なるを望むか或は內柔外硬を欲するか。諸君よ衒氣を去れ。又諸君はいふ運動はこれ一高の元氣を養ふ根元、運動を離れて亦一高健兒なしと。夫れ然り故に胸場の敗に膽を奪はれ大學の敗に顏色なし。諸君は果して此の如き不定の物に依て安心立命以て眞正の元氣を養ひ得るや、運動過重の餘りは對外試合に熱狂するに至る。然もこれ概ね野心の然らしむる所に



あらずや。かくして遂に無限を磐石とし其上に自若たる地歩をつくる時は來らざるか。重ねて乞ふ諸君の自治を棄てよ然らば諸君は眞の自治を得べし。大人君子の自稱を去れ此時こそ諸君は眞の男子たるを得べく一切の矛盾倨傲罪惡は雲散霧消し眞正なる友愛の團體は起らん」と其他鶴見氏は「筒井順慶論」に於て個人主義にも國家主義にもあらず無主張にして愛寮の精神を欠ける冷淡なる人の增加を憂ひ、青木氏は「新人壓制と個人の發展」に於て此兩者に對する見解を述べられたり。斯くの如く我論壇は眞摯なる校風論にて賑ひたれども勿論校風又は國家の問題に執着して宇宙人生に眼なきが如く偏狹なるものにあらず。河田烈氏は「廣瀨中佐とマカロフ提督」に托して信念の死を述べ、石川鐵雄氏は其「煩悶」を語れり。斯くの如き人生の大問題の我壇上に述べらるゝ事は即ち我部が校風論以上に超出して常に校風を導き一高の美を顯揚し得る所以なりと信ず。

我部の興隆に向ひしは從來先輩の努力よく開拓の功を成せしによると雖も亦此の年人格高く眞摯にして且つ雄辯なる委員を得たるに基く所多し。殊に時の部報子前田委員が來賓よりも生徒に重きを置き其の演說を評するや「謹んで評す」を冒頭として其の內容、構造、音聲等の技術に至る迄謹嚴なる細評を加へたるは誠に大なる批評家出でて言論頓に榮えしを思はしむ。思想に勝れしと共に辯論術の研究を怠らず此兩者相並びて發達する所に眞の辯論あるなり。

## ▽第七代委員　鶴見祐輔、石橋茂、切山篤太郎（四月辭任し石川鐵雄代る）（明治三十八年度）

「前田武富丸山の三前委員、靑木得三氏に加へて今又新進の三雄辯家を委員に得大會に練習會に我部は誠に空前の隆盛を見たり、即ち大會に於ては芹田均氏「奮鬪的生活を讀みて」ルーズヴェルドを論じ、石橋茂氏は吾人が我を捨てて絕對無限の宇宙の大靈と一致したる時に「眞正の自由」ありと說き、前田多門氏は向陵論最後のスピーチとして「感嘆の心」を述べ、感嘆の心は最も彈力ある狀態に於ける愛なり、若し愛が俯く愛と仰ぐ愛とに分ち得べしとせば感嘆な心は後者に屬

す。こは可愛しとて愛するに非ず、驚き尊む故に愛するなり感嘆の心は人格崇拜に於ける如く自己の憧憬物に邁進せしむるの力あり而して偉大の崇拜者は同時に共相續人たり得。此高き向上の心、清き感嘆の心あるが故に世に永遠なるもの不朽なるものあり。又相互に相感嘆する者の相結び相交りて修養の道を進むるは實に必要にして意味ある事なりとし、該博、知識と堅實なる信念との上に立てる豐富なる思想と、アートの巧拙以外に人を動かして尊敬と感興とを以て傾聽せしむる特有なる一種の力を以て構造精緻なる此記念演說を殘し去れり、更に武富敏彥氏は講和談判の當時日比谷原頭彙轂の下白刃ひらくの珍事を出來せし時、輿論の指導者にして公明の言論を以て立憲政治家の態度を明にせし「馬場辰猪の小野梓」とを引き來つて小策を弄し姑息を事とする政治屋の多くして堂々正論する爲政家の乏しき現代政治界を慨せる莊重儼乎たる演說をなし、川越丈雄氏亦ヂスレーリに比して「甲東を憶ひ」無節操の政治屋を罵る處あ[illegible]

練習會亦前代に繼承して活氣橫溢、或は即席題を抽籤に取り、或は討論會となし又は「思出の記中興味ある一節」を課題として文章と言論との調和を謀り好調の言辭に習熟せんと努むる等辯論の練習に力を注ぐ事大、新學年初めの如きは來つて練習會を訪ふ者五十名又三十名、「機運開展生面新なり幸先よき船出哉」と記せるもの宜なり。練習會を開く事十二回登壇度數九十三、而して其言論や最も眞摯なるを見るべし、當時の登壇者中には委員の外魚住影雄、長濱哲三郎、藤井武黑田欽哉、宮崎一等の諸氏を見る。

擬國會も回を重ぬること四、而も此度は始めて嚶鳴堂を使用し且つ始めて公開し各新聞に廣告し又都下二十有餘の公私學校に招待狀を出せり。而して大會に於ては二三名以上の登壇を許さゞる事情あるに反し擬國會は半日能く四十の辯士の意見を聞くの便あるは此會を開く重なる理由の一なりと言ふに至つては言論練習の熱心以て見るべきにあらずや。時は四月二十九日、議案は第一兵役二年法案、第二劍道柔道を高等小學及中學の正課となすの件、第三貿易保護法律案。この度は又先輩法學士を招きて大臣となし首相は上野貞正氏、外務兼文部は岩崎勳氏、大藏兼農商務は高田貞三郎氏之をつとめたり。討論の結果第一案は委員附託、第二案は否決、第三案に至り政府不信任の動議提出されて解散に終りしが當日の議事見聞錄中、「鶴見代議士は辯もよければ身振も極めてしなやか也、たとへば翩々として榮の花に舞ふ胡蝶の如し」といひ又青木代議士を評して、「この人の辯は堅板に水といふ誂へ、スウッと一息に上面を流れ去る、併し長息一番『あゝかくの如くんば國家百年の長計を奈何せんや』と歌つて壇を下るなどは蓋し他の追從を許さゞるもの」と言へるなど殊に興味深きを覺ゆるなり。



都下學生聯合演說大會は此年二月四日高等工業にて開かれたるを嚆矢とし我部よりは青木得三氏赴き「聲援を論じて犧牲の精神に及ぶ」の演說を以て當日の月桂冠を贏ち得たりしが我校に於ても三十九年一月二十七日嚶鳴堂に於てその第一回を開きたり。當時記して曰く、「今日此事ある決して一時的感興の生む所に非ず。素より口舌の末技を問ふにあらざるや又明か也。吾人が聞かんと欲するは責任ある青年の衷心なり。信念を有し堂々と之を表白する勇氣ある眞人の聲なり。向陵一千兒のみが天下の俊秀に非ず、隱れたる社會には鳳雛あり伏龍あり、廣く都下各校の代表者を招きて其の眞聲に聞き、吾人が抱懷を吐露して共に相知りて異日我邦に立つに至らば啻に吾人の幸のみにあらざる也」と。其の主旨とする所今日なほ異を見ず。當日は學習院、高商、高工、高師の四校辯士と本校石川鐵雄氏(アンクルトムスキヤビンを讀む)、川越丈雄氏(國民的性格に對する一疑問)、大學生青木氏(日本民族の將來を想ふ)、前田氏(書生の教育論)、法學士大河平氏(日本民族の膨脹的資格)の九演說あり、部報子の紹介批評周到にして熱烈眞摯の餘韻今なほ耳朶をうつが如く殊に青木氏は流麗典雅のアートに於て前田氏は着實痛切なる內容に於て共に當日の白眉たりき。

かくの如く新に發展し新に施設する所多かりしが、此の年の最大事件にしてやがて一高歷史の光榮は十一月二十五日午後零時半より第一大教場に於て開かれたる校風問題演說會なり。校風論は此頃に至りて遂に激烈なる論戰となれり。藤村氏の死は魚住氏の自殺論を生み傳說制度に盲從せずして自家心靈の權威によらんとの宣言は雄々しくなされたり。從來の

校風論は校風を論じたるが故に校風を動かす能はざりき。今や人生を論じ心靈を說きて校風は大に促進せられたり。小數の個人主義者が熱烈大膽痛切にその所論を發表するに對し堂々之を評せしは唯出羽八郎(青木)氏あるのみ。校友の一般は徒に不徹底に囂々し陰然之を非議しその難點の如きも個人主義者の之を反駁せる文中に於て漸く見るを得。魚住氏は第百四十二號校友會雜誌に於て自己の態度を闡明し「我個人主義は個性主義也、個性主義は人を人として見、制度の奴隷となさゞる主義也。或者は個人主義を以て懷疑主義破壞主義又は利己主義となす、何ぞ然らん、人を知らんとする者は先づ我を知らざるべからず、我れ我を知りて後に背定すべき者と否定すべき者と明知せらる、或は一切を否定せんも豫期すべからず或は一切を背定せんも知るべからず。人間心靈の前に崩壞する者は自ら崩壞する者なり朽ちたる者は新人の前に堪へざる也、又個人主義を以て非社會的主義とし客觀的意識を缺ける者となすは個人なるもの、人間なるものを知らざるなり、見よ世界史上最も個人的意識明瞭なりし基督、釋迦は最も博愛的平等的社會的意識に富みしに非ずや。我を知りて人を知り社會を知り團體を知る、自己より外界に向ふはこれ個人主義の取る道なり。既に自己を知るは人を知ることなり。故に我の結論は man の結論なり。こゝに自信定り活動生ず、個人主義の道德は道德夫自身にして權威なからざるべからず。社會、國家、父母、教會等の名を借るものは未だし」と言へり。安倍能成氏また「個人主義を論ず」の一文あり。水野武太郎氏「校風如何」を論じて俠と眞摯とを說けるあり。魚住氏はその立脚地主義を宣明せし後今や具體的の事件に對し、三十八年十月を以て「個人主義の見地に立ちて方今の校風問題を解釋し進んで皆寄宿制度の廢止に論及す」といふ一文を公にせり。曰く「吾人は彼の一派の慷慨家の悲觀に與せず、彼等に一味の眞摯あり惜しむらくは思想變遷の必然的原則を解せず唯慷慨するのみ、彼等の根本的謬見は樸茂簡素の氣風を無上の理想となし之に勝る者を求めざること其一也、現時の規範を過去の歷史に尋ぬること其二也、その必然の結論として精神的光彩を理解する能力を失ひ從て內容實質の價値に向つて盲目となり、其言ふ處經世的なれども極めて淺薄にして外界の刺戟に會はずんば發動せず、彼等の籠城主義は保守思想の反



動的現象にして、兎も角も一個不文の信條となるだけの時日を賦與せられ獨斷的に之を眞理と敬崇し茲に校風神聖論を生じたり。然れども人間の器械たらざる限り心靈に自由の憧憬の存する限り斯くの如き法權は遂に深刻なる懷疑を蒙らざるを得ず、今日校風衰へたりとなすの現象を評せしめよ、第一文學詩歌流行するに至れりと。これ却て賀すべし、文學詩歌を輕視するは人生を侮蔑する者也、趣味の神聖と高遠とに其魂わなゝくに至らば懦弱優長の風は自ら忍ぶべからざるに至らん。我校學生の趣味に於て野生兒たるは其罪全く趣味を賤みその薫陶機關を與へざりし者にあり。第二の難者又曰く宗教哲學の論議囂しくして悲哀煩悶を訴ふる薄志の徒加はり慷慨の士去つて隱遁家を生ぜりとこれ亦賀すべし。此現象は從來心外の事象に引かれて進退せし無意義の者が漸く覺醒して深刻なる反省をなすに至りし結果なり。殊に我校思想界の氣風常に實驗的自發的にしてペダンチックを排するは吾人の欣喜に堪へざる所、願くは未だ假定の偶像を有せざる無邪氣の兒心に理想の炬火を點じて東西の疑問に突進せむ、あはれ籠城と自治とを歌ふて何の日まで其兒戲を續けんとする乎、小さい哉校風論、諸君何ぞ來りて吾人と共に輕佻なる現代に向て眞摯至誠を說き瞑想と苦悶との彼岸に渺茫たる廣野の橫たはることを唱へざる。然らば天下風をなして吾人の校風の深遠なるに驚嘆せむ。第三の難者曰く運動の衰退を如何と。之れ誠に喜ぶべき現象にあらず希くは共に其興隆を盡せん。たゞ運動も亦文藝と同じく趣味の問題なり之を忘れて他に强制し或は校風の後援を賴んで野次を集合するの謂ならんか吾人はその合理的なるを見ざる也。第四に曰く通學生の增加は校風沈滯の明證也と、否これ却て寄宿寮そのものゝ構成に掩ふべからざる誤謬の橫はれる明證也。皆寄宿制度是也。個人の自由を尊重し人格の敬すべき所以を知つて一日も早く皆寄宿制度廢止を實行せば、籠の戶を開かれて靑天を喜ぶ者は、雲雀のみにあらず、あはれ閑寂の境なく瞑想の時なく覺悟の機なき生活に傾向趣味相反せる者と共棲せざるべからず、入りては此の不快無味あり、出でゝは社會に處する吾人の覺悟既に成れり、吾人は何の日まで此制度の下に呻吟せざる可らざる乎。されども誤解する勿れ吾人は寄宿寮全廢說を唱ふる者に非ず、寮の存在を德とする者には須く其願ふ所に從はしめ

よ、畢竟する自由寄宿制度の主張に外ならざるなり、最後に第五の問者現はれて曰はん汝の言の如くんば校風の定義如何と。校風の內容は不文にして流動無礙たらざるべからず。而してそは唯々充實の氣韻也、芳香響なくして人を打つ底のものならざる可らず、所謂一高健兒の赤門を潛るに及んで能く昔日の意氣を留むるもの幾何ぞ、內より發せざる注入の校風的道念安んぞ久しきに堪へむ、校風に屈して眞我の聲を聞く能はざる程の者が學校を出でて社會の大潮に同化せらるるは當然のことたり、願くは一千の校友に自由を與へよ、而して其方法は自由の光榮を知悉せしむること一也、其保證を與ふること二也、一は深大なる宗教倫理的自覺の鼓吹によりてのみ得らるべく二は皆寄宿制度廢止によりて得らるべし」と。たとへば直に神と基督とにより自由の信仰樹立を唱へしルーテルが法王に反抗するに至りし如し。自治寮創設當時の先輩は彼等の熱烈なる意氣生々たる精神を以て先づ籠城主義者なりき、而して籠城主義の校風ありき。然れども校風の繼承は漸く無意味の繼承となり之に加ふるに時代思潮は日に月に轉變して寮生の精神は益々校風の精神と遠ざかりぬ。個人の自由を說き人格の權威を叫びし魚住氏は今や昂然として痛烈に皆寄宿制度の壓制に反抗しぬ。法王廳の僧官が憤慨且つ狼狽せし如く所謂校風論者も今更の如くに湧き立ち暴力を魚住氏に加へんとの風評さへ高くなりぬ。論說欄に於て鶴見祐輔氏は「余の校風觀」と題し僞個人論者、僞校風論者を排して眞摯にして人格ある運動家を以て校風の中心となし雅量に始まつて誠實に終るべきを論じ、福井利吉郎氏は魚住氏を評して愛校心なき者とし、忠君愛國を校風の宗本と述べ、宮本和吉氏は更に福井氏の論を評して個人主義を宣揚したり。時に校內の輿論愈々喧然たり一夜寮務室樓上に校友會各部委員相會して策を議し大勢殆んど魚住氏に非ならんとする間に立ちて獨り文藝部委員安倍能成氏の毅然として個人心靈の權威を叫ぶあり遂に十一月十日全寮茶話會となりぬ。鶴見氏の感情的分子多し、結論の前提として引用したる材料は多くその選擇を誤まれり、及び實際應用上の缺點等の數條を擧げて魚住氏の誤を打つあり、金井清、大井靜雄の兩氏亦個人主義を攻擊する所あり、遂に魚住氏はその蒲柳の質を以て三十五分の間火の如き熱辯を振ひぬ。校風論者は論旨の不徹底なる憂



あり、個人論者は一家の感情に馳する恨あり、兩々互に主張を戰はして向陵思潮界頓に活氣を呈して又沈滯の色を餘さず。然れども誤解は誤解を生み混亂は混亂を起す、兩論者相互に了解して相爭ふにあらずんば百千度の論議如何の效果かある、若し夫れ甲論乙駁底止する處を知らず情熱して當初の目的を忘れ相拮抗するに至らばその害惡救ふ可らざらむ。今氣を平かにし意を正しうして客觀的見地より兩者の主張を觀るに其の相去ること天地霄壤の甚しきあるにあらず、若し一朝にして互に其の眞意を了解せば綽然たる者あるべきなり。然るに不幸にして今や眞面目なる兩論者正に誤解の途上にあるを感得せざるを得ず。これ我辯論部委員の深く憂ひて校風問題演說會を開ける所以なり。

十一月二十五日午後零時半一大教場は人を以て滿ち倫理講堂亦空席なし。校を憂うるの士は堂に滿ち眞摯の氣は磅礴たり。鶴見委員開會の趣旨を明かにし靜肅相論じて健兒の體面を保たれん事を望む。永野武太郎氏は個人主義を攻擊して眞正の校風を稜々たる俠骨と赤子の眞摯とに見、山下清氏は校風須く心靈意識の上に立つべきを述べ、翠川潔氏は魚住氏を駁し加福均三氏は魚住氏の一論文は對寮の惡感情之を生みしものなる故前提に於て誤れり、而も此の人を誤りし第一歩は罪多少寮生にあり魚住君に與へられたる印象は今日尙新入生に與へられつゝあるにあらずやと叫び、大井靜雄氏は國家社會主義の見地より校風を論じ、左海猪平氏は皆寄宿制度に對して魚住君の如く悲觀せず又一般寮生の如く樂觀せず益々改正進歩せしむべしとの見解を發表し、大學阿部次郎氏は吾人が天職に對する眞面目なる態度に理想の校風を見、寄宿制度は是認すれども皆寄宿制度は却つて寮に對する冷淡家を生ずるものなりとて此二者を混同するの妄を辯じ、宮崎一氏は個人主義者を打つて運動部選手を敬仰し、江木定男氏は魚住氏を辯護して人は魚住が寮を知らざる故に之を誤解すと云ふ、然れども若し魚住をして寮に入らしめば吾人彼が一層激烈なる論文を物せんを怖る、魚住の知らざる弊害實に驚くべきものあり、ストームの如き最も痛嘆すべしと論じ、石橋茂氏は校風の內容の進歩すべきを曰ひ自由民權の思想と武士道の精神が根本をなし來れる校風は運動の方面に表はれて自由なる活動獻身の精神となり思想界にては此兩者よく相助け來り近

時人生其物に對する問題に變移せしを以て進歩の階梯とし、大學吉村謙一郎氏は團體主義を唱へ、内田孝藏氏は人身攻擊に走り、大學丸山鶴吉氏は熱誠眞摯の實例を擧げて之を校友の共通性となさん事を望み、安部能成氏は校風とは造るべからずして生ずべき者也、予と雖も過去の寮風を無視するにあらず只其弊害を弊害といふのみ、余は運動家思想家共にその眞面目なる點に於て之を尊敬す、要するに吾人は雷同を非とし自己心靈の意識を尊ぶ故に校風の如きは人皆自己を基礎として改進し眞面目を以て態度となさば自ら來りて花を結ばんと說き、大學青木得三氏は魚住氏を駁して皆寄宿制度を辯護し魚住君の以て自家心靈絶對の權威なりとする萬人共通の要求を余は本能といはん、各人其本能を滿足するはしき自由自治は至らんと結論せるは本能の何たるを知らざるものなりと叫ぶや魚住影雄氏は躍つて壇に上り肉體的本能と精神的本能には明確なる區劃あるにあらずや、詭辯を廢せよ、自己心靈に歸れ！と颯として共の熱烈感情に走せたる聲色は一種の凄味を覺えしめぬ。最後には大學前田多門氏穆健にして眞面目なる仲裁をなして曰く歴史は萬事に命令すべからずと雖人類の經驗として吾人は之を尊敬す、學校の團體は制度法規の産物にして一部校風論者の言ふ如く國家家庭の如き密接の關係あるものに非ざれども、中に集りし千余人は皆これ熱血漲る青春兒、各人の活氣は凝つて一箇の氣を釀し玆に各人の氣質とは別箇なる一種の氣風の生ずるは自然ならずや。可否を云ふは止めよこれ事實なり。個人を尊ぶが故に校風を認めずと云ふは事實を無視せる也、個人主義者たる安倍君より今日建設的論議を聞き一方運動部選手に人格として尊ぶべき數氏を發見し得るの今、この兩端の人健全なる校風の爲に手を取りて進まば近き將來に希望の光を見るなり。しからば土崩すべきは似而非校風と憎むべき蠻風にして純粹眞面目なる校風は個人主義の提するテストの前に依然巍々として山の如きものあらむ」と。

皆寄宿制度は明治三十四年以後實施せられし者にて當時の志士は却て之が前途を憂ひたり。魚住氏が皆寄宿制度廢止を叫ぶや之を寄宿廢止と誤解せる者ありしかど要するに個人主義團體主義の爭なり、而して制限なき自由の演壇はあらゆる



思想に開かれて玆に潔き戰は戰はれたり。素より半日の論議は說の是非を斷ずべからずとするも以て兩者の誠意を通じ誤解を融和し得たるは確かなり。たゞ眞摯至誠自己の信ずる所を直截に表白すれば勇者の事は足る。時こそ最後の審判者なれ。生命ある主義は時を經て愈々榮え活力乏しき說は日を追ひて地に墜つ。當時より未だ十年を經ざる今日に於て見るも思半に過ぐるものあり。且つ當日個人主義を駁せる人も多くは魚住氏の眞摯に感じ一方ストーム等の弊害を指摘することを痛切、いづれも校風内容の進歩すべきを言ひぬ。新人の前に舊き皮相は破れざるを得ず、誠に前田氏の云へるが如し「土崩すべきは似而非校風と憎むべき蠻風」となり。暴飲ストームの如きは既に凋落の道にあり、その弊風の影ひそみ眞摯と氣慨陵上に滿つるに及びわが校風は完全に達せん。この度校風問題演說會の擧や靜粛にして堂々五に信ずる處を述べて大勢の赴く所を示したり「我一高健兒は校の思潮問題に關して演說會を開き以て此問題の解決を大人君子の態度を以て討議したり、吾人は我一高健兒の眞摯を見たり、至誠を見たり之を我校の青史に錄して永へに誇るべし」とは當時校友會雜誌にあらはれたる文藝委員の批評にして吾等亦その贅言に非らざるを知るなり。

## 三、新渡戸校長就任の年以後

明治三十九年より明治四十四年まで
（明治三十九年度）

### ▽第八代委員　金井清、蘆田均、大井靜雄

練習會は前代と比して稍々寂寞の感なきにあらざれども或は即席題を課し又朗讀研究會を創めて晩翠、楊牛等の名文を誦し討論會また衰へざりき。擬國會は四月二十八日開かれ日程等前回に比すれば大に複雜となり小學校令中改正法律案（尋常小學の修業年限を六ケ年とし高等小學は一ケ年若くは二ケ年とす）、家屋稅法案樺太賣却法案、臺灣自治法案、文官任用令改正に關する建議案（矢野眞君外三名提出）、衆議院議員選擧法中改正法律案（大井靜雄君外三名提出）等あり、議

長は石橋茂氏にして內閣總理大臣は法學博士高橋作衛氏なり、當日漫錄の一に曰く、荒川代議士家屋稅に反對也とて滔々として其理由を述ぶ、曰く「公共家屋たる向陵寄宿寮は稅を免れても梅月や門前やカフェーは負擔が重くなり栗饅、天ぷら西洋料理に多大の影響を及ぼす故本員は此法案に大反對なり」と。勿論一般の論議は極めて堂々着實にして此の如きは要するに漫錄の一たるのみ。

向陵歷史に取り殊に我部の多大の影響を及ぼせしは新渡戸稻造先生の校長として臨まれし事なり。十月二日嚶鳴堂に於て今村老校長を送り新渡戸校長を迎ふるの會あり。席上新校長は訓へて宣く「今日は師弟の情誼すたれて恰も敵同士の觀あり。されど "To thee, be all men heroes, every woman pure, and each place a temple." 人間事物の美點を見、胸襟を開いて相交りたきものなり。諸君の現はるゝは自己のみによるに非ず所謂四邊の雰圍氣(トモスフィア)による也、願くば此周圍に城壁を築くなく襟懷落々としての性格の修養にこれ努めよ」と。更に誌上「籠城主義と Sociality」とに就て述べ給はく「昔日の道德はおしなべて保守的退嬰的なり。之に活動的分子を加へ Culture と restraint 相並行せしめざるべからず。一高の籠城主義がよく其效果を致せる所以の者は畢竟個人の精神的倫理的要求に契合せる時期に於て一千人の青年が相會したるによる。Gidding の所謂 Cultural association の最も堅固なるは宗教團體、及び我が籠城主義等なるが其弊の存する處また顧みざるべからず。一、同主義の者にあらざれば一切入れずとの長所に伴ひ同主義の者は強い團體中に收めんとす。二、Crowding のみにて spiritual sympathy あるに非ずんば Intimacy 成る能はず、三、高慢心を起し易し。四、動ともすれば單調に陷り向上進歩の遲々たること。これらの點に注意して團體の秩序を攪亂せざる限り可成異分子の收容をも事とせよ。己と異を唱ふる者あらば其是非の檢覈は問はずして一も二もなく排除するの傲岸をなす勿れ。Sociality は要するに「長者に交れ」なり。心と心、人と人との接觸はこれを措きて又他に法あらんや」と。客歲魚住氏等の個人主義叫ばるゝや所謂籠城主義者は以て校風を危くする者とせり。今先生の「四圍と交る」ソシアリテーを唱へらるゝや所謂校風論者は



籠城の根底を害ふものとして憤るものありき。然れども彼の倫理講堂裏、我國文武の典型田村將軍と菅公の像を仰ぎ一度びは尊敬稽首すれど直に何となく物足らぬ氣のして此文武を動かす根底の力を求めんとせる人々には今や新渡戸先生の其二宵像の間に立つて靈の修養を說かるゝに至り玆に其の進むべき道の示されて會心の讃仰を禁じ得ざりき。木下校長の下に紅燃ゆるが如き武士的氣慨を養ひ狩野校長の下に沈毅篤學の風起りし我校生徒は今や新渡戸校長の下に精神的積極的に性格を修養せんとす。而して辯論部は最初より心を傾けて新校長を迎へぬ。これその過去の思潮の常に進取積極的たるより見て怪むに足らざる所なり。明治四十年一月三十日の大會に於て黑田欽哉氏は「荒川の清流」と題し吾人の進むべき道は唯一途 Sociality あるのみと論ぜり。其他當時の演說者に安倍能成、稻垣平太郎、藤井武、三村起一、翠川潔、吉植庄亮、宮崎一等の諸氏あり。殊に記念すべき大會は十二月十日にして巡禮の旅を終へて露西亞より歸りし德富健次郎先生「勝の哀」と題して雀ケ丘に立ちたる奈翁、奉天戰後の兒玉將軍の心中ひそめる悲哀の感を察し煩悶の情を思ひ槿花一朝の榮を求めずして永劫の生命を求むるは一日を猶豫せざる嚴肅なる問題なりと叫ばれ其の熱烈鬼神も爲に感動し、かくの如く聽衆の衷心を動かせる演說は一高演壇未だ他に見ざる處と稱せらる。

第二回聯合大會は二月二十三日高師、高商、高工、外語、慶應、早稻田の六校に本校の藤井武氏（亡びざる國民）、大井靜雄氏（尊德翁を懷ふ）、大學の川越丈雄氏（桑港事件と國民の膨脹）、鶴見祐輔氏（日本海々戰の回顧）を加へて十名。就中鶴見氏は如何なる大戰にも之に先つて斃れし愛國者あり、之に續いて立ちし愛國者あり、我國に於ても日本海々戰に先つて松陰あり甲東あり、又馬場辰猪あり、此戰の後繼者は吾人現代の青年にあらずや。愛國心とは政治家のひろぐる大風呂敷にあらず、自己の修養向上を勵みてこの修養せられたる自己を更に大なる目的に捧げんとする獻身の至情なり云々と論じ部報子をして「君の論を聞いて立たざる者は大和民族にあらざるなり、君の辯を聞いて動かざる者は神州男兒にあらざる也」と三嘆せしめぬ。新渡戸先生最後に起ちて「膨脹的國民の品性」に就て述べらるゝ所ありき。

▽**第九代委員　黒田欽哉、稲垣平太郎、三村起一**（明治四十年度）

朗讀會、討論會、練習會依然たり。四月十六日の練習會に於て野次を排す（阿部良夫氏）、對外試合に就て（芦田均氏）、野球部選手を思ふ（三村委員）等の演題を見るは如何に運動部に對して熱心なりしかを示すものと云べし。大會には田中徹（歴史の教訓）、阿部良夫（歴史の價値を論ず）、三村起一（一向一揆）、吉植庄亮（余が禁酒の由來）、吉野信次（Quo vadis に現れたるネロ及び基督者）等あり。

前年度委員の頃より向陵論壇は幾分か其辯論の風を變へぬ。前田氏等の時代は演說の構造に注意し質實に富み論理を重んぜる研究的のものなりしが芦田氏等以後に至り漸く流麗典雅、措辭の妙を極め情韻漂渺たるの趣を備へ來りぬ。嬋麗花の如き絢爛の言句人をして恍惚たらしめ寓意複雜にして無韻の抒情詩を聞くの感あらしむる一高辯論部の特色を馴致せると共に、それに伴ひ叙景くだ〳〵しく全篇朦朧として其主意ある處を捕捉し難く聽者の心を引けども腹底記憶に止まること少き弊をも致せり。斯の如き長短の特色ある一高辯論は後森戸氏時代に其全盛に達せるが如く今日なほ其影響を見るなり。然れども如何なる時代をも通じて眞摯なる論題と熱誠なる態度とは我部不變の特長なりとす。

擬國會は四月二十七日開會。日程議事共に整然たり。酒專賣法律案、南滿洲鐵道買收法律案、蘭領ボルネオ島租借法律案、試驗制度廢止建議案、郡制廢止法律案、刀劍其の他古代美術品保護に關する請願等あり。議長金井氏、總理大臣は高橋博士、宮島岩崎高田の諸學士大臣たり、自由黨は大井氏、保守黨は芦田氏、中立派は沼田照義氏之れを統率し花々しき論戰あり。日程に入るに先ち當時足尾事件にて幸德某等家宅捜索を受けし事ありしを以て自由黨代議士稲垣、横山の兩氏は現内閣が社會主義者に對する態度を詰問して「現内閣は本年に至り突如社會主義者に迫害を加へ其の行爲人物の如何を顧みず曖昧なる事件を捕へ來て猥に彼等を虐待し徒に警察權を濫用して得たりとなす、社會主義は政府の壓迫强ければ强き程反動として其の勢猖獗を極むるにあらずや」と向陵代議士の一言に後年の事を思ひ合して吾人戰慄を禁じ得ざるものあり。



聯合大會は十月十九日開かれぬ。從來二月に開きたりし此會は嚴寒と日沒迄の時間短きとの故に今年より秋期とするに決しぬ。この日大學芦田均氏は「吾人が安立の地位」は永遠の命を與ふる意力の發展現實の生活なりと叫び、丸山鶴吉氏は「吾は得んとしては失はんとせり」と題し、「新渡戸博士嘗て『淋しさの情（ローンリネス）を說明して此情は人なき處にも喧擾せる群集の中にも吾人に來る、吾人の之より離れんとするは宜しからず靈性の吾人の内に燃熾する形跡あらむ限りは淋しさの情は時として起り來るを免れず』と謂へり。かかる淋しさの情精神的煩悶は現代青年の多く經驗する處、かくて彼等は高き遠き完き或物に憧憬して獨り困しみ痛切にかの淋しさの情を味ひ人格思慕の道を辿り、而して此靈性の發動に達したる青年は思想のあまりに遙にして現實の我のあまりに低きに失望して苦悶し、遂に或者は自暴自棄に陷り、他の眞面目なる青年は益々向上の道を進みて自ら會心の友を求め來れり。而して友を人格の人に求めて互に光明に憧る者もあれど一方には又友を求めんとして得ず、求めて溫かならずして苦悶する者と徒に自己の小なるを感じ失望せる者との二種は其數極めて多からん、吾も或はこの後者に屬する者なり。あゝ人格の下に服するはいかに男らしき態度ぞや、吾人は徒に自己の小に失望して躊躇する事をやめ人格の友の下に降りて其教を仰げと主張するもの也、先づ一切を吐露して人格に突貫せよ」と。これ丸山氏自らの痛切に感じたる經驗、衷心の苦痛を披瀝せられしものにして其熱誠後人を動かすと共に友情に對する痛切の論といはざるべからず。明治四十一年二月谷山先生に代りて畔柳都太郎先生わが部々長に就任せられたり。

▽**第十代委員　吉植庄亮、岩切重雄、吉野信次**（明治四十一年度）

練習會は甚だ盛にして多きは十四人、少きも六人の登壇者あり、常に九名十名を數ふれども討論會、朗讀會の如きは今

は開かるゝ事なかりき。委員の外に中村忠充、河野通利、中屋重治、山口政二、森戸辰男の諸氏あり、殊に阿部良夫、佐野秀之助の兩氏は二部の人なれどもその辯論に熱心なる感ずべきの餘りなり。辯論は極めて普遍的にして自己の所信を發表し又知識の傳播をなすもの、焉んぞ一部に限らるるものならんや。此の事屢々言はれしと雖も我辯論界に活躍せし二部の人は古今たゞ此の二氏を見るのみ。

九月新學年初めの大會に本部紹介の例ありしが此年より其體裁を整へて紹介演說會となし、吉野信次氏は本部を以て高き趣味と清き友情とを養ふ修養的團體(カルチュラルアソシエーション)なりとし其他吉植庄亮氏(我ストーム觀)、三村起一氏(一高的短髪黨)及び大學金井清氏(向上の二路)、石橋茂氏(大いに思想界に雄飛せよ)、前田多門氏(新入諸君を迎ふ)の六氏演說に於て人格に於て向陵辯論部を紹介する所ありぬ。

聯合大會は十月二十四日早大、高商、高工、帝大の四校を迎へて開かれ阿部良夫氏は理學に志して尙ほ且つ「向上と悲哀」を說き吉野委員は「ウオルヅウオルスの永生の歌」を引きて靈魂不滅を說き、青木氏は「民衆制か共和制か」を以て、前田氏は「公民としての學生」を以て共に大學生としての最後の演說をなしぬ。これ等の演說を錄するや叮嚀なりと雖も今や昔日の如く演說の構造技巧の批評は部報より迹を絕てり。吉植委員は擊劍の宿將、岩切委員は寮の名議長、吉野委員は熱烈なる信仰者、孰れも演壇に立つや其の內容と雄辯とを以て都下に重きをなしたりしが、專ら演說の內容に省みて辯論術を研究練磨すること極めて乏しき現時我部の情勢は此時代より既にその因を見るなり。

秋日光行軍に際し宇都宮師範及び栃木中學に聘せられて演說會を開き共に盛會を極めたりき。

## ▽第十一代委員　森戸辰男、膳桂之助、澤田廉三（明治四十二年度）

委員三氏、前委員の外中屋重治、河野通利、佐藤繁彦、河上丈太郎、三谷隆正の諸氏ありて多士濟々練習會榮え、大會



にも三谷氏の「インメモリアムに表はれたるテニソンの友情」、河上氏の「形式と內容」等あり。他校の演說大會に赴きても深遠なる內容を含む華麗の辯論を以て常に異彩を放ち人をして往年の前田鶴見時代と並稱せしむ。されど今や辯論部は著しく宗教的內的に赴き死を思ひ謙遜なる信仰を語り、客觀的に外界の事を論ずること少く從つて自然直接の寮政治にも遠ざかれるやの觀なきにあらず。膳氏の「李兵衛論」に於て「吾人假令一の李兵衛として平凡なる一生を送らんも願くは人に知られんとするに非ず靜かに信念の色香を天に誇る野邊の菜花の如くあらん」と云ひ森戸氏が「一日の花」に於て個々の使命の尊きを述べて小者弱者の犧牲に及び最後に「賢明なる諸君は高位高官を得て社會を指導するの人たられよ、不肖予の如きは綠深き谷邊に人知れず咲いて人知れず散る一本の百合の花とならん、一日限りの百合の花は五月の闌にいと麗し、たとへその日に斃れ死すとも光輝の草と花とにてありき」と叫びしは當時わが部の思潮を最も能く代表せらるものなり。平凡人の犧牲、小さき清き生涯、專ら to be に向ひし當時の部員諸氏を有するは我部の最も光榮ある頁の一たり。校風論と多く關する所なしと雖もその志す處は人生の大問題自ら校風の美を飾れるものなり。而して其の辯舌や信仰の聲を詩と音樂に乘せて行くもの流麗花の如きものありき。

縱の會は此年より始まりぬ。遠く修辯會の昔より歷代の幹事委員の在京者を集め校長部長等の臨席を乞ひこれら先輩に新委員を紹介し所謂縱(たて)の歡談をなすものにして三月十三日多加羅亭に開かれて約二十名會せり。

讀書演說會は其の第一回を二月二十五日開かれ Plato's Phaedo (森戸氏) Zwischen den Zeilen (立澤剛氏) Asthätische Erziehung (大學石川鐵雄氏)、小公子(岩切氏)、Alt-und nennodische Erziehungsweisheit (三村氏) Thoreau's Walden と一茶の俳句（大學前田多門氏）等の紹介及それに就いての感想を述べられ極めて有益なる結果を及しぬ、かゝる演說會を開くに至りしも或は新渡戸先生の感化にあらざるか。

以上の二會と擬國會とは前委員の考案を新委員の實行せるものゝ如し。擬國會は四月二十四日嚶鳴堂に開かれ日程の複

雜前日の比にあらず。議事としては外國航路補助法案、勞働者外國渡航禁止法案、工場法案（中屋重治君外十五名提出）徵兵令改正に關する建議案（膳桂之助君外二名提出）、漢字廢止に關する建議案（萩原貞光君外一名提出）文藝院設立に關する請願等あり。鶴見祐輔君の外交に關する質問をなすあり。議長は三村氏、首相は高橋博士、外務宮島法學士、內務兼司法上野法學士、文部中西法學士、大藏長島法學士、陸軍村上法學士にして畔柳先生は遞信兼農商務大臣、丸山先生は海軍大臣をつとめられ、改進黨は吉植氏、保守黨は吉野氏、中立派は岩切氏之を率ゐ互に堂々の陣を張りき。議事日程に入りて漢字廢止案は否決、次いで總理大臣の施設方針演說あり、工場法案は第二讀會に廻され文藝院設立案は否決され、鶴見代議士外交に關する長質問あり。老猾宮島外相の之を揶揄し去るあり。遂に航海補助法案の討論中改進黨より彈劾上奏文は提出されたり。此の夜懇親會は四十餘名を會して違例の盛會なりしが此會より酒を用ふる事を廢せり。こは禁酒演說を以て鳴る吉植氏ありしが故ならんも痛飲淋漓以て悲歌慷慨する所謂豪傑風次第に校內に衰へ殊にわが部に於ては眞面目なる宗教的人士多かりしを以て玆に斷然酒を廢し得たるなり。これ素より新渡戶先生の薰化によるならんも亦我部先輩の人格による多からざらんや。あゝ酒の害や甚し、而して其の害の說かれたるや舊し。今に至つて漸くわが部に酒なきの會あり、遲しと雖も豈に賀せざるべけんや。

擬國會は修辯會時代より先輩の苦心して起し來れるものにて次第に體裁も整ひ來りしが此回を最後としてまた今日迄開かゝる事なかりき。吾人その理由を審にせずと雖も既にわが部の地步校內に固くして辯論の意義認めらるゝに至りしと、當時の先輩の甚だ內的宗教的に眞摯にして擬國會の如き幾分か野次的遊戲的政治的なるを開くに懶かりしが故なるべきか。吾人は此時以來擬國會を中止せるの格別不可なるを見ず今後再び之を開くの亦不可なるを知らざる也。

紹介演說會は九月二十三日、聯合大會は十月三十日いづれも盛大に開かれぬ。後者に於ては前揭の一日の花（森戶氏）あり。當日の白眉とうたはれ又中屋氏は「弱者の希ひ」に於て弱者の使命は强者の爲に滅ぼして其大をなすにあり故に弱者と强者とに使命の連關ありと論ぜしは當時の思潮をあらはし、鶴見法學士の「有名無名の死」來賓竹越與三郎氏の「伊藤公を思ふ」はいづれも十月二十六日夕日赤き哈爾賓の野に碧血そめし伊藤公を悼みてなり、我壇上眞摯廉潔の老政治家を思ふの熱誠なる叫は彼殪れて四日の後に薄暗き嚶鳴堂の四壁に響きしなり。

明治四十二年紀念祭夜の茶話會は當初龍城主義者の毅然として自治寮を創めしと、三十八年校風問題演說會と共に思ふに一高歷史の三光榮たり。此夜末弘嚴太郎氏、石本惠吉氏等の諸君は「新渡戶先生を過信せずや」とて先生を無責任なる校長、八方美人主義者として痛く攻擊する所あり。前田多門氏等の熱涙を揮つて先生を讃仰する心を吐露するあり。遂に先生は再び壇上に現はれ給ひ先づ例の如く「卓上に時計を置き教授服の袖をユラリと拂ひ徐ろに語り給ひぬ。その樣常と異ならず。」末弘、石本二氏の直言して憚らざりしを賞し校長としての覺悟を示され一高生徒として考も行動も飽く迄純潔に男らしくあらん事を望まれ最後にトムブラウンの話を引き「余も今後一千の人が學校を出て二十年三十年を經し後一人たりとも昔の事を思ひ出し彼の時にしか言ひたり此の節にかく述べたりと思出しくるゝ人あらばそが最大の滿足たり又希望たり」とて壇を下られし時は滿場聞として聲なく歎息感激、先生に慊焉たりの人も今や心よりの讃仰を禁じ得ざるに至り、石本氏の如きも今は熱心なる先生の follower となりぬ。而して始より先生を思慕せし我辯論部の愈々愛着の熱情を燃したるは勿論なり。



## ▽第十二代委員　河合榮治郎、河上丈太郎、鈴木憲三（明治四十三年度）

河合氏は歷史に趣味を有し論理を重んずるロマンチスト、河上氏は痩軀野に叫ぶ豫言者の趣あり、前代を受けて愈々健實なる我部の歷史を飾りぬ。即ち華麗にして動ともすれば簡明を缺く抽象論を今少し實際的たらしめんと努力し、批評を復興し又種々の會合を起してわが部の內容を豐富にし殊に河合氏の友情談は我部茶話會に一種なつかしき引きつくる空氣

を與へ以て部員相互の個人的親睦を進むる處ありき。

郊外演說會を四月二十五日に、英語演說會を五月二十四日に始めて開き、卒業生を送りし從來の練習會を臺々送別演說會と銘打つて河合委員の送別の辭に次で及川榮左衛門、山口政二、佐藤重彦其他森戸、吉植、膳、澤田、岩切等の諸氏その楸欖の花散り、柏の葉綠濃きかげに過せし年日の眞摯にして赤心より出づる感想を吐露して向陵に別を告ぐるあり、紹介演說會には委員三氏と芹田、三村、大井の三大學生の演說あり、聯合大會には凡て十五席、其うち我部河野通利氏は「寂寥なる建築師」を、河上丈太郎「アナトテの豫言者」を說き大學生には吉植氏（男の世界と女の世界）、宮崎氏（石の叫）あり。練習會は眞摯の響を傳ふれども其人數稍々少、大會には竹田武男（光と水）、鈴木一郎（刹那）、植野勳（捨小舟）、岡上守道（「立て」より「啓け」に）、奥秋雅則（一途）の諸氏あり。殊に鶴見、丸山の兩法學士を招き我等に親しく近き先輩の社會に出でゝの眞摯なる感想を聞くを得たるは最も喜ぶべく、鶴見氏は「Tragedy of Corea」を讀みて植民政策の眞諦を思ひ」、丸山氏は特種部落の實情を說かれて爲に聽衆過半の涙を嚥みぬ。

向ケ岡に櫻咲く頃二高辯論部の諸士は柔道擊劍の選手が悽慘なる活劇を演じて試合せしと前後して四月六日を以て嚶鳴堂に一高二高聯合演說大會は和氣靄々たる間に開かれ、文武性質こそ多少異なれ共に男子の意氣を示しぬ、我部よりの辯士は膳（開會の辭）森戸（黑潮）澤田（平和の曙光）、吉植（悲しめる强者）及び大學黑田（勝敗論）の諸氏にて盛會を極め且つ二高諸君を待遇すること甚だ懇切なりき。此他中學生聯合演說會を企つる等多事なる一年なりしなり。

## ▽第十三代委員　小林正一郎、岡上守道、奥秋雅則（明治四十四年度）

二月一日新舊委員辭任就任の大會ははしなくも天下の物議を釀しぬ。ヤスヤナポリヤナより歸りて飛ばず鳴かず柏谷に



田園生活をなせる德富健次郎先生は此日五つ紋の羽織を着し豐頰黑髯眞摯の風貌を壇上にあらはし「謀反論」と題して水も洩さぬ大演說をなし、窓にすがり壇上辯士の後方にまで躍坐せる滿場の聽衆をして咳嗽一つ發せしめず、演說終りて數秒始めて迅雷の如き拍手第一大敎場の薄暗を破りぬ。吾人未だ嘗て斯の如き雄辯を聞かず。而かも此の演說の一端を傳へ聞ける人々は沸然責めて曰く、かゝる論向陵に於てなさしむべからずと、又曰く聽衆は何が故に起ちてその中止を要求せざりしやと。淺薄なる哉見や、怖るべき哉間接の誤解や。思ふに一高生徒ほど人格を尊重して靜肅に演說を聞く者はあらざるべし。殊に眞摯なる演說者の肉聲は健實にして眞摯なる一高健兒の胸に最も正當に共鳴し得るなり。此を以て他に出でゝ演說せざる蘆花先生も我壇上には快諾して來り、頃者幸德秋水等の大逆事件判決に關する切實なる滿腔の感想を述べられしなり。先生は自らその血管中に勤王の血滔々たるを明言せり。而して國に諫臣なきを憂ふるは支那の古聖と雖も然かせざりしならんや。政府の壓迫は社會主義者を無政府主義者たらしめたりとの言は既に明治四十年の擬國會に於て向陵代議士の憂ひし處にあらずや、死刑廢止を唱へられしはこれトルストイの同じく唱ふる說にあらずや。加ふるに最後に於て事物の表面に眩せらるゝなく「健兒よ希くは人格を修養したまへ」と叫ばれしにあらずや。心情摯實にして健全なる判斷力を有する吾人これが爲に人格に火こそ燃やされたれ、皇室に對し國家に對し不敬無秩序の念を起す餘地存せざるなり。さるを直接演說を聞かざる人の容易く憤慨するあり、事また文部省に聞え委員も進退を伺ひ校友も心配せしが、新渡戸先生は「我輩は既に取るべきの手續をなしたり諸君は安心して勉强し給へ」といはれて遂に畔柳部長と共に譴責に處せられ給ひぬ。これ我部の誠に恐懼措く能はざる所なり。我部名士を聘するに人格高く學識深き人あるも官吏又は官學の學者等所謂「安全なる人」にあらずんば許されず。一高生はしかく判斷力を缺かざる也、思想はしかく型にはむべからざる也。吾人幸に寛大なる校長を戴く、請ひて許されざる事なからんも再び此の敬愛する師父に譴責の汚名を蒙らすに忍びず。文部省の方針一層自由となるにあらずんば我部演壇亦若干の束縛を免れざる也。

此事影響したるや否や此年の練習會は比較的寂寥を極め時に二三名を見るのみの事さへありしが其の内容の眞摯たる吾人の衷心に響きて部報子の所謂「嬉しさに涙こぼるゝ」なりき。我部は依然として質に於て衰へず。大會には栗田好雄（曉の夢）龜井貫一郎（橄欖の一葉を）松本實三（權威ある生活）川野秀松（自然と修養）矢内原忠雄（單純なる心）倉田百三（欲求と力）の諸氏あり。殊に倉田氏は若き哲學者の眞摯を以て向陵論壇の異彩たりき。されど一般は宗教的文藝的にして内容と共に演題も詩的となり、内容の一句を引きて題とするものをも生じぬ。又或る書の紹介、自然の叙景等に詳しくして自己の説を Scientific に構成する事少き弊も前代よりの勢として多少あらはれしが如し。

讀書演説會には Hugh Black's Friendship を讀む（小林正一郎氏）エピクテタスの教訓（小野清一郎氏）バーカーの「亡びつゝある英國」をよむ（河合榮治郎氏）あり。幻燈を用ひて堀、三並、島田、齋藤諸教授の講演あり。送別演説會には鈴木一郎、竹田、植野、鈴木憲三、小野の諸氏及び河上氏はトルストイを想ひ河合氏は「屋根裏の三年間」と題して向陵が何等の束縛もせず自由（リベリー）なる生活をなさしめたるを感謝し屋根裏の超越的（トランセンデンタル）なる趣を述べ更に一高に於て眞の人らしき人と成る事を教へられたること、美しき友情、讃美の心を學びし事等を説き丘の三年は吾人將來の活動の基礎を作るものにして一生の中最も内容の充實せるものなるべきを論じ餘韻嫋々として彼の愛着限りなき向陵演壇を去れり。九日來りて紹介演説會には三委員及び大學、膳、森戸、黒田三氏、並に文學士安倍能成氏登壇し、就中岡上委員は「聖地の靴」と題し瞑想修養的の一高を紹介し此の聖地に入れる者は宜しく靴を脱いで先づ心を正すべしと論じ、安倍文學士は素朴なる風丰學質の辯を以て「わがまどひ」を述べられき。秋の聯合大會には七校の辯士來り我部よりは奥秋（開會の辭）松本（愛の生涯）岡上（煙のゆくへ）大學生澤田（國際平和と國民の聲）吉野（放任と享受）諸氏出席して我部の歴史を飾りぬ。

▽第十四代委員、井口孝親、稲垣長悟郎、矢内原忠雄（明治四十五年度）



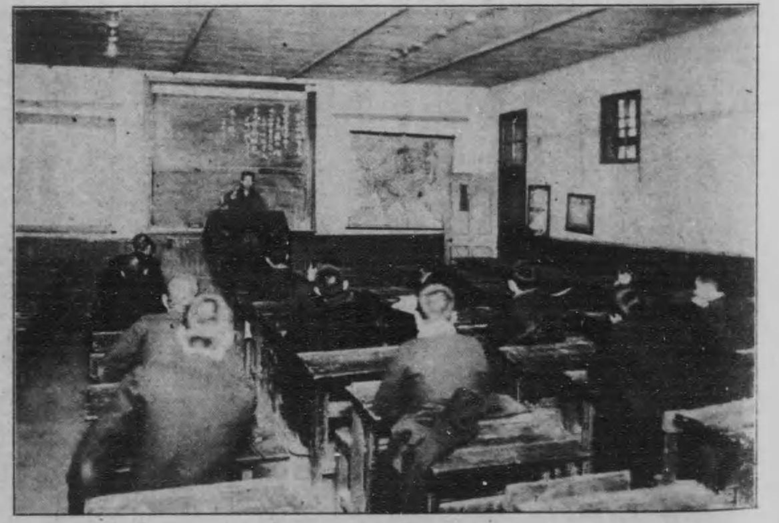
去にし日魚住氏等の叫びし個性主義（インディビヂュアリズム）は我部に流れては從前よりも一層自由に己を知り人となるの道を講ずるに至り文藝部にありては文苑解放せられて現代生活の刺戟を求むる色彩多く加はりぬ。共に校風論の範圍を出でしは一なり。たゞ人道に立てるものは大なる地盤に於て校風を進むる者なれども、やゝ耽溺的となれるの觀ある文藝部は校友の快しとする所にあらざりき。又籠城主義の流れて盲動的形式尊奉者を出せし如く個性主義は漸くに移りて他を顧みざる冷淡なる利己主義を生じぬ。對外試合には頻に破れ且つ一方葛目氏の如きを出すあり。新渡戸先生交換教授として米國に赴かれし留守の寂寥あり。殊に文藝部委員が就任の辭に於て「吾人はひたすらに學生時代享樂主義を思ふ」と記せるはこれ亦校友の喜ぶ所にあらざりき。かくて不平不滿の聲隅々に起りたるも多くの人は事勿れ主義を取りて聲を發するにものうく、聲を出して己が見を述ぶる者も低聲蟹の泡ふく如くならずんば互に誤解し不完全なる判斷と卑屈なる諂辯とを以て情を相激するなり。我部委員は此事態を嘆き一は無頓着なる思想に熱を加へ一は各人をして其思ふ所を公正に述べしめ以て一高校風を正しきに導かん事を期して校風に關する演説會を開くに至れり。往年の校風問題演説會は堂々たる個人主義と團體主義との思想の爭ひ、而して當時向陵の空氣は活氣横溢たるものありき。今回は學生時代享樂自覺といふも畢竟するに生活の一種の氣分に過ぎず。對象とする所漠たり、たゞ沈滯せる空氣を破りて各人の主義を喚起せんとす、形成異なれども要するに校を思ひて紛々たる議論をして互に判斷せしめんとの志に外ならず。我等豈に徒に辯を好み事を起す者ならんや。

四月三十日校風に關する演説會は午後三時より十時半まで、夕食の時三十分の休憩をなせるのみにて徹頭徹尾眞摯の裡に催されぬ。あゝ一高生の眞摯を思ひては我れ涙なき能はざる也。當日十有九の辯士が額に汗し筋肉顫ひて演説するや五百の聽衆は眼に涙し手に汗を握りて聞きぬ。あゝ眞摯よ純潔よ。これ一高の生命なり。矢内原委員は開會の辭を述べ吾人は過去に生きずして現在及將來に生き憂りなき良心の自覺に立つべきを叫び、宮崎龍介氏は我校學生間に統一缺けたるなきやを憂へ、篠原文治氏は皆寄宿制度勵行を主張し、岩切重雄氏（大學）は誤用せらたれる眞面目なる語の下に團體を思はざ

る個人的修養の流行する結果元氣の銷沈する傾なきやと警告し、君島清吉氏は一高校風の進歩を論じて一高我の建設に及び、井口委員はストームを攻擊し村上千葉氏は校風の各個人の美しき性格の心的結合（メンタルコンビネーション）なるべきを論じ、片野重脩氏は世間の批難を排して我校風の向上を說き自由は責任を伴ふと論じて團體の規約を尊重し、目崎憲司氏亦校風の全體より觀て進歩せるを論じ、秦豐吉氏は學生時代享樂主義の當事者にして衆皆期待する所ありしに靑木先輩の氏に宛てたる同情の書簡を朗讀するに止め、龜井貫一郎氏は「唯友を愛せよ」と叫び、山口大學生は十六ケ條の事實問題を擧げて痛切に論じ、小松博美氏は僞善と不活潑とを罵り、石田三治氏は禁酒を叫びて一高に入りてより飲酒の風に染む者多きを慨き、稻垣委員は自治を叫び、佐藤重賢氏は未成人主義使命の自覺を說き、松本實三氏は一言校風の前途に光明を認め、岡上守道氏はナポレオンの靴磨きは交際場裡に於て靴に於ては主人を人後に落ちざらしむるだけの務あり、群集の一人たる余等にも猶爲すべき事言ふべき事ありとて所謂「一個の宗教信者、モラリスト、善良なる寮生」の淸き叫を述べられき。現狀を嘆けるあり向上の跡を喜べるあれども愛寮の至誠たるや一、眞摯の叫びたるや一、誠に「潔き戰は戰はれ」て校風の益々向上し行くべきを思はしめぬ。廢るべきは封建時代の弊習のみ、天地と共なる眞理は永遠に朽ちざる也。余等は校風に就て絕望せず又安からざるに安しと言ふものにあらず。素より多くの缺點、精錬（リファイン）さるべき點ありと雖もなほ一高の最も愛すべく感謝すべきを知る。たゞ各自自ら任ずるの赤誠、これ我部の喚起せんとせし處のみ、利己的無頓着にして「演說會を開くも駄目なり」と頭より冷笑し去るが如き者には我れ與せず。我等は辯を好むにあらざる也、止むを得ざるなり。

校風演說會の如きは時に出づる彗星の如し、我部の常の榮、空に輝く星たるは實に陰暗なる二大敎場に於て每週開かるる練習會なり。大家の說を頭より聞きて我が養となす寄生蟲の類にあらず、自ら感じ自ら悶え自ら嘆きし自發的心靈の經驗は飾りなき口より率然として出さるゝなり。語る者聞く者は與へ受くるものにあらずして共に求むる者なり、然り靑年の純潔眞摯なる心を以て永遠の眞理世界の平和を求むるなり。梁塵爲に舞ひ四壁爲に鳴る。クラスを異にし性格常ならざる人々の一堂に會して眞摯の聲を發す何ものの嚴肅かこれに過ぎん。此年始めは會する者誠に寥々、委員は有志者を訪ひて纔にその出席を乞ふの樣なりしが九月よりは吾人の相顧みて奇蹟とせし程多數の來會者あり、或は五十又三十、競ひて壇に登る誠に再び興隆の氣運欝然たるものあり。七月畏くも我國民の最も尊崇敬愛し奉る明治天皇の御登遐あらせらるゝあり九月乃木將軍の自刄してみあとを追ふあり。又我等向陵の父たる新渡戸先生の大使命を終へて米國より歸朝せらるるあり、支那の風雲、合衆國の大統領選擧、外界の吾人の心に觸るゝ亦深きものあり、我論壇常に賑ひぬ。殊に新渡戸先生が野依、押川の徒の誹毀にあひ給ひ一高生徒の鼎の輕重亦社會の云々する處とならんとせし時の如き我練習會に幾度か善人の悲の論ぜられ、感激の心の說かれ新渡戸先生を思慕するの演說のなされしぞ。遂に寮委員の名を以て新聞紙上天下に告ぐる所ありしが眞に柏葉兒の眞摯は寧ろ數回の練習會に見るを得べきなり。依然として新渡戸先生は大なり、一高生は社會のレベルより高くしてその批議に超





練習會

越せるなり。我歴史に於て内に溢るゝ眞摯の叫を以て外なる批難を壓したる事今回に止らざるなり、事態斯くの如し我等の演壇に立つや眞率にして措辭の妙を問ふ暇なかりしが如し。其處に眞に人を動かす大雄辯あり然し乍らその餘波はまた構成に苦心せざる冗長の演說を出すに至りし如し。意先づ至らざるべからざるは勿論と雖も辯亦至らざるべからず。簡明にして徒に繰返し言を云はず内容を整頓して發表する辯論術の練習を輕んずべからず。さはれ我部辯論の華麗に馳せず多大の眞率を加へ來りし事は最も喜ぶべき現象にして徒に美辭麗句をつらねて人を恍惚たらしむるよりも直截痛切直に肺腑をつくの風を養ふに至れり。演說の内容も從つて多少實際的の方面加はり「高尙なる政治趣味」の鼓吹せられし事一再にして止らず。されども全體に健全なる宗教的信念實驗の聲そのイデヤの主なる流たり。近代人は評して中世の人と云はん、然れどもこれ中世のみにあらず永遠に涉り古今に通じて朽ちざる眞理を探求する者たるなり。我等はかくの如くにして練習會を開くこと約二十回、委員三氏を除き登壇者の多くは一二年の人々なりき。

學期始終の茶話會も從前より續きて行はれ、電燈消えて蠟燭を點じ玆に信仰、友情、讀書、校風、時事問題等につきて胸襟を開き有益にして且つ愉快なる一夜を過すを常とす。縱の會はこれ新舊委員歴代の懇親會、送別演說會は三年の春を向ケ岡に迎へて今や卒業せんとする人が眞摯なる最後の感想を殘さるゝもの、紹介演說會には新入生に辯論部を通じて親はるゝ眞摯なる向陵の一面を紹介するもの、共に從來の如く前者に栗田好雄（杖持ち代へて）小林正一郎（去るに臨みて）新聞智啓（花は梢に咲き果は地に歸る）岡上守道（マリアとマルタ）奥秋雅則（敗者の叫ぶ一高校風觀）あり。後者に井口（新來三百の諸氏を迎へて）矢内原（野心論）、稲垣（人々皆有通天道）大學河合榮治郎（悲しみの心を憶ふ）三村起一（一人の心萬人の心）及び法學士丸山鶴吉（弱者の聲）の諸氏あり。

四十五年四月七日野球試合に無殘の敗を見し夜嚶鳴堂に於て一高三高聯合演說大會を開き本校よりは小林（遠來の客を迎ふ）、井口（背教者の孤影）大學宮崎（榮譽ある孤立）法學士青木（現時文壇に對する吾人の希望）等の諸氏あり。此日



野球敗れしを以て夜の演說會は中止せられたしとの交涉あり。わが部は開けり。而して晝間獰猛なる野次に驚きし三高教授は「此夜余は眞摯靜肅なる一高を見るを得たり」と言ひその印象を抱いて歸洛せしにあらずや。

都下學生聯合大會も例の如く運動場に霜をく頃十一月三日を以て開かれ日大、外語、明大、早大、中央、高商、慶應、法政の諸學來り會し我部よりは稲垣（開會の辭）河野秀松（一閃）矢内原（Music of Humanity）及び大學河上（たゝかひ）法學士芦田（沒曉漢を排するの論）等の諸氏あり、他校辯士に比しその想その辯共に向陵の特長と名譽とを發揮しぬ。此の會に於て他校辯士の常に德として大に感謝するは會場の不備に拘らず聽衆の靜肅眞面目なることなり。これ辯士の人格を重んじある範圍を越えざる限り其の思ふ處を十分に述べしむる向陵生徒の雅量と眞摯とによるもの、即ち一高辯論部は獨り辯者のみならず聽衆に於て其眞摯を見其美を濟せるなり。これ他校演說會と比して最も著しき所なり。

此年に於て他校の大會に招かれて赴きし者、矢内原（慶應）、松本（高商）、新聞（明大）、稲垣（二六新聞）、井口（中央新聞）、小島（日大）、龜井（早大）、の諸氏あり。校内大會に出でし人、井口（小村侯を憶ふ）、秦豐吉（タンホイゼルとハムレット）、坂田裕（タイタニック號の沈沒より黑溝臺の會戰を憶ふ）、世良田進（巖の姿）、久能木愼治（モウリス島の悲劇を偲ぶ）等の諸氏あり内に外に金玉の聲を發しぬ。讀書演說會にはホルマン博士の「丁抹國民高等學校論」（三谷隆信）、オストワルド教授の「不死と個性」（大學岡上守道）シーレー教授の「英國膨脹論」（大學河合榮治郎）の三書紹介されぬ。殊に愉快なりしは十月二日、米國より歸られし新渡戸先生及び先生に隨行せし鶴見法學士の歡迎會を開きて其演說を乞ひ得しにあり。

例へば長き鎖の一環の如し。小は小なれどもこれ長き過去と遠き未來とを繼ぐの一環なり。自ら大なる環となる能はざりしも傳へ來れる眞摯の電流は遺憾なく未來の環に送り得しと信ず。後に大環起る時われらも小乍らその足場の一たりしを光榮とせん。かくの如くして我辯論部は新しき三名の委員に送りつがれぬ。

## 四、大正二年以降

**▽第十五代委員　篠原文治、藤澤親雄、金澤常雄**（四月より**蘆野弘**就任）（大正三年度）

新渡戸校長の辭職と、畔柳部長の退任とは此年我部の蒙れる二大打擊なりき。新渡戸校長辭職の顚末に關しては寮史に詳しければ今再びここに錄せずと雖、四月二十三日の生徒大會に始まりて五月一日の兩校長送迎晩餐會に終る一週日、全寮生が寢食を忘れ學業をも拋つてこの良校長を惜みし赤誠は永久に向陵史を飾る美談たるべし。就中寮誌に載するところ、矢内原委員を始めとして我部の全員の熱誠がこの運動を起すに與つて最も力ありきと言へるが如き、吾人は六年の昔を偲びて今更の如く先生の偉大なる人格と、我部の先人の純なる心緒との美しき諧調の跡を想はざるを得ず。御辭任後も先生は一高生の切なる乞を容れ毎月面會日を定められ絕えずその指導啓發を怠られざりき。

九月二十二日、長らく部長として我部を指導せられし畔柳先生亦任を退かれ給ひぬ。先生の溫乎たる人格は常に部員の讃仰憧憬する所となり我部又此の良部長の下將に大に爲すあらんとせしに突如としてこの事あり。然れども後任として新に寬厚なる速水先生を迎へ引續き今日に至れり。九月二十五日の懇親會は兩先生の送迎會とし、一夜を歡談に明せり。新渡戸畔柳兩先生今や共に官命を帶びて遠く海外にあり、今三十年の式典を迎ふるに當り吾人は遙に兩先生の健康を祝さんとす。

この打擊を受けたるにも拘らず此年の我部は新進市毛孝三、澤田謙、北岡壽逸、津田秀榮、野崎操、平井好一の諸君を迎へて大に活況を呈し毎練習會の登壇者常に六七名を下らず、寮生活も屢々論議の材料となれり。先輩河合、奥秋の兩氏亦屢々練習會を訪はれて、或は批評を試み或は親しく壇に立つて感想を述べられぬ。

校内大會を開くこと六度、篠原文治君は「この涙」と題して對校試合の精神を論じ、蘆野弘君は「青年の敵を許す」の題下



新渡戸校長に對する野依押川一派の攻擊を駁し、金澤常雄君は一粒の麥の寓話を引いて犧牲の精神を高調し、吉植庄司君は自然の聲を語つて友情の生活を述べ、平井好一君は「眞如の姿」の題下トルストイの死を論じ、澤田謙君は「聖なる功名の心」と題して功名心と感激の心との調和點を求め、津田秀榮君は「道に南北の祖なし東西密に相接す」の長論題を揭げて各自獨特の雄辯を振はれぬ。校外各所の聯合演說會に出でし人には世良田進（現代の努力と苦悶）、北川實三（ガーフィールドを懐ふ）、稻垣長悟郎（Stop and Think）吉植庄司（犧牲の悲哀と光榮）の諸氏あり。讀書演說會に於てはキング博士講演「合理的生活の原理」（蘆野弘）Carlyle の Sator Resartus（大學矢内原氏）Seligman の Economic Interpretation of History（大學河合氏）の諸書紹介せられたり。又年を起えたる一月五日には仙臺二高講堂に一高二高聯合演說會を開き蘆野弘（忍耐せよ）、久野木愼治（誕生の歌）、篠原文治（力なき聲）の三氏出演せり。

**▽第十六代委員　栗田大祿、市毛孝三、松本泰**（大正三年度）

前代の隆運を受けたる此年は又三委員の努力と西寮十番（後に南寮七番）に據れる英法二年平井好一、澤田謙、北岡壽逸、三樹樹三の諸氏の活動と相俟つて我壇上再び黃金時代を現出するに至れり。今當時の狀を稽ふるにこれ等の人々を大體分つて二種と爲すを得べし。一は基督者の一派にして一は自由思想家の群なり。主として後者に屬せる西寮十番の諸氏は猛烈なる讀書と絕えざる研鑽とによりて着々たる進歩の跡を演壇の上に示し、前者に屬せる金澤、市毛等の諸氏と相應じて盛に活躍せり。しかもこれ等の人々が皆打つて辯論部なる一丸となり渾然たる一の溫き友情團體を作りたりし事實は特に銘記すべき事なりとす。全部員融和協同して一の思想的友情團體をなすは前後を通じて變らざる我部の特徵なり。演說は好まざれども辯論部を愛する人々を有することも又我部の常に誇とする所、當時の如き毎學期始終のコンパに於ては談論風生、夜を徹するを常とせり。此前後を通じて最も大なる感化を我部員一般に及ぼされたるは新渡戸、内村の兩先生な

りき。鶴見、河合兩先輩又深き關係を我部に保たれ、鶴見氏は屢其宅に集會を催し、河合氏は殆ど毎回の練習會に出席せられたり。

春四月三高辯論部の招待を受けて京都帝大學生集會所に一高三高聯合演說會を開き市毛孝三(Humanity)野崎操(曉鐘)世良田進(孤憤)の三氏出演し又秋十月、天長節祝日の佳辰を卜して嚶鳴堂に都下各大學專門學校聯合演說會を催し參加校數十三に及び盛會を極めたり。此日本校辯士澤田謙氏は「憤る者」と題して熱辯を振ひ大學矢内原氏の「力の福音」と共に當日の白眉たりき。先輩宮崎一氏又遙に埼玉縣より上京せられて「ゾヒストの群」を語られたり。

稀有の大戰亂は此夏ボスニアの一角に其鋒火を擧げ須臾にして全歐洲を其渦中に入れ全世界の人類を電擊せり。若き日本は目醒めぬ。開國五十年、外來文明の吸收に日もこれ足らざりし日本は今や自ら立つて新なる地歩を開拓せざるべからず。科學に哲學に將た宗教に、果然此秋の練習會は大に振ひ、就中諸井貫一、小山秀三、初島茂男、尾見昭氏等の新進は各獨自なる思索の結果を携へて登壇し北岡壽逸、澤田謙、戸田龍雄、津田秀榮等先進の諸氏と伍して常に我壇上を賑せり。

かくて此の年も暮れなんとする十一月二十二日、掉尾を飾る擬國會は嚶鳴堂に開かれぬ。内閣總理大臣には法學博士鶴澤聰明氏を招き宮島次郎、岩崎勳、青木得三、丸山鶴吉、鶴見祐輔、大井靜雄、森戸辰男の諸先輩を閣僚に据え、急進(在野)、自由(政府)、統一(中立)の三黨には稻垣、奥秋、吉植、河合、澤田、矢内原、小林、河上、岩切、蘆野、松本、岡上、山口等學士及大學生の鏘々たる論客を網羅し　茲に我部創始以來の偉觀を呈せり。議案の主なるものには未成年者禁酒法案、衆議員議員選擧法改正案、學制改革建議案、羅馬字使用建議案等あり。就中當日の花と唱はれし急進黨議員河合榮治郎氏對外相鶴見祐輔氏の外交質問論戰なりき。今校友會雜誌の記事を借りて其狀を想見せんに「河合氏の辯や終始絢爛たる文辭と莊重なる態度を持し一抑一揚一擒一縱、或は澎湃として寄する怒濤の如く或は奔湍に激する渦流の如く、滔々として現代の大勢を論じ一轉して歴史的經過を說き、熱辯人を捉し去つて滿場聲なく壇上の人獨り天空を行く如し。



氏即ち堂を搖す喝采裡に壇を退くや蓦然として進み出でしは外相鶴見祐輔氏なり。先づ冒頭より前辯士河合君の論ずる所は是宛然擬國會に於ける一大學生の口吻に似たりと威壓し來り、機智辛辣、舌鋒鋭利、寸分の隙を見せず縱横の論旨を操りて優に外相の重味を見せ滿座唯唖然たらしめたり。この外交演說の質問及答辯は實に當日の双璧にして誠に龍虎相搏ち激浪を卷き雲霧を呼ぶ壯觀なりき」と。羅馬字使用問題も亦議論沸騰し且其論戰中文相森戸氏「政治家は良心に忠實ならざるべからず。故に我輩は今脫閣する者なり」と叫び、壇を蹴つて自由黨の席に入るの珍事あり。進んで選擧法改正問題に入るや兩派の折衝は白熱に達し遂に内閣彈劾案提出されんとするに至り果然詔勅降りて向陵議會の解散を命ぜらる。

その鏘々たる雄辯家を網羅せし點に於て、其規模の大、議案の多なりし點に於て、將又其討論の激烈なりし點に於て、此擬國會は前代に遠く其比を見ず。蓋し十數年に亘りて蓄積せられし我部の潛勢力の一時に爆發せりとも見るべきか。且又此會は獨り我部のみならず全寮の雄辯家を議員として網羅し傍聽者の數も我部主催の會として空前の多數を示したりき。其影響は從來沈滯を極めし總代會に及んで其の空氣に大なる刺戟を與へ爾來總代會毎に多くの建議案は提出せられ討論頗る盛となりたりといふ。而も此擬國會は遂に最後のものとなりて以後又其企なし。

讀書演說會は二回開かれ木村鷹太郎氏の「日本太古史」(澤田謙)、山田寅之助氏の「基督傳」(蘆野弘) Creasy の "The Battle of Waterloo" (大學、河合氏)、ドストエフスキーと露西亞文壇に就て (平井好一)、Norman Engel's "Great Illusion" と以賽亞書 (法學士森戸氏) の諸書紹介せられ又熱心なる委員の勸說によりて外國語練習演說會も數回催されたり。校内大會に出でたる人に市毛孝三 (我敢て個人主義者たらん)、野崎操 (英雄何處に在りや)、松本泰 (赤熱の鞭)、北岡壽逸 (四海同胞)、蘆野弘 (沈思の價値)、横山正博 (下駄の齒の跡)、山根要治 (何處より何處へ) の諸氏あり。他校の聯合演說會に赴きし辯士には淵上房太郎、三樹樹三、久野木愼治、岡崎應介、戸田龍雄、平井好一、津田秀榮の諸氏あり。

## ▽第十七代委員　諸井貫一、尾見昭、横山正博（大正四年度）

我部の行路既に坦々たり。殊に幾多の先輩が或は大學より、或は世務繁忙の暇を割いて屢〻練習會の壇に立たれしは部員をして勇氣百倍せしめぬ。先輩後進相親しむは古聖の夙に稱するところ、吾人我部に於てこれが好個の例を見たりと言ふも諡言に非ざるなり。

練習會は前年に比して稍淋しけれどもなほ新進小山秀三、簑田不二夫、蠟山政道、圓地與四松の諸氏の立たるゝあり。殊に三年戸田龍雄君は前後五回の長きにわたり友情論を語りて丘の三年の生活の尊き體驗を披瀝し、大學河合氏亦殆ど毎回の練習會を訪れて、自分の基督教。私と辯論。愛すること。愛せらるること。等の題下に憶出多き向陵生活の記憶を語つて常に聽者に多大の感動を與へられたり。遂に三月十二日研究會の壇上には「戰の將來を想ふ」と題して學生々活最後の雄辯を振はれぬ。「私の死の報知は鑛山の瓦斯の爆發と共に、又は工場の機械の破裂と共に傳へられるかも知れない。それも覺悟して居る。唯〻諸君や多くの人々の恩寵に報いたい。」斯くして氏の演說の最後に近づける時。語る者聽く者胸は共に熱し涙は何時か頰を傳はりぬ。向陵及我部の先輩に負へるや大、しかも我部を愛する事君が如く深く向陵を憶ふこと君が如く厚きは稀なり。工場監督官として東西奔走に寧日なかりし日も、官命を奉じて遠く米土に在りし日も向陵は常に君が夢寐にも忘るを得ざりし地なりき。氏今や自己の良心に忠ならんとし、斷然あらゆる繫索を斷ちて官を辭されぬ。吾人は將に刮目して氏が前途を待たんとす。

二月五日、自由討論會を催せり。論題は「吾人はスラブ、アングロサクソンの何れと提携すべきか」先づ論題の說明ありて三時半より討論に入るや、北風吹き荒み寒氣凜烈なれども甲論乙駁辯士聽衆共に熱し來り黃昏に至る迄登壇者二十を數へてなほ決せず。最後に河合先輩立ちて結論せらる。

一高三高聯合演說會は春四月四日。都下各大學專門學校聯合演說會は秋十一月二十日。共に櫻鳴堂裡盛大に擧行せられたり。前者には栗田大祿、津田秀榮、小山秀三の三氏登壇し、栗田君は惱める約百の生涯を語りて神を畏れ他を愛し人の中に我を見出し社會國家の中に我を生かしめよと叫び、津田君は迦葉の破顏を論じて正氣を得よ、學才策略卑竟これ末技と喝破し、翌年八月破風山中に悲壯なる最後を遂げられし小山君は强者の道程と題して力の强者と思想の强者とを比較せり。後者は氣淸涼、天紺碧そぞろ人心を沈靜ならしむる秋、來賓として增田義一氏を招き、先輩前田氏(Ding an sich)の出演を乞ひて盛大に開けり。參加校數十有五。本校初鳥茂男君は「興國亡國」と題して世界各國興亡の跡を論じ、帝大奥秋君は「ロマンチシズムの國より理想の國へ」と題して滔々たる向陵のロマンチシズムを難じ、冷靜なれ、批評的なれ、と敎へられたり。



卒業生送別演說會は例によりて五月二十一日第二大敎場に開かれ、三樹樹三、谷口精一、岡崎應介、北岡壽逸、澤田謙、戸田龍雄、津田秀榮、野崎操、平井好一、市毛孝三の十氏何れも堂々たる長辯を振つて三年の收穫を披瀝し、速水部長又一場の送別演說を試みられたり。九月新學年初頭には恒例紹介演說會を開く。尾見、諸井兩委員の紹介の辭に次で大學の篠原、矢內原、岡上三氏は第一義の生活と理想の把持を高調し、河合先輩最後に立つて歐洲に於ける人權伸張の徑路を語られたり。此夜の茶話會に我部の盛衰に關して議論沸騰す。尾見委員斷じて曰く、「我部批判の標準に廣さと深さとの二方面あり。吾人の求むるところ實に後者精神的方面の優越のみ」と。此言吾人これを今日に移して何の不可あるを見ず。然れども此兩者は決して相乖離するものに非ず。否我部の歷史の敎ふるところ、常に殆ど相伴へるを見るなり。

前學期多數の辯士を送りて、九月以後の練習會は其人數に於て多少寂寞を感じたれども、人性を論じ友情を語り永遠に憧るゝ深刻なる其內容は、蠟山政道、圓地與四松、八木澤善次、鈴木勇、河西太一郎等諸氏の熱烈眞摯なる辯と相俟ちて「今日の我部は其深さに於て決して所謂黃金時代に劣るものに非ず」と言ひし尾見氏の言を證せり。

讀書演說會に於ては尾見昭（永井博士の生命論とベルンハルヂの獨逸と次の戰爭を讀む）市毛孝三（パウル、ハイゼを

讀む）北岡壽逸（時務一家言と世界の變局を讀む）澤田謙（近松の戯曲を讀む）三樹樹三（明治初代に於ける民權思想の發達）の諸氏各溫著を傾けられ外國語練習會も前代に引つゞき行はれたり。

校内大會に出でたる人に諸井貫一、岡崎應介、初鳥茂男、尾見昭、深田養一、簑田不二夫、内藤純夫の諸氏あり。此頃より又部員相集りて郊外散歩を行ふこと初められたり。平和なる一日を豐かなる自然の抱擁の裡に過す、これ既に一の快事。況や伴ふは悉く是れ同志切磋の友、清談歡語知るべきのみ。この試みは以後現今に至るまで引續き行はれて部員相互の親睦を增すに與つて最も力あり。

**▽第十八代委員　圓地與四松、蠟山政道、鈴木勇**（大正五年度）

蠟山氏は眞摯なる學徒として、又此頃喧かりし農村問題の研究家、圓地氏は才辯縱横、博聞强志の活動家而して圓滿溫厚の君子鈴木氏はよく兩氏を輔け、相倚り相俟つて我部の爲めに盡瘁せらるゝところあり。前兩氏の如きは以後引續き今日に至る迄絶えず我部を指導輔翼せられつゝあり。

此年二月四月の練習會より每回終了後二三十分間交互に當日の演說の內容、アートに關して批評の交換をなす新らしき試をはじめたり。蓋し日を隔てたる研究會にては其印象稀薄となり、且時間の都合上充分に批評考究の暇なきによれり。時に世間文章の傾向も漸く選りて學者論客、在來の佶屈なる文章體を捨てゝ專ら平易なる口語體を用ふること漸く盛となれり。我部の演說も此影響によりて次第に所謂一高式の域を脫し來り流麗典雅なる修辭、巧妙なるアートの研究は殆ど閑却せられ、專ら內容の深さを貴ぶに至れり。これ又時代の風潮に伴ふ當然の結果なるべし。

當時東ガリシアの曠野、西白耳義の原頭に破竹の勢を以て聯合軍を擊破しつゝありし獨軍の優勢は我國の朝野に軍國主義の思想を傳へてこれに關する論議頗る盛なり。すなはち二月廿五日「將來我國は軍國主義を執る可きか」の討論題を揭げて全寮生の意見を問ふことゝせり。登壇者高等學校十二名大學七名五に平生の抱懷を吐露し、贊否交々、滿堂澄測たる生氣に充されぬ。大體に於て高等學校生の主張は「軍國主義執るべし」大學生は「軍國主義執るべからず」なりき。獨軍屈して旣に一年、國際に聯盟成りて平和の風全界にそよぐ今日「口に一人の絶對平和論を唱ふる迂者なく尙武の氣象辯士聽衆の面に皆躍動せり」と傳ふる當日の記錄を讀みて吾人唯ゞ時の力の偉大なるを思ふのみ。



遠來の野球部と共に上京し來れる三高辯論部との聯合演說會は四月四日嚶鳴堂に開かれたり。圓地委員の開會の辭に次ぎ、本校辯士吾妻榮君は「土の心」を語りて大自然の抱擁の裡其の偉大なる靈氣に觸れよと論じ、簑田不二夫君は「意味の世界より事實の世界へ」と題して、事實の世界は銀なり、意味の世界は金なり、この金の世界より銀の世界へ下り行くところにみじめなる浮世の歡を見る。然れども此銀の世界にこそ、この生活の國にこそ誠の生命あり眞の愛あるに非ずやと叫び、横山正博君は「壁を見つめて」の題下獨特の幽麗典雅なる辯を振つて美と力との充溢せる世界の裡に偉大なる自然偉大なる思想第一流の人格第一流の書物と交るによりて得らるる春の生活を述べたり。速水部長最後に立ちて今日の演說の悉くがロマンチシズムの高調なる事を指摘し、これぞ青年の特權と稱揚せられぬ。

送別演說會は五月廿五日開かれて高島得之（友情の經過）初鳥茂男（鏡中の花影）深田養一（懷疑の中より）石井謙三郎（淋しき旅路に）森島守人（平凡の三年）後藤秀兵（科學者としてのゲエテ）横山正博（力に飢ゑたる者）の諸君登壇せられ、九月二十六日の紹介演說會には先輩鶴見氏來つて「椰子實る國々」と題し淡々懸河の辯絢爛花の如き修辭を以て最近の南洋視察談を語られたり。

秋には例によりて都下各學校の聯合演說會を開き參加校數十有五。本校よりは安孫子理兵衞君出演（興國の青年とは何ぞや）來賓竹越三叉先生は如何なるべきか、如何なるべきかと題して得意の南進論を語られたり。

練習には始終よく振ひ殊に新學年に入りては寮生活、校風問題に關して論議せらるゝこと頗る多し。我部の演壇もと無

色彩を以て其特徴とす。其論題や決して動もすれば誤解さるゝ如き宗教友情談論の小範圍に限らるべきに非ず。向陵の一分子として小國家とも言ふべき向陵の批判を試むるに何の不可かある。否世界の形勢を論じ時局に批判を加ふる又妨げず。求むる所唯〻年若き者の特權たる眞摯と純潔とあるのみ。世は移り物は變る。我部の面目又將來又大に異なるものあらん。しかも眞摯と純潔とは前後を通じ永久に亘りて我部のモットーと稱して何の憚る所を見ざるなり。

任を辭するに當り圓地委員叫んで曰く「野球や競爭の試合に熱狂應援する寮生諸君。一年無慮二十餘回の對外試合をなす我部に對して何ぞそれ冷淡なる。我辯論部は決して少數部員のみの辯論部に非ず。一高の辯論部なり。三高との聯合演說會に又他校の聯合演說會に吾人の臨むや嘗て向陵を代表する者なる事を念頭より忘れたる事なし」と。此言亦現今に移すべし。

此年大會に出でたる人は鈴木勇（愛の理想）河西太一郎（孤憤）澤田輝武（人道的精神）井上貞藏（破巢の下完卵なし）の諸君あり。鈴木勇、圓地與四松、蠟山政道、河西太一郎、井上貞藏、前島熊吉の諸君は出でて他校の聯合演說會に語り讀書演說會に於ては「文明と哲學的精神」（八木澤善次）「フアウスト第一部」（圓地與四松）の二書紹介せられたり。

## ▽第十九代委員　田中誠二、杉本勝次、平野義太郎（大正六年度）

我部茲に十九の春を迎へて羽翼既に成りぬ。嘗ては第二大教場裡搖めく蠟燭の灯に熱せる頰を照されつゝ理想を語り友情を說ける人、今や既に社會の樞機に參して四方に活動しつゝあり。即ち向陵に於て先輩が抱きし理想と實社會に於ける經驗と果して如何なるかを聞かんと欲して例年の都下各校聯合演說會に代ふるに先輩招待演說會の新なる企を以てし、四月二十八日嚶鳴堂に會を開きて大なる成功を收め得たり。此日登壇せられたる先輩は前田多門、鶴見祐輔、森戸辰男の三氏。大學松本泰（吾人は何處を過ぎつゝあるか）本校平野義太郎（聖かれ、義しかれ、賢かれ）の二氏亦出演されたり。



前田氏は地方改良論の題下幾多無名の英雄が地方改良の事業に捧げたる努力の決して世に喝采せらるる政治家のそれに劣らざる例を示し、鶴見氏はネルソン、カブール、重成等の生涯を想ふて一箇の樫の實が長き日月を人の心の裡に育まれて遂には鬱蒼たる森林をなすに至ることを說き偉大なる信仰は書物に得られずして血と涙とに得らる、吾人は深き體驗に基く確固たる信念に根ささざるべからずと叫び、森戸氏は「平安を求めて」と題して、現今の社會的不安に勝る吾人內心の靈的不安を述べ、眞面目なる信仰による心の平安を求めたる後に眼を下界に轉じて社會的活動に入るべきを敎へられぬ。學窓を去つて五年又十年、一道脈々たる向陵精神は依然として諸先輩の心裡を貫流しつゝある事を知ると同時に、吾人が向陵に得たる愛と理想との精神こそ吾人が實社會の生活を深く淸く送るに必要缺く可らざるものなる事を敎へられぬ。

二月二十一日「基督敎と我國體とは果して兩立し得べきか」の論題を揭げて討論會を催す。基督敎と言ひ、國體と言ふ。共に信仰によりて其意義を有し來るもの、單なる客觀的立場より之を論じ得るものに非ず。果然論は熱せり。二十餘名の辯士、舌端悉く火を吐きぬ「吾人未だ嘗て此の如き眞摯なる態度、純潔なる思想の吐露、熱烈なる討論を見ず」と。部報子の言以て當時の狀況を想はしむ。

校風問題演說討論會は此年十一月復開かれたり。これより先我部並に興風會の名を以て揭示して曰く「自治寮ありて二十八星霜、皆寄宿制度布かれて十有七年。しかも近時校風の萎靡沈滯を言ふ者甚多し。抑如何なる原因有るによりて然るか。これ吾人の眞面目に靜思せざるべからざる所、よりて吾人は左の論題を揭げて寮生諸君と共に之を討議せんとす。一、我校風果して沈滯せりや。若し然りとせば其原因如何。二、我等が標榜せる皆寄宿制及自治制は如何なる狀態に有るか。若し不滿足なる點有らば其理由如何。三、今日の狀態に際して吾人は一高の將來の爲如何にすべきか。改むべきは如何なる點なりや。又少くとも新築さるべき寮の建物の設備は如何にすべきか。」と。當日午後三時半第二大教場は人を以て滿されぬ。寮生の面悉く緊張に輝けり。登壇者實に十有七名。そぞろに「校風沈滯の聲の聞ゆる間校風は敢て沈滯せず、

此聲絶ゆる時こそ向陵の爲悲むべし」と叫べる某君の言の眞なるを思はしめられぬ。最後に平野委員登壇。要するに衷心の自覺なり眞面目なりと重ねて校友の注意を喚起し、願はくは本日の事をして單なる議論に終らしむる勿れ。此感激に生き此自覺に徹せよと叫びて會を閉づ。時に午後八時。熱せる滿堂の聽衆は食事の時間をも忘れたりしなり。

野球部の西征に伴ひ此年の一高三高聯合滿說會は洛陽の地に開かれぬ。翌日の白熱戰を控へて風樓に滿つる宵、鶴見憲（若き者の誇）河西太一郎（人生第一義の問題）圓地與四松（王者の如くに）の三君何れも侃愕の辯を振つて克く我部の歷史に一段の光彩を添へられたり。一夜明くれば我應援隊は旗鼓を擁して三高校庭を襲はんとす。戰の前の美しき友情の交通吾人は玆に此會の有する意義の最も深きを覺ゆるなり。

三年生送別演說會は五月二十五日開かれ、岡俊次、安孫子理兵衞、鈴木勇、土井不曇、阿部秀之助、圓地與四松、前島熊吉の七氏何れも僞らざる三年の經驗を語り、蠟山氏又最後の研究會に「我は」と題して理智生活と情熱より來る信仰生活とを論じ進んで向陵の社會化に及び萬丈の氣焰を擧げて向陵論壇最後の辯を振はれたり。新學期初頭の紹介演說會には河合先輩來つて「新來三百の諸君を迎へて向陵生活の眞諦を論ず」の題下二時間の長きにわたりて或は自身の向陵生活の深刻なる經驗を語りて愛は闘なりと說き、或は苦しかりし信仰生活の告白をなして人生は不斷の戰なりと論ぜられぬ。

讀書演說會に於てはワグナーのシンブルライフ（小田垣光之輔）ファウラー博士のリトルバイリトル（高田休廣）カーライルのアルバイテン、ウント、ニヒトフエルツワイフエルン（大學、河西君）ヒルテイのゲハイムニスデルクラフト（松田享爾）雪嶺博士の世の中（安孫子理兵衞）貧乏物語（大學、澤田君）ゴリキイのコムレイド（八木澤善次）ルネバザンの死ぬる土と藤村の家（蠟山政道）カーライルのクロムウエル傳（大學、矢內原君）等の諸君紹介せられ、阿部秀之助、高田休廣、小田垣光之輔、菊池勇夫、吉川義太郎の諸氏は校內大會に鶴見憲、杉本勝次、平野義太郎等の諸氏は出でて校外の聯合演說會に何れも堂々の辯を振はれたり。



## ▽第二十代委員　川原次吉郎、小田垣光之輔、菊池勇夫　（大正七年度）

戰雲暗澹として收まらず、西歐五億の民は塗炭に困み飢饑に泣けど、禍亂を遠くへだてて其餘慶を受けたる帝國は、產業將た貿易に駿々たる進步を遂げて當に一大飛躍の機に遭逢せり、我部又委員其人を得たると西寮十番を中心とする三年生諸氏の熱心なる應援とに由り壇上頓に活氣を添へたり。前年末の校風演說會の餘響にや年初の練習會に校風論、自治寮問題に就て語らるること多し、又吉野博士大山郁夫氏等の先覺によりて紹介されたるデモクラシーの新思潮の研究も漸くに興りこれが眞面目なる考究の結果も屢〻發表さるゝに至れり。久しく閑却せられたりしアートの研究も稍復興され每學期末の研究會に於ては精細なる批評の交換の行はるゝ有り。

此一年は又頗る多事なりき。四月柔道部は多年の宿望熟して北青葉城下に戰ふ。我部亦之に先ずる五日二高講堂に一高二高聯合演說會を催せり。原彪之助君は流れ行く光、川原次吉郎君は我等何を要する乎、高田休廣君は新時代の新英雄を憶ふと題し何れも深遠なる思索の結果を語りて克く杜都十萬人士の期待に背かず。又同じき夜京都帝大學生集會所に開かれし一高三高演說會には岡崎嘉平太（生の白熱）小田垣光之輔（餘燼）の兩氏出でて熱辯又克く洛陽四十萬の夢を驚かせり。

五月十五月には早稻田の巨人大隈侯を招き都下各學校聯合演說會を催す。會する者總て十四校、本校辯士杉本君は荊棘の冠と題して愛の徹底と人格の完成を說き進んでヒューマニチイの爲の奉仕を高調し、當日の壓卷たりき。會正に酣なる頃大隈侯は悠然として老軀を壇上に運び、明治維新以來の日本文化史を說くこと頗る詳。萬丈の氣焰を擧げて大喝采裡に降壇せられたり。卒業生送別の演說會は六月七日開かる。飯島文宣君は向陵の地永遠に僥なれと語りて愛と犧牲との心を讃美し、藤井正君は醜き自己をして基督を見る事を得しめたるものは實に丘の三年生活なりきとて感謝の辭を捧げ、大河原達治君は自我の徹底を論じ、鞍橋重義君は自覺せよと叫んで最後に愛寮の辭を遺し、小田恪介君は文藝部に對する批評と校友會雜誌に對する希望を語り、川崎芳熊君は三年の生活に得たる三つの尊き言葉を述べて修道院としての向陵を論じ鶴

見憲君は失敗の三年と題して僞らざる三年の經驗を披瀝し橋寺太郎君は善の研究を讀むの題下三箇年の信仰生活と思索との告白をなして何れも懐しき丘を去りぬ。

此夏所謂米暴動は富山縣に起りて神戸大阪を掠し餘勢波及して帝都をも愕かせり。眼前此の秩序なき民衆の動搖を見更に滔々として寄せ來る外來の新思潮を想ふては健兒の胸裡又晏如たる能はず。新學期初頭の紹介演說會に又練習會の壇上に社稷の前途を想ひ帝國の將來を憂ふる清き叫は幾度か發せられぬ。皇國の存亡を賭せし日露の役終つて十年。外に又向陵兒の全精神を傾注せしむべき大目標なかりき。健兒の意自ら內に向ひて校風の論議ここに喧しくなりぬ、今や新時代の氣運は鬱然として興れり。思想の混亂人心の動搖今日の如く甚しきは非ず。强烈なる四圍の刺戟は鬱血兒をして空しく向陵の一角に蹋踏して眼を內にのみ注ぐを許さず。かるが故に校風論に關し自治賚問題に對して往年の如き議論の沸騰又望むべからざるに似たり。しかも吾人は決して之を以て向陵の意氣頽廢の故なりと斷ぜざるなり。徒に傳統の形骸に囚はるるを以て向陵の意氣こゝに得たりとなすその愚や憐むべし。記念祭も失へよ、白旗の應援も廢めよ。國を思ひ世を憂ふて一道脈々の向陵精神は斷じて此丘を去るものに非るなり。而も徒に眼を外に放つて、內己を省るに暇なきに至るも亦吾人の深く虞るゝ所。深き思索に根させる確固たる人生觀や熱き信仰や愛や友情や向陵三年を措きて吾人何處にか之を求めん。所謂「世間離れ」は終始我部の誇るべきモットーとして變らざる所なり。

此年の新なる試みとして練習會大會の開始時間を午後三時十五分として時刻の嚴守をはかれる事、五分間演說を數回試みたる事、十一月大會を生徒のみの演說會となして成功を收めたる事等あり。每大會後本館食堂に來賓を圍みて質問歡談に一夜を送る例も此前年頃よりはじめられたり。十二月大會に一部二年龍德柏君が登壇して中日兩國の將來に就て語れるは中國學生登壇の最初となす。これをして最後たらしめざるは兩國將來の爲吾人が切に留學生諸君に望んで止まざる所なり。

『大會には小田皆介（傳統の憧憬と立憲政治）菱沼勇（デモクラシーの傾向を論ず）石井錦樹（努力の死）山田止才三



（Life Stream）竹內德治（愛の進展）河原畯一郎（沈鐘）岡崎嘉平太（我國家觀）橋爪健（向陵に權威出でよ）等の諸君あり。大學蠟山岡地の兩氏亦屢練習會を訪うて其蘊蓄を傾けられ、又一年の沈默生活を送れる猪間驥一君は再び其雄姿を壇上に現して深刻骨に徹する數々の演說を試みたり。

讀書演說會も引續き行はれ牧牛の日蓮觀（石井錦樹）歎異鈔（原彪之助）フイヒテの「獨逸國民に告ぐ」（大學圓地氏）津村博士の「日本の社會改良」（大學井上氏）有島氏の「叛逆者」（山田止才三）平野義太郎氏の「善に就いての卑見」（川原次吉郎）コールの「戰時の勞働」（大學蠟山君）等の諸書紹介せられたり。春秋二回東京日々新聞社屋上に開かれし全國學生聯合演說會には菊池勇夫、川原次吉郎の兩氏出演し、菊池氏は夢見る胸、川原氏は目的としての努力と題し各々得意の辯を振へり。

## ▽第二十一代委員菱沼勇、河原畯一郎、竹內德治（大正八年度）

曠古の大亂も前年十一月を以て遂に其局を結びぬ、史上空前の大講和會議の開かるゝあり。國際に聯盟成つて恒久の平和こゝに保證せられたりと稱す。しかも一度眼を轉ずればリンデン街に赤旗飜りて第二次產業革命の幕はこゝに開かれんとし更に北スラブの國には世界の國境を破壞せんとするソビエットの政府の虎視眈々たる有り。

この大勢に刺戟せられて此一年間我思想界の動搖混亂又空前なるものありき、其初め單なるデモクラシー思想の宣傳に過ぎざりしもの一度產業界勃興の氣運に應ずるやこゝに俄然たる勞働運動の興起となり、同時に社會主義の研究、普通選擧の運動又一世を動かし來り解放と改造とは時代の標語となりぬ。

我校の內部又此年一月新二寮既に工を竣へ且近く將に三十年の記念祭を迎へんとして革新の氣運自ら鬱勃たるものあり則ち二月二十一日校風演說會を第二大教場に開く。計る所は新時代に伴ふ新なる校風の作興と喚起とに在り。果然十三名

の辯士の語るところ悉く因習の打破、新生命の樹立に非るはなし。理想としての自由寄宿制度が漸くに認めらるゝに至りしも注意すべき現象なりとす。

然りと雖砲聲を聞きつゝ書を講ずるの覺悟は前後を通じて常に變らざる我部のモットーとなすところ、此空前の時期に際しても尙且練習會の壇上に語らるゝ事は依然として信仰の叫、永遠への憧れ、眞摯なる研究の結果を其最も多きを占るを見る。しかもこれ決して吾人が勤きつゝある外圍に冷淡なる故に非ず。吾人が全精神を沒頭せしむべき第一義の問題の別に有するあればなり。大なる發展の前の深き沈潛の必要を感ずること愈々切なればなり。

三高との聯合演說會は例によりて四月五日夜嚶鳴堂に開けり。山田止戈三（禮拜と反抗）猪間驥一（率仕のこゝろ）川原次吉郎（開かれざる扉）の三氏熱辯を振つて滿堂の聽衆を醉はしめたり。會終つて辯論部の室なる和室七番に會する者兩校辯士を初め關係者無慮三十餘名。笑聲歡語室を搖がし翌日の野球戰を忘れたる如くなりき。

四月二十六日一高基督教青年會と聯合して內村鑑三先生を招き帝大基督教青年會館に特別講演會を催せり。先生柏木の寓居に退かれてより二十年、一日の如く聖書の研鑽に從事せられしが、一昨年一度基督再臨の信仰を揭げて青年會館の日曜講演の壇に立たれてより靈の渴きに惱める天下の青年は風を望んで其下に集り來り每週の講演常に千に近き聽者を得つゝあり。我校內又先生の說を聞かんとする者頗る多し。我部すなはち校內に大會を開いて先生を聘せんとせしも故ありて許されず。纔に會場を校外に移して許さるゝを得たり。此日聽衆を一高生及先輩大學生に限りしも尙ほ其數四百名に近く空前の盛會なりき。先生亦新武士道を說いてよく聽衆の渴望を滿し給ひぬ。

都下各學校聯合演說會は金風丘の上を訪づるゝ秋十一月一日嚶鳴堂に開かる。此會の例として參加學校の數多きに過ぐるより時間の不足を來してよく辯士をして其意を盡さしむる能はざる憾あり。則ち此日は特に招待學校を七校の少きに限りて好結果を收め得たりき。此日將に留學の途に上られんとせし東大助教授先輩森戸辰男氏は來つて「民衆へ」の題下先づ現下の思潮より說き起して高踏的なる在來の向陵精神を難じ、柏葉兒の驕慢なる心に一大痛棒を加へ、新らしき時代に應ずべき新なる良心の喚起を求め、向陵兒よ、特權の夢より醒めよ、民衆へ赴け、と叫び滿堂の健兒をして無限の感慨に耽らしめたり。實に貴き演說なりき。吾人は舊き向陵の死して新なる向陵の生れんとするに當り必ずや此演說が一の Turning Point をなしたるべきを信じて疑はざる者なり。此日我校河原畯一郎君は「豫言者を想ふ」と題し又將に大學を出でられんとする先輩蠟山氏は「新らしき思想に堪ゆる努力」と題し何れも眞摯なる熱辯を振はれたりき。

此年又前田多門、河合榮治郎兩先輩の外遊より歸朝さるゝあり、則ち五月大會には河合氏に乞ひて「米國に於ける社會基調」を、十月大會には前田氏を招きて「歐米視察談」をきけり。何れも獨特の興味ある觀察と流るゝ如き快辯に滿堂の聽衆に多大の滿足を與へられぬ。

大會に出でし人には小田垣光之輔（籠城主義の運命）增田幸一（涙の價値）不破武夫（歐洲戰爭の原因を研覈し因はれたる國家主義者の反省を促す）丸中一保（リンコルンを懷ふ）佐藤六郎（二宮先生に就きて）青木光二（新神の出現）等の諸氏あり。讀書演說會は每學期之を開きて河原畯一郎、長澤信之助、氷室吉平、奥平武彥大學山田止戈三等の諸氏出で殊に第三學期には部長速水先生親しく壇上に立たれて Perry's Modern Conflict of Ideals を紹介せられたり。

三年生送別演說會には白鳥勝介（向陵の民本化）瀧川政治郎（辯論部に望む）猪間驥一（此處に立つて居ります）馬場文翁（弱き者誠我名は男なりけり）菊池勇夫（三太郎と私）の諸君何れも懷しき三年の思出や感想を語りぬ。（十五代委員以降竹內德治記）



## 五、大正九年以降

### ▽第二十二代委員　奥平武彥、入江俊郎、青木光二（四月青木君歿後楠井隆三君就任）（大正九年度）

未曾有の大戰僅かに熄みたりと雖も戰時の好境に驕れる我が國民は徒らに過去の夢を追ひて世界思潮の大勢を察せず經濟界不況の兆漸く萠せり。此年始め我部の先輩河合榮治郎氏勞働問題に關して長上と相容れず憤然官を辭されし事及び前年「民衆へ」と絶叫して向陵一千の惰眠を醒まされし森戸辰男氏は「クロポトキンの社會思想の研究」なる論文を公にして朝憲紊亂の罪に問はれし事は痛く社會の耳目を聳動せるものなりき。特に兩氏の誘掖に預かりし我部否全向陵も亦之が爲めに甚大なる影響を蒙りたり。

時に情熱の人奥平、理智の人入江兩君に加ふるに謙讓なる青木君を迎へたる我部は前委員竹内、菱沼、河原の三君と共に新進楠井、川邊、前澤、羽生田、重田の諸君を得て大會に練習會に力强き歩みを續けたり。大學川原氏菊地氏又屢練習會を訪れて感想に寮生を啓發せらるゝ所ありき。

大會を開く事五たび、一月大會には岡實氏平和會議と勞働會議の題下に親しく政府代表の委員或は顧問として參加せられし會議の狀況を傳へ日本の國際的立場を明にされ二月大會には長谷川如是閑氏「思想と制度」について獨特の觀察を示し、國家と思想の關係に論及されたる事更に六月大會に於て先輩矢内原忠雄氏に乞ひて「自由人聯盟と大日本救世團」なる題下に講演を願へる等共に大いに聽衆を動かせるものなりき。

我部は例年三高と聯合演說會を行ひしが、此年帝大主催にて高等學校端艇競漕を墨堤にて擧行さるゝを機とし、四月三日喫鳴堂に於て一二三四六高校聯合演說會を催す。竹内德治（疑ふ心）菱沼勇（自由への憧憬）の二君洗練せられたる音聲とジェスチュアとを以て、其の深き内部生命の省察を語り出でらるゝや、滿堂の聽衆醉へるが如く、魅せられたり。會終りて中寮一番に小宴を開く。歡談盡くる所知らず燭灯を揭げて且つ談じ且つ語りぬ。

「五月二十五日送別演說會を開催す、今西芳之助、福光修一、氷室吉平、井上萬壽藏、越野菊雄、竹内德治、今井義三の諸君相共に己がじし、丘の三年の思出を語りぬ。



讀書演說會に於ては大西猪之介氏「囚はれたる經濟學」（竹内德治）「人生の歸趨」の著者としての河上氏（多田精一）August. Bebel; "My Life"（大學菊地氏）等紹介せられしが、我部は更に新しき企てを文藝講演會に採りぬ。美と醜と——藝術家の態度に就いて（奥平武彦）明るい世界と暗い世界（重田重保）は共にこの試みの收獲と稱す可く、武者小路實篤氏「私の信仰」の題下に新しき村の理想を語られしもこの講演會に於てなり。更に此年十一月九日杜翁家出の日を想起してこゝに記念講演會を開き米川正夫氏（「戰爭と平和」について）昇曙夢氏（ロシア文學史上のトルストイ）を招き人類の爲めの苦悶を苦みし、殉教者の一生を回顧したり。

校内大會に出でし人々には川邊一郎（存在の尊貴）好富正臣（民衆運動を一貫せる群集心理の研究）楠井隆三（純一なる心）大學蠟山政道（革命家の思ひ出をよむ）の諸君あり。

此處に特筆すべき事件あり。我部常に部員相互の友情を誇り、或は郊外散策に春の日の長きを樂み、或は讀書會に秋の長夜を明す類の交通ありしも尙高踏的貴族的の臭味を脫せず辯論のアートを蔑視して、内容偏重の狹路に踏み迷ひ「世間離れ」を以てモットーとせし我部が、社會見學なる計圖を起せる事之なり。或は新聞社を訪ね或は監獄を訪ひその他工場病院等の見學前後十數回の企てに成功し多きは人員二百に及び少きも亦百に近かりき。

此年文部省令による學年繰上げの擧ありて、九月以來辯論部亦振はざりき。されど二年生に多士濟々。鈴木恭一（山へ行つて）重田忠保（善を見出す心）土井重太郎（野心について）羽生田利朝（藝術生活）山際正道（愛の宣言）入江誠一郎（産兒制限について）の諸君相繼いで論壇に立ち我部の前途多望なるを思はしめぬ。

## ▽第二十三代委員　羽生田利朝、山際正道、重田忠保（六月辭任し鈴木恭一代る）（大正十年度）

學年繰上げの煩瑣の中に委員を受け繼ぎし三君の努力と西寮六番なる鈴木恭一、野口英一その他諸氏の援助と相俟つて

正月早々向陵論壇は非常なる活況を呈せり。

一月大會には最近歸朝の先輩青木得三氏「戰爭より平和へ」と題して流麗玉の如き音色を以て、氏が歐洲に目擊せる事實を語り、軍國主義の末路を述べ、世界平和の基調に說き及ばるるや、聽者恍惚として深き感激に浸りぬ。二月には日日新聞の小野賢一郎氏、來りて「新聞紙を通じて見たる最近十餘年間の社會相」を語り、特異の觀察に大いに寮生を啓發せられたり。

練習會亦見る可きもの多く、入江氏「新價値の樹立に就いて」の題下に、社會の價値判斷に誤謬多きを指摘して、理想信念の確立を說き靈的要求の第一義なるを主張し、楠井氏は「杜翁との一年」と題して過去一年間トルストイに依つて獲たる所を述べ「新人類文化の建設に努力せん」と熱烈なる演說をなし、山際君は「相對界の悲哀」を重田君は「二つの傾向」を野口君は「物質的充足と精神的充足」を論じたり。

二月十八日去り行く友の餞に送別演說會を開く。奥平君はダンテがバブテスマに赴ける時に「腰につけた一本の葦」に借りて「謙遜なる心のみ總てのものを受け入る」と題し切々たる思想に聽者を動かしぬ。この日相會せる大學蠟山氏亦現在の大學生活を語り、河合先輩は「大學に入らんとする人のために經濟學部並びに法學部の內容を紹介す」と云ふ長題の下に有益なる御講演ありき。

四月新入生を迎へたる高等學校は學制改革第三週年に當り向陵の內容漸く改りぬ。此年菊池校長入學式に訓示して曰く「今や一高生の平均年齢は少くも一二年程若くなれり。而も一高は皆寄宿制度を採り自治制を施行す。年若き諸兄等はこゝに三十年の傳統と理想の自治の完成に向つて重且つ大なる任ある也」と。一方新高等學校制度の可否云々せらるゝあり。我部は五月二十三日第二大教場に於て新高等學校制度可否討論會を催す。我部夙に屢討論會を催し、向陵の輿論を決定せんとせしが、久しく中絕してこゝに漸く復活せられたるなり。當日流石に廣き第二大教場も立錐の余地なき盛況にて登壇者



拾五名に及び實際的見地より之を否とするもの、制度として之を許容するもの、交ゝ立ち討論激烈にして、殊に重田君に對する井崎富之助君の論戰は當日の偉觀なりき。最後に速水部長御登壇あり、細密なる批評をせられ最後に先生の新制度に對する御意見を以て結ばれたり。

重田委員寄宿寮委員長を兼ね、一高辯論部の內容偏重主義の弊を指摘し、辯論部の向陵化に努力し山際委員その典雅なる修辭の美と流暢なる辯舌とを以て、羽生田委員その眞摯なる態度と熱誠とを以て、我部のために萬丈の氣焰を擧げられしが、滔々たる內容偏重主義は、貴族的退嬰主義と相俟つて、向陵生一般に不關焉的態度を採る者多く、我部新たに河野正夫（思想の法動主義的傾向について）桑原鶴（貧しき贈り物）別府清（罵倒數言）高橋茂（普遍性批判の勝利）遠藤雅夫（知に偏せる文明）手塚富雄（表現の苦惱について）の諸論客を得練習會登壇者少くも六人を下らず。辯士の努力熱火の如きも之に相和する聽衆尠なかりしは遺憾なりき。かくて自治寮政治の如きも僅かに二三子の熱誠に俟つて存するが如き樣なりき。日黃昏にして路徒らに遠き乎。否々吾人は思ふなり。嵐の前の沈靜は來る可き革新の希望を暗示する。吾人敢て望みを斷たざるなり。

此年九月懺悔の生活の著者西田天香氏の上京を好機とし御講演を乞ふ。謙虛なる氏は來りて、奉仕生活の樣を論じ諄々として「零の生活」を說かれたり。質朴なる其の風貌は童顏の氏を愈光輝あらしめて、聽衆は一語をも聞き洩らさじと傾聽せり。蓋し否定に出で奉仕の積極道を採りし一燈園の氏の御講話は消極の道をたどりつゝある向陵生に一縷の光明を與へたるものなりき。

先きに紹介演說會に於て、大學竹內德治氏（時代と向陵）大學川原次吉郎氏（個人と階級人、社會人）等向陵生の社會的に目醒めん事を力說し、先輩丸山鶴吉氏「朝鮮統治の現狀とその將來」と題して極東平和の大計に就き武斷政策の不可を論じ我等の自覺を促されし事共に貴き果實なる可し。

新綠香ほる六月四日都下大學專門學校聯合演說會を嘆鳴堂に開催す。來會するもの十六校あり。各校の應援團陸續入り來りて、喝采の響喧し。本校の鈴木恭一（求むる心）山際正道（總ては人類の名に於て）大學川原（新人出でよ）の三君は他校の猛烈なる職業的野次團に對抗して、熱烈眞摯なる演說をなし一高辯論部の本領を發揮せるは、痛快の極なりき。由來我が部は眞面目なる態度と深き內容とを以て都下雄辯聯盟に範たり。我等は敢て、場當り演說、向ふ受けの演說を事として、一時の喝采を博するを求めず。げに我部の誇りはその眞摯と熱誠なり。我等は永遠にこの主義を採らん哉。さるにても悲しきは向陵生の不關焉的態度なり。我部は素と一高の部にして、寮生を離れたる獨立せる私的團體に非ざるなり。部員常に一高生の襟度と體面とを尊重する事運動部の諸君に異らず、然るにこの大會の如き、他校野次團の橫行を逞しくせしめ光榮多き嘆鳴堂を蹂躙せしめたり。余亦言はざるを得ざるなり。「我等大會に臨む時常に對校選手の覺悟を持し、背後の一千の校友を忘れず、然るを何ぞ諸君の辯論部に冷淡なる」と。

再度の敗北に此度は必勝を期せる我が野球部の西下と共に我部三高と聯合演說會を八月二十七日三高新往館に催す。我部鈴木恭一君は「誤られたる時代思潮」と題して君は體驗より語出でゝ、時代思潮の本質を明かにし、山際正道君は「人格の客觀性と主觀性」に就て完成せる君が思索の跡を叙し羽生田利朝君は「生くべき道」と題して得意の辯を振ひ滿堂の聽衆を感激せしめたり。又大學川原次吉郎氏の「文化の步み」あり。速水部長の挨拶に依つて樂しき一日を過しぬ。

十一月三十日東京朝日新聞の主催にて、信濃なる松本中學に於て、松本高校と共に公開聯合演說會を催しぬ。我部員公開の席に臨めりと雖もかくの如き大々的計圖は殆どなかりしが、幸にして大成功を收めて歸京せり、當日出席者は山際正道（人格の二相）羽生田利朝（生きんとする悲みより喜び）鈴木恭一（社會改造の心理的考察）重田忠保（向陵思潮の變遷について）の諸君なり。

此年他校との交渉頗る多く羽生田君（否定より肯定へ）入江誠一郎（鬪爭と依存）桑原君（最近社會思潮一瞥）山際君（人格論）河野君（光の中を步め）高橋君（建設の第一經綸）の如き特筆すべきものなり。



## ▽第二十四代委員　河野正夫、高橋茂、桑原鶴　（大正十一年度）

此年始め多年部長として我部の指導誘掖に盡瘁せられし速水先生御都合によつて我部を去り給ひしが、溫厚なる今井登志喜先生を迎へ委員の努力大なりしに拘らず練習會の如き前年の活況を見る能はず、二月大會には長滿欽司氏を聘して「食糧問題について」微細に亘る有益なる御講演を給ひしも聽衆頗る尠かりき。

春尙寒き二月二十三日送別演說會を第一大教場に催す。此日山際正道君は「人生とは偉大なる眞理への探求なり」と喝破して得意の歷史觀に聽衆を魅し「眞理を愛する心」こそ君が三年の收穫なりと向陵生活に感謝し、野口英一君は「Pain の探求」を說き、大月榮一君はゴリキイの一篇に借りて「愚しき者の勇」を讚美し鈴木恭一君は向陵生活に對する態度を回想して向陵の名に眩惑せられざる事を忠告せられたり。又畔柳準次郎、重成格、本多忠男、安田外代治の諸君いづれも懷かしき丘の想出を語り、近來無比の理想的演說會を終りぬ。

四月二十八日新來三百の友の爲めに紹介演說會を開く。河野君の歡迎の辭に次いで大學入江俊郎君「種々なる世界の綜合及び統一」と題して明快なる論法を以て、愛の精神に言及し、愛の修練によつて人は統一的生活に進み得る事を論し、大學菱沼勇君は個人本位と團體本位と題して近代思想の根源よりして兩思想の觀念を明かにし、之を向陵生活に演繹して、新來の諸君に警告し、又大學重田忠保君は疑ふ心を提唱して、考ふ可き問題を與へ、大いに聽衆を感動せしめたり。

かくて練習會に於ては新たに岩城重男、掛札弘、小林虎男、木澤喜代治、小澤衞の諸君交立ち先輩續々訪るゝありと雖も尙寂莫の感なき能はず。蓋し晩近十有餘年間我國思想界を風靡せる個人主義的傾向は各方面に於ける權威の否定となり宗教に於ても一世の指導原理を賦與するの力あるなく、理想に於ても萬人の生活信條に價するなく、或は文化生活の名に

隱れて安價なる現實逃避を企つる者あり或は社會運動に熱中するものあるも尙暗中に摸索するの狀態なりき。此の時代思潮の中に在りて向陵の傳統も刻々にその內容を變じ、尙前年の形骸を止むるあり脫殼の希望熾烈なりと雖も之が導火の因たるなく遠雷僅かに驟雨を告ぐるの恨多かりき。

此年頭初の部報に言へるあり「向陵は惱みつゝあり、我部はこの生みの惱みの爲に其の存在の意義を主張せんとす」と。眞摯なる我部員の不斷の努力はやがて來るべき向陵革新運動の先驅とはなりぬ。此の中にありて活躍せしは三委員及び西寮十一番に據れる部員熊田克郎、木澤喜代次、武藤富男、大橋武夫の諸君なり。かくて或は全寮茶話會に或は校友會の席上に於て盛んに我部の向陵化を主張し、之が實現に努めたり。第一學期全寮茶話會に於ける桑原鶴君の寄宿寮改革意見の如き、木澤喜代次君の對抗試合反對論の如き大いに寮生の耳目を動かし、偶寄宿寮委員に依つて企てられたる向陵時報の刊行と共に河野正夫（個人生活の一部表現としての向陵生活）熊田克郎（反傳統主義の振興）武藤富男、大橋武夫、岩城重男の諸氏得意の辯論を筆に藉り、向陵改新運動の輿論を喚起し、此年偶發せる僞一高生不法監禁事件（之は自治寮略史に審かならん）と相俟つて愈々向陵は社會化せられ、籠城主義も漸く崩壞し初め、皆寄宿制度撤廢の叫びさへ喧くなり、新向陵の黎明は來りたり。

而もこの運動の中にありて我部の誇りとなすは部員の友情の厚きことにして、偏見と憎惡を退け、敢然として、其の主張を揭げて互に最善の方向を探らんとせし事なり、當時辯論部のテロリズムを云々する者ありしも之鷲を烏と誣ふる類に非ずして何ぞ哉。

我部、都下雄辯聯盟の先驅にして、每年一回の聯合演說會を開きしも、近來聯盟の醜狀共に語るの要なく之が廓淸のために慶應大學豫科及び早稻田高等學院と謀り、聯合演說會を開く事前後四回に及び桑原鶴、河野正夫、高橋茂、岩城重男、木澤喜代次の諸君出席し相當の成績を收めたれば、更に此年も暮なんずる十二月十六日都下の六校の辯士を招きて聯合演



說會を催せり。「自我の發展としての愛（岩城重男）闇に蠢く人々の爲めに（木澤喜代次）あり、大學竹內德治君は「網を結ぶ者」先輩菊地勇夫君は（ソレル思想の迎れる二つの道）と題して眞摯なる辯舌に滿堂の聽衆を恍惚たらしめたり。

此年內に經濟界の混亂益甚だしく「國難來るの叫び」すら耳にするあり、外に華府會議の開かるゝあり、國民の視聽自ら海外に向けらる。時に華府會議に臨み親しく局に當られし先輩杉村陽太郎氏の御歸朝あり、五月大會に聘して御講演を乞ひ、更に九月には大塚常三郎氏「中歐及び米歐について」詳細に現下の狀況を述べ聽者に滿足を與へられぬ。十日大會には久しく向陵論壇を後にせられし先輩鶴見祐輔氏來りて「感激の生活と眞理の把握」と題して、壯量なる辯舌と巧妙なるジェスチュアとを以てクレマンソーを論じウイルソンを語り、H. G. Wells を紹介し萬人に自由主義時代の來らん事を渴仰し、感激の精神を高潮し、人類文化の恒久なる發達を希望し、眞理の把握の爲めに感激の精神を忘れず、之を深め之を高めよと二時間餘に亙りて熱辯を振ひ、滿堂の聽衆をして惚然たらしめたり。之より先き三高野球部の遠征に伴へる辯論部を迎へ八月二十五日帝大基督教會に於て公開聯合演說會を開きぬ。本校高橋茂君は「人口問題と國際的國家の誕生」なる題下に桑原鶴君は「國防について」の演題にて得意の辯を振ひ、河野正夫君は「本質的生活の創造にまで」と題して例を人類の爭鬪性と互助性とに取つて人類の本質性の存在狀態と活躍狀態を述ぶる事頗る切なるものなり。蠟山先輩はマルクスと英國思想の題下に主としてラスキンの批評を引きて英國思想の特徵を述べ、個性時代背景を重んずる批評精神國に於ては盛んならん事を望むと述べ大いに聽衆を啓發せり。會終りて相會せる兩校の關係者六十有餘折柄の豪雨をよそに、快談笑聲歡語堂に滿ち、和氣靄々裡に散會せり。

十一月十二日一高八高聯合講演會を第一大教場に催す。熊田克郎（宇宙への合一）岩城重男（新人出でよ）河野正夫（自己表現として種々の國家）桑原鶴（一青年將校と語る）の諸君出場せられ、向陵辯論部の特質を發揮したり。

此の一年を通觀するにさきに我部を風靡せる內容沈潛主義、自己沈潛主義の傾向は漸く失せて、「社會的活動的の傾向を

帶び來れるは看過する能はざるものなり。然れども憂ふる者あり。或は言ふ皮相なる活動主義に陷る勿れ。或は言ふ。表面的なる自己滿足に陷る勿れと其の言單なる杞憂に發せる言辭なる乎、さるにてもあれ、我部他山の石として尊重す可き點なきにしも非ざる也。

## ▽第二十五代委員　熊田克郎、岩城重男、木澤喜代次（木澤病氣のため二學期より）掛札弘代る

（大正十二年度）

此年早々帝國大學主催全國高等學校聯合演說大會の第一回が一月五日催されしかば我が部よりは、河野正夫君を出す。「文化の飛躍性」と題して豐富なる內容を以て熱辯を振ひ一高及び我が部のために大に氣焰を擧げたり。

而して我が部は新春早々討論會を催して時勢の趨く處、向陵思潮變遷の大勢を明かにせんと欲したり。然るに種々なる問題が動機となりて生徒大會を生ずるに至りしかば我が部より河野正夫、桑原鶴、木澤喜代次君等交々立ちて所信を述べ我等の旨趣の一端を寮生間に徹底することを得たり。

一月二十六日慶應大學に於て一高、早高、慶應、三高校聯合演說大會を行ひ我が部より高橋茂君（新しき酒は新しき革袋へ）岩城重男君（大我に生きるもの）を送る。

例年の如く送別演說會を二月十六日、第二大教場に開催す、桑原君は我等はプロレタリヤの爲にと叫ぶ前に人生の爲にと叫ばねばならぬ。故に吾人は感激を尊ぶ、而してそは信仰の生活眞理探究の生活なりと述べ、高橋君は社會主義運動に對する一片の抗議をなし、河野君は現在の心理的過程のニヒリスチック、リアリズムとでも言ひたい心持を述べ皮相なるアンビションに由つて行爲することの不可を論じ我々に感銘深き何物かを與へたり。其他石田英一郎君（向陵を去らんとする友に）、高梨壯夫君（友を送る）は去り行く友のために彼等の眞劍なる體驗を語り、米村正一君、木山千里君、矢田木



二郎君、古屋謙吉君、滋賀秀俊君等三年の生活の一斷面を語り論じ氣持よき會を持つことを得たり。

四月二十五日新來三百の健兒の爲に我が部の紹介演說會を開く。岩城君の開會の辭についで、「知ることゝ愛すること」と題し掛札弘君が愛と知は人生の大ヂレンマであることを述べ、大學、桑原鶴君は「米國についての雜觀」をなし米國は英國より出でその上に歩を進めたものである、新向陵も亦かく建設せねばならぬと結べり。次いで大學奧平武彥君は「我等は何をなすべきか」と題し、先輩金井清氏は「向陵の針路」と題して今日迷ひつゝあるは向陵のみではない世界が迷路に立つて居ると論調を進め氏が海外週遊中觀光せられし諸國民の特性を說かれ、寮生が各々自ら信ずるところを斷乎として行ふところに向陵進展の道ありと力强く結ばれたり。

四月今井登志喜先生大學助教授に榮轉せられて、止むなく我が部を去り給ひしが、我等はごゝに先輩立澤剛先生を向へ一味淸新の氣を加へ、委員の努力の效空しからず、練習會も漸く盛になれり。かくて每金曜の練習會には委員岩城、熊田君を初め石田代治君、武藤富男君、別府淸君、掛札弘君、石田英一郎君等交々立ちて、或は生活態度につき或は國家の本質社會問題につきて論ぜり。就中大學別府淸君と石田英一郎君との國家概念の論爭、及び掛札弘君と石田君との「光は東方より」の根據の論爭は特筆すべきものなるべし。武藤君は英語演說の巧妙を以て抑へ、五月の初め、東京英文日日社後援の英語雄辯大會に靑山學院に於て Asa Des eratos と題して神を罵り、聽衆の喝采を博す。東京日日君が意氣を讃せり。

五月二十三日初めての、試みとして校內春期雄辯大會を催す。熊田君の開會の辭につき、岡本淸君（敢て所感を愬ふ）石田久市君（向陵の問題）石田代治君（鬪人を愛す）吉富滋君（生の延長）其他數名の熱辯あり。最後に立澤部長は不定冠詞とでも題すべきかと冒頭せられ、人生の解き難き矛盾と苦惱と、そが痛ましき調和の努力とに就きて藝術的作品を引例して述べらる。聽衆に與へられし印象の極めて深きものありしを見たり。近年に於ける始めての催しなりしも相應の成績を擧げ得たるを喜びつつ午後八時岩城君の閉會の辭に終れり。

岩城委員の眞摯なる、內省的方面の叫び、熊田委員のなだらかに條理一貫し行く批判的なる辯は、松下一君、石田久市君、掛札弘君、大橋武夫君、佐藤安二君、中里賢君等の若人の叫びと共に其後の練習會の進捗となりて、やがて若葉の影彼方の山、此方の岸邊の憧憬をそぞろときめかしむる夏休みに入りぬ。

八月二十五日三高野球戰の前夜、我等は例年の如く、三高との聯合雄辯大會を、追分町の帝大基督教青年會館に開催せり、我部よりは熊田克郎君（個性の願ひ）掛札弘君（我等の行くべき道）武藤富男君（永遠の苦惱）の三名を送りて我等の意氣と思索の跡を語り、先輩菊地勇夫氏の「主權否定の論理」下村宏博士の「辯論觀」は聽衆を喜ばせたり。

「九月一日」それは我等日本人にとりて忘る得はざるかの大地震に續いて大火災が、東京市の大半を烏有に歸せしめし日なり。人心悄々として穩ならず、一高も本館爆破の運命に至り、三十三年の間、向陵の三年の生活に來り散じ行きし若人の胸に偉大なる感銘を與へし、かの時計臺も最早や唯我等の思出の中にのみ見出すを得るに至れり。されば學校も十月二十二日まで休校せしかば我部の計畫も殆どなす能はざりしも、十月三十日我部は考ふるところありて吉野作造博士を聘して「朝鮮人問題批判」に就いて博士の彼等に對するキリスト教的な態度を寮生と共に聞き、我國人が震災當時彼等に對する心のあまりに偏狹なりしを悲めり。

十一月二十五日校內秋期大會を催す。岩城君の開會の辭に續いで佐藤安二君（向陵に弓引く者）、成瀨正勝君（新聞紙と輿論）石丸季雄君（賣娼問題について）掛札弘君（生活態度）及び、松下一君（來るべき家族制度）吉滿義彥君（作夢者）片山正直君（生命の創造性）其他數名の熱辯ありて盛會裡に閉會せり。

かくて本年度も斯くして暮れなんとし、吾人感慨多きものあり。そは震災によりて騎場移轉問題となり、新向陵建設の日も數年を出でざらんとするによりてなり。而して今や向陵は廻轉期にあり、生みの惱みに苦しみつゝあり。我部の前途亦多事なりと言ふべし。



## ▽第二十六代委員　松下一　片山正直　吉滿義彥（大正十三年度）

熱情そのものの如き松下君、正義と理想とを生命とする基督教者吉滿君及び委員先輩多しと雖も理科より出でしは君を以て嚆矢となす、熱辯と論理の所有者、片山君三名を委員として希望多き大正十三年を迎ふ。一月十一日より練習會を開き吉滿君の「眞理に對する態度」松下君の「生命完成への平和」片山君の「假設の意味と共價値」は各自の開きつつある生活態度の鮮明なるべし。

二月十五日一大にて去り行く友のために例年の如く送別演說會を開く。岩城君は「體系的な生活よりも刻々に徹する歩みのより多き價値」なることと說き熊田君は「現在寮生の無氣力を諷刺的に痛切に指摘し沈滯せる向陵の現狀を救ふものは新しき生活原理の出現であり、消極生活に代るに積極生活にあり」と述べ、掛札君は「シェクスピヤーの作シザー中のブルタスの言」を演じて聽者を喜ばせたり。更に野田卯一君、井上司朗君、太田耐造君、熊谷孝雄君、田中和夫君、寶積一君、矢野貞一君、大橋武夫君等、三年の思索の跡、生活樣式の變化、寮生活より得たる體驗、及學校と寮との問題などを眞劍に述べられ、涙ぐましきまでの感激を味ひ、近年稀なる送別會なりしことを喜びつゝ閉會せり。

櫻咲く四月は來りぬ。向陵は再び三百の健兒を迎へぬ。されば五月紹介演說會を開く。大學桑原鶴君（センチメンタリズム）同じく大學掛札弘君（排日法案に就いて）の內容と含蓄多き辯論につづき、先輩、市毛孝三氏は「デルカッセの偉業」と題して彼が熱血を注いで祖國のために戰ひし外交史を述べられ「我日本國難の際やがて緊褌一番すべきの秋我等このフランス最近五十年の外交を學び將來を照すランプは過去の經驗のみとある、ランプをこのデルカッセの偉業に見出すものである」と結ばれ盛會裡に閉會せり。

さるにても我部は立澤部長洋行の途に登られしかば、最近歸朝せられし、森卷吉先生を部長に迎へ一味清新の氣を我部に加へ給ひしは悲しみの中に喜びありと言ふべきか。

大正十三年部員

此間にありて我等日人の血潮をいやが上にも興奮せしめしは米國の排日法案なりき。世論紛々として歸するところを知らず日米問題は各方面に論議せられ又雜誌の論說の主題となれり。昨年は自然的に大打擊を受け、今又人爲的にかゝる侮辱を與へられんとす。經濟的不振は益ゝ鮮となり、外交的孤立の兆漸くにして萌し、我國の前途亦多難なるを思はしめ、「國難來る」と叫ぶ者又多きを見るにいたれり。されば我部は三宅雪嶺氏を聘して「日米問題講演會」を開く。時正に五月二十九日なりき。氏は各方面より日本、米國の兩國民の長所、短所を比較研究せられ民族的差異を述べられ五十年六十年で斯樣に進步せし日本は更に眞劍な態度もて各方面に發展し、彼に充分對抗出來るに到るまで努力すべきこそ春秋に富む吾人の責任なりと、氏獨自の熱辯を振はれ、聽衆の感激の少なからざりしを信ず。

更に我部は六月九日、外務省の先輩最近フランスより歸朝せられし芦田均氏を招き「世界は動く」との題名の下に、氏は英國、米國、フランス、ドイツ、イタリー、ロシヤの最近の外交狀態、政治狀態を明確に述べられ併せて、我國此度の總



選擧と未だ理想に遠き政治狀況を指摘せられ、民意による政治、外交は我等青年の双肩にありと我等を刺戟せられたり。

校内春期大會を六月十三日開會す。木澤前委員の開會の辭につづいて前田信一君（漢學を讃美す）藤田保君（所感）津田久君（治鮮政策の根本の缺陷）伊藤米藏君（殿堂の崩るる時）中里賢君（十字路に立てる向陵）栗原時雄君（暴力について）高田隣君（道德と自利）佐藤半君（平和の道）等の熱辯あり。中に森部長の最近の歐米の雄辯の新傾向について興味深き演說ありき。かくて片山君は向陵三年間の生活は創造的なるものならざるべからず。我部は其爲に何等かの機會を與へつゝありと我部の意氣と抱負とを述べて閉會せり。

かくて八月二十三日兼てよりの計畫の如く八高と名古屋市縣會議事堂に於て聯合演說大會を開けり。一高よりは、伊藤君「天空を翔る者」と題して信念と力との生活を高潮し、松下君の「眞理のために」は勇敢に文化戰線に戰へと宣言し、片山君は「生命は飛躍す、吾人の生命は價値道德の世界にまで進展せざるべからず」と堂々と論じ津田君は「新生の惱み」と題し吉滿君は「精神科學の宗教的價値」と題して平常の豐なる思索の跡を披瀝し以て我部の意義を名古屋市民に示し、愉快なる一夜を過したり。

八月二十六日三高と例年の如く演說大會を行ふ、我部より吉滿君は「吾飲故吾有」と題して智的世界よりも欲求の世界の優越を論じて刺すが如き熱辯を振ひ、片山君は「純粹なる自我活動として見たる四次之世界」と題してカントの時空論とアインスタイン、ミンコフスキーの四次之世界との結合を試み、整美なる宗寅體系は先驗的自我の構成なりと主觀の偉大を一絲亂れざる論理を以て展開し、松下君は「社會的錯綜化の意義」と題して全體社會内に發生せる部分社會の概念を吟味し基礎社會と派生社會とに分ち、其意義及價値を述べて流麗玉の如し。先輩川上丈太郎氏は「ロマンローランのガンディ論を讀みて」との下に、なだらかなる熱辯に、聽者を醉はされたり。

九月十七日昇曙夢氏を迎へて「最近ロシヤ文藝について」の講演會を開くことを得たり。

十月十一日我部は最初の試みとして、關東豫科高等學校雄辯大會を催せり。參加校、法政豫科、日大豫科、慶大豫科、水戸高校、浦和高校、早稻田第一第二學院等なりき。本校より石丸君は「智識階級の苦悶」と題し、片山君は「新社會への道」と題して論ぜり。大學より熊田克郎君來り論じ、盛況裡に閉會せり。

此間にも練習會は最近未曾有の盛況を示せり。松下君の數回に亘る「國家論」片山君の「學に於ける個別性と普遍性」「科學の價値」「生命論」吉滿君の「精神生活の優越」「倫理學の對象及び其終局」等は我部の新境地を開拓せるものと言ふべし。更に栗原時雄君（人性の矛盾と國家）高田隣君（純粹責任）成田勝四郎君（法律と道德）清水輸二君（神について）木澤喜代治君（一つの疑問）矢彦澤豐君（農村不振の一考察）成瀨正勝君（徹底と妥協）津田久君（小さき優越感の悲哀）横井孝作君（人間愛の極致）其他多數の論客を得て、秋の日の短きを救きつゝ、黄昏が二夫を包むまで論じ語りぬ、我部の爲に一年間努力せられし森先生は學校の事務の都合上部長の任を辭されしかば、我部は溫篤なる佐久節先生を迎へ部の前途を祝せり。

十二月七日我部の宿望たりし向陵諸問題大會を開き、思潮の趨くところを明にせんとす。福田守登君、藤田保君、石田久市君、岡部正雄君、小沼洋夫君、栗原時雄君、吉滿君、片山君等交ゝ立ちて或は寮生間の風紀につき、或は皆寄宿制度自由寄宿制度について、傳統について、所信を述べたり。

十二月十五日、新渡戸博士歸朝を機會とし、講演會を開けり。博士は國際聯盟の諸問題を中心とし、我等青年が眼界を廣くし、ソーシヤビリテイを養ふべきこと等流麗なる音色を以て說き去り說き來らるるや、全寮生は恍惚として深き感激に浸り、若き理想の血潮を躍らしぬ。

大正十四年は來りぬ。一月五日帝大主催第二回全國高等學校雄辯會あり。本校よりは片山正直君「生命の飛躍性」と題して、巧みなるヂェスチァーと明快なる論法を以て、生物學的生命より價値の生命にまで飛躍するは、吾人のヴルレンなり



と說き、我部の意氣を示せるは又愉快なりと言ふべし。

一年間を追想せんか、本年度の我部の活躍は目覺しきものあるをみる。向陵に於ける。文化事業講演會の殆ど全部は我部の努力なりと言ふべし。かくて自己沈潛主義と活動主義とは相調和して我部の前途を照しおのづからなる生命の發展は反省と肯定を含み、外延と內長とを合せ、一つと他の立場とを止揚しつつ、自らの完成にエランヴィタールに飛躍する。幸あれよかし我部の前途!!　筆者はかく祈りつゝ一先づ五ヶ年間の部史を閉づべし。

# 擊劍部部史

# 擊劍部部史

委員　遠山澤次郎
　　稲月光三郎
　　小柴保雄

君か代を思ふ心の一筋に
我身ありとは思はさりけり　梅田雲濱

神州古來正氣あり、凝つて百錬の鐵と爲り、秋霜凜々人をして肅然たらしむ此氣の磅礴する正に三千年、皇風以て洽く、國威爲めに揚る。櫻井の遺訓恩賜の劍、懦夫を起たせし事そも幾何ぞ。斯氣一度鬱屈せんか、士道頽廢し青年意氣なく廉恥なし。大阪城の末路や壯なり、平族の都落や雅なり、前者は鬼神を泣かしめ、後者は婦女の涙を誘ふ。

白虎隊の勇は江戸三百年の末期を飾る隨一者、今日彼等の爲めに一掬の涙を吝まざる者果して指を屈するに足るや、戰勝の驕慢、太平の逸樂、時に國をも危うすることなしとせず、忠臣乃木氏一刃を閃かすや、將星墜ちて乾坤震ひ、上下の俟姦顏色を失す。吾人の向ふ所此處にあり、男兒の赴く所彼處にあり。天下の適歸將軍を俟つて始めて是を得たり。昨に愕然として醒めたる世人は今や須臾にして復び驕樂の巷に走らんとす。然れども我れに父祖承傳の日本刀のあるあり。千古不變の光未だ幸にして錆びず。美なる哉乎日本刀、其名に聯想する所、建國以降正氣日月を貫ける、一々炳乎として眼前に活躍す。

夫れ正氣在つて而して刀あり。刀あつて後氣あるに非ず。斯るが故に士は刀を佩ぶと雖も、苟も其出入を輕々しくせず。

其の腰にせる大小二刀は吾れに一片正大の氣ありと自他に保證せるものに外ならず。宜なるかな古の士や、義九鼎より重く、節度宜しきを得、進退法に適ふ。其の心や整靜耿々、眞如の月も其の汚濁を愧づ。吾人劍を學ぶ者刀を帶せずと雖も豈此覺悟無くして可ならんや。

刀は正氣の影なり、形なり、然り而して既に刀あり是を用ゆるの道なかるべからず。劍道こゝに於て生ず。劍道を以て敵を斬るの術となすは士の爲す所に非るなり。一度劍を彈じて起つや、正氣悉く發し、寸毫の油斷なく、私なし。阿吽の氣合は凝りて靜中動の妙境に達す。人此時に於て至大至高なり。劍道の要は武士道の修養に盡く。士道とは何ぞや。乞ふ是を吉田松陰先生に聞かん「先づ士道と云ふは、無禮無法、粗暴狂悖の偏武にても濟まず。記詞誦章、浮華文柔偏文にても濟ます。眞武眞文を學び、身を修め心を正しうして、國を治め、天下を平にすること是士道なり」と然らば則ち此の士道の骨髓は何ぞや、曰く義也。彼が金誡に就いて見よ。

### 士規七則

一、凡生爲レ人。宜レ知二人所一以異一。於禽獸一。蓋人有二五倫一。而君臣父子爲二最大一。故人之所二以爲レ人一。忠孝爲レ本。

一、凡生二皇國一。宜レ知二吾所一以尊一。於宇內一。蓋皇朝萬世一統。邦國士夫。世襲祿位。人君養レ民。以續二祖業一。臣民忠レ君。以繼二父志一。君一體。忠孝一致。唯吾國爲レ然。

一、士道莫レ大二於義一。義因レ勇行。勇因レ義長。

一、士行以二質實一不レ欺爲レ要。以二巧詐文過一爲レ恥。光明正大皆由レ是出。

一、人不レ通二古今一。不レ師二聖賢一。則鄙夫耳。讀書尙友。君子之事也。

一、成德達材。師恩友益居レ多焉。故君子愼二交遊一。

一、死而後已四字。言簡而義廣。堅忍果決。確固不レ可レ拔者。舍レ是無術也。



是則ち武士道の正法眼藏也、武は戈を止むるなり、擊劍何ぞ必ずしも劍を擊つの謂ならんや、吾黨の士平生劍を學ぶ少しく聊んずる所在りて存すればなり。

我一高擊劍部は其創立既に古きに屬す、上に古武士の典型青山先生鹽谷部長を戴く事終始一貫、數多有爲なる先輩を生み部員數百名、打つて一丸となり、常に劍道の眞髓を習ひ、以て身の鍛錬を計り、智德の修養に志す、敦厚なる師範により技術の進歩は餘す所なく、部長自ら老體を提げて青年と相擊ち、間々有益なる教訓を賜ふ、先輩亦日々歸來して懇切に指導の任に當る、其團結の堅く、しかも雄々しく優しき情味を保つ、天下復た何處に斯くの如きを求めんや、向陵の校風は勤儉尙武にあり、吾部恒に正義を標榜して是が中堅たり、部員相互に切磋琢磨、剛健質實の氣風を養ひ、以て輕跳浮薄なる世俗に抗し、天下青年の指南車たらん事を期す、擊劍部の今日ある一朝一夕に成れるにあらず、其歷史を繙く時は光榮ある偉蹟燦として展開す、心ある者吾部二十餘年の雄圖を視て發憤せざる者あらんや。

## 其の前身

遠く其起源を尋ぬれば、本校未だ一ツ橋外に在りし折、鹽谷時敏先生本校教授たるに當つて、生徒中の有志數輩と日々校庭に於て演習す、明治二十二年三月、現在校舍に移轉するに及び、一會を起して擊劍會と稱し、木下廣次先生を會長に鹽谷先生を委員に推し、高橋作衛、野元龍太郎、兒玉錦平の三氏專ら事務を執り、外に若干の級委員を置く、是より先學校當局亦劍道教授の意あるや、擊劍會左の請願書を呈出す。

### 擊劍會請願書

先年野村氏の本校長たりし頃、大に擊劍の有益を感ぜられ、榊原健吉氏を聘して、大學講義室內に於て每日擊劍を教授被致候事有之候、然るに當時生徒の好みに任せ、其望みの者のみに教授致す事に有之而して其望みし者も別に擊劍教授事業に對し義務を負ふ事之なかりし故、其望みの者少數なるのみならず、此等の人も追々怠慢と相成り、遂には每日一兩名

の出席員あるのみに到り候事と記憶致し候、是れ學校より擊劍を敎授して好結果を得ざりし事實に御座候、偖て又私共生徒中に於ても、先年より有志者相集り、私に擊劍會を組織し居り候處、其熱心なる有志者の集合體なるに關らず、屢々衰微に陷り、綿々として將に絶えなんとする絲の如くに御座候、是れ生徒が私に擊劍を勉めんと欲して、好結果を奏せざりし事實に御座候、抑も擊劍の儀は私共が信じて精神を强壯にし、身體を健康にするの益あるものと爲し居るものに有之候今我學校の生徒に之を盛にせんと欲して、遂に好結果を得ざりしは、誠に殘念の儀に御座候、因て謹で推考致し候に、既往に於て斯くも不成功なりしは、或は學校と生徒と別々に働きし故にはあらざるかと奉存候、承り候へば、今般本校内に御建築相成候銃槍道場に於て、劍術をも御敎授被致候由、私共の聞き得て雀躍致す處に御座候、何れ然るべき御方法を以て御處理有之べく候へ共、萬一先年度の如くんば、生等竊かに憂ふる處有之候、因て玆に御願申度は私共が既に組織したる擊劍會なるものを御利用有之、學校と生徒と合體にて、一の擊劍會なるものを維持すること、ボート會の如く被成度事に御座候、然らば既往二者の弊も無之、いかばかり圓滑に參るべきかと奉存候、右等の例は學習院柔術場、農林學校擊劍場等に往々有之、餘程都合宜敷やに及聞候、(御注意迄申置候が、本會員は目今百二三十名に達し居候)

右何卒御計ひ、何分の御助力奉願候、若し御許可相成候はゞ不敢取左の三項御採用奉願候、

一、銃槍道場拜借の事、

一、破損せる道具を修覆する事、

一、擊劍後流汗を洗ひ以て健康を保助する爲め、粗末なる冷水浴場を道場の側に御造り被下度事、尤も此は極めて粗末にて宜しく、ナガシと屋根と下半身を隱す蔭蔽さへ有れば宜しく候。

右條々謹而奉願上候



明治二十三年五月二十八日

第一高等中學校長木下廣次殿

擊劍會員總代　佛一級生　兒玉錦平
英一級生　高橋作衛

是よりして事務大に整頓して、萬事緒に就けるを以て、六月十二日開會式を行ふ、道場工事未だ了へず、銃器室を以て場に當つ、木下會長の演說に次ぎ、嘉納學習院教頭の柔道型、渡邊會計檢査院長(昇子)の獨逸劍法に就いての演說、河田元老院議官、及河田賴功氏の大石神影流型等あり、更に會員の三本勝負を行ひ、盛會を極む、爾來會員日に增して二百餘名に至れり、八月新築銃槍道場全く成り、是を借りて稽古を爲す、翌二十三年十月校友會起り、擊劍會其一部となる。

## 創業時代

明治二十三年十月、第一高等中學校々友會組織せられ、擊劍部亦其中に在り、其時制定せられたる規則第一條に曰く、「本部ハ劍道ヲ修行シ、心身ヲ鍛錬スルヲ目的トシ、第一高等中學校々友會擊劍部ト稱ス」と、(明治二十七年第一高等學校と改稱)翌年一月、本校第一大敎場に於て初めて大會を催す、二月、有信館主根岸信五郎氏を聘して敎授を乞ふ、同年十月秋季大會を開く、當時武道衰頽の秋に當り、吾部率先して事を擧ぐるや、頗る識者の贊する所となり、貴顯、紳士、劍客、各學校選手等の來り會する者數百人、爲めに木下校友會長をして、混雜の極、第一大敎場の神聖を汚すに至らざるやとの杞憂を生ぜしめたり、後毎年一回大會を催し、切に斯道の興隆を圖れり、殊に渡邊昇氏河田景與氏の如き、會ある毎に來つて、或は自ら刀を振つて戰ひ、或は講演して青年の士氣を鼓舞する等、盡力一方ならず、されば、興望翕然として擊劍部に集り、新に入會する者日に至り道場の狹隘を感じたり。

明治二十六年一月、初めて三十日間の寒稽古を擧行し、皆勤者十六名を算す、明治の革新文物の偏重を起してより、思

を武道に致す者稀なるの時、すでに吾人の先輩は星を戴き霜を踏みて、叱咤勵精以て他日の慮を爲せり、泰西文明の洶湧は苟も舊きものは悉く破壞し去り、皇國三千年の美風も澎湃たる潮流に湮沒せんとす、時に一脈の正氣烈々として向陵の天地に漲り、狂瀾を既倒に廻すを得たるは一に何に因るか。

毅然として發達し來れる吾擊劍部は、今や年を積む事十歳に垂んとし、斯道の隆盛につれ、物質的設備の改善を要し、道場の狹少道具の不足等を以てして、尙ほ發展を畫す至難と云ふべし、年々專任委員二名を擧げ、是が事務に任ぜしめ、部員一致協力の結果、其基礎漸く固く、機ある毎に諸般の擴張を計り、部員益々增加するに至りぬ、依つて明治三十年より委員三名となし、以て今日に到る、當時部員たりし者の意氣の一端を窺知せんが爲めに、三十二年度記錄の一節を揭げん、「回顧すれば吾擊劍部は、去明治二十三年、校友會の一部として生れ出たるものにして、斯道の先輩、熱心なる裏情を以て、時の校長木下先生に懇願する所あり、初めて道場を新築せられたり、先輩諸氏の創立に於ける苦心一方ならざりしと聞く、爾來星霜を經る事十閱年、益々隆盛の兆あり、寒稽古の如きも實に年一年皆勤者の增加を來し、遂に本年七十六名の多數を見るに至り、本數の最も多き者二千三百八十五本に及び、千本以上の健兒六人を出せり、吾擊劍部の天下に雄視する、抑も故あるかな、方今武道世の風潮と共に漸く衰頽に傾き、彼の江戸三家の薫陶に浴せる知名の劍士も、誠に指を屈するに止り、世間技術をのみ徒に爭ひ、其弊甚だ憂ふべきの今日、向陵氣淸き所卓然として橫行濶步、苟も偏せず、苟も黨せず、勝負競爭を以て目的とせず、自重自信、銳精なる鹽谷部長監督の下に、劍道の本旨を守り、禮讓を重んじ、和氣堂に滿ち、凜然犯す可らざる所あるは、實に一高擊劍部なりとす、斯くの如く吾部は天下諸學校劍道部の模範となり由來覇權を掌握する以上は、他日吾神州固有の武道を永遠に傳承するものは、必ずや吾擊劍部より、輩出すべきを疑はざるなり、云々」見るべし、氣の剛にして宇宙を呑むの慨ある、亦偉なりと云ふべし。

同じく三十二年三月四日、小集會を催し、道場無聲堂の額面上揭の祝を兼ぬ、該額は渡邊子爵の揮毫に係る、題して無聲堂と云ふ、無聲の語須く深意あるべきも、吾人寡聞妄に推度を容さず、然れども孫子に曰く、「故善攻者敵不知其所守。善守者敵不知其所攻。微乎微乎。至於無形。神乎神乎。至於無聲。故能爲敵之司命。」と、蓋し是に庶幾からんか、渡邊先生の後進を鞭撻誘掖に努められたる、謝するに餘あり、擊劍部の今日ある、先生と故河田先生との力多きに居る、河田先生既に歿し、今先生獨存す、切に自愛を祈る、當日盛んなる勝負終りて夜、東臺韻松亭に於て武邊會を開く、武邊會とは何ぞや、記に曰く、「武邊水を飲み、武邊談をなすもの之を武邊會となす、況や其講ずる所は武邊の術、其會する所は武邊の人、是に於てか武邊會の意氣天に沖せんとす、之を是れ擊劍部武邊會となす、鹽谷部長、根岸兩先生を始め、大學先輩及本校部員の集る者百餘名、先生方の演說に次いで、先輩、部員交々起つて慷慨悲憤、口角泡を飛ばし、氣焰虹を吐く、宴酣なるに及び、鹽谷先生起ちて前兵兒謠を歌ふ、之を魁として詩吟劍舞つぎ〳〵に行はる、劍舞は舞容の妙を取らず、意氣の軒昂を取るなり、嗚呼武邊會、武邊會、我は實に武邊を愛す、近者懇親會と曰ひ、親睦と曰ひ、會の勃興雨後の筍の如し、美酒流れて海の如く、佳肴積んで山の如く、劍舞廢れて俚歌俗謠盛に行はれ、所謂倡優巧鐵劍鈍なるもの比々是なり、而して武邊汝何物ぞや、武邊の人會して武邊の談をなし、飲む所は武邊の水、食ふ所は武邊の下物、劍舞は武邊の容に非ずや、詩吟は武邊の聲に非ずや、絕えて俗氣なく、一として武邊ならざるはなし、嗚呼武邊會々々々我汝を愛す、」と痛快美むべきかな。

四月、柔道部、野球部仙臺に遠征す、吾部特に二名を派して之を慰問し、應援す、眞乎武士の情掬すべきかな。

これより先き鹽谷部長吾擊劍大會に　皇太子殿下の御臨幸を仰がんとの意あり、是が斡旋せらるゝ事年ありしが、愈々今年は此事御聽許の內定あり、部員皆大旱に雲霓を望む思ひあり、ひたすら擧措進退を愼み、技を磨き、以て其日の至るを待つ、當日の盛況は記事によつて是を示さん。



## 第十一回擊劍部大會記事

維時明治三十二年五月六日を以て、本部第十一回大會を行ふ、忝くも、東宮殿下の御聞に達し、行啓仰せ出されぬ、實に我校空前の盛事にして、光榮何物か之に如かんや、俯して惟ふ、殿下聰明睿智、幼にして學習院に學ばれ、最も意を武道に用ひられ、赤阪御所內別に擊劍道場を設け、寒稽古をさへ勉め給ひき、嗚呼殿下講學演武、躬を以て天下學生の先とならる、誰か其盛德に感泣せざるものぞ、當日は倫理講堂を開きて演武場となし、大教場を以て本校生徒の參觀席に充つ、來賓には板倉子爵、有地中將を始め、目賀田主稅局長、上田、澤柳、鈴木諸先生あり、本校にては校長、部長、教授諸先生一同陪席し、大學、本校學生の臨場する者堂に滿ち、實に未曾有の大會なりき。

此日や特に授業を休止し、開會に先ち、狩野校長は行啓につきての心得を一般學生に諭され、尋で鹽谷部長は行啓を仰ぐに至りし顚末を逐一述べられたり、先生は實に吾人の先輩と共に擊劍部なるものを創立せられ、爾來之が部長となり、常に部員を督勵し、後進を誘導せられ、十有餘年一日の如し、思ふ昔我擊劍部が一橋校庭內、油々たる芝生の上にて呱々の聲を擧げてより、年々歲々隆盛を來たし、終に　殿下の行啓を辱うするに至りたる、實に先生の力なり、不知、當日先生の胸中果して何の感かありし。

午前十時より一本勝負、三本勝負を行ひ、午後三時に至る、殿下行啓の刻限に近づきければ、試合を一時休止し、校長始め、教授、各組總代は奉迎の爲め場を出で行けり、跡に學生、劍客皆席を正し、容を改め、整然として臨御今や遲しと待ち居たり。

時恰も三時半、車轔々、馬蕭々、御駕校門に入る、校長、教授、各組總代謹んで門側に奉迎す、校長の御先導によりて直に階上の便殿に入御あらせられ、御少憩の後、演武場に臨まれぬ、席にある者起立最敬禮を行ふ、殿下玉顏殊に麗しく、一々御答禮被遊御座に着せらる、是に於て左記の次第により、演技を御覽ぜられたり。



立居會

佐藤勸　神道無念流（木刀形）　一心流（鏃刀形）

田中敏　安藤馬之助先生　山里忠德先生

中村男也　根岸信五郎先生　高月成三郎先生

鹽谷溫

松本紀眞

三本勝負

1 神津正之　山本正天

2 堀內智三郎　佐藤勸

3 齋藤常三郎　中村男也

4 五來欣造（大學）　鹽谷溫

5 穗波龜三郎（學習院）　佐々木隆興（大學）

6 後藤武保（學習院）　古宇田實

7 松本紀眞　田中敏

8 松平恒雄（大學）　山本五郎

9 長尾戒三（大學）　福田謙之

10 東尙胤（學習院）　嗚神幹太郎

11 植村東彥（學習院）　柳悅耳

12 鈴木信太郎（大學）　河村驍

遊心流素面試合

13 中沼信一郎　河村驍

遊心流試合

14 米田奈良吉（大學）　穗刈十一郎（看信會）

15 大和田三樹太郎（大學）　中沼信一郎

擊劍部部史

16 飯泉幹太（大學）
秋野沆

17 川崎壽一郎（大學）
吉田英助

四時半、御退場、一同起立最敬禮を行ふ便殿にて御小憩の後、やがて還御被爲在、校長以下謹んで門側に奉送せり。

尙ほ引續き勝負を行ひ、全く終りしは點燈の頃なりき、校長手づから勝者に竹刀を授與して、第十一回大會も目出度終り、夜に入りて例により武邊會を開く。（中略）

謹んで惟るに、睿聖文武なる　天皇陛下、夙に列聖の遺緒を繼ぎ、即位の初、進取の國是を定め、大に尙武の風を奬勵し給ひ、殊に意を國民の教育に用ひられ、二十三年大詔を煥發して、教育の大本を示され、數々大學學習院、及陸海軍諸學校に幸して、親しく學生の講學演武の狀を視察し給ひき、聖慮深き哉、帝國臣民たるもの能く聖旨を奉戴して、粉骨碎身、力を盡し、智を致し、以て邦家の爲に報いざる可らざるなり、嗚呼我仁孝英武なる、皇太子殿下、親しく本校に行啓、學生の演武を御覽ぜられ、金百圓を賜ふ、皇恩優渥感泣の至りに堪へざるなり、學生たるもの當に囊螢映雪、日夜怠らず、以て己が學を修め才を研くに勉むべし是れ我職分を盡す所以にして、又皇恩の萬分の一に酬ゆる所以なり。」

噫吾人想ふ、此の空前の光榮を辱うしたる所以のもの果して何ぞや、殿下日頃尙武の御心に富ませらるゝの致す所固よりなりと雖も、畢竟創立以來、部長以下歴年の部員拮据勉勵、己を愼み業を修め、滔々文弱の世流に抗して、渾然たる一大美風を構成し、卓々たる餘光遂に九重の雲深きに達したるによらずんばあるべからず、爾後此日五月六日を以て吾擊劍部の記念日となし、年々此季を期して大會を行ふ事となりぬ、實に擊劍部の存在する限り、部員たる者、永遠に此を魂に銘じ、夙夜奮勵せずして可ならんや、殿下今や祖宗の威烈を承け、一天萬乘の高御座に位し給ひ、民を思はせらるゝ大御心は彌ましに深ませらる、吾人昔日の恩澤に浴したる者は、献身報國の念今更に新なるを覺ゆるなり。

擊劍部創業茲に十年、其間當事者の辛苦は察するに餘りあり、皇太子殿下行啓の恩寵に接して、永年の努力一時に其功を結びたるものと云ふべく、朝暾曉雲を拂つて閃々晃々、吾部の名實に一世に冠たるの趣あり、此に於てか基礎全く固く擊劍部の未來は洋々たる希望に滿ちぬ。



## 其の中道

凡そ大事を爲す、善く創むる者ありと雖も善く守る者なければ遂に其終を全うする事能はず、家康の智謀能く天下に覇を稱するに足るものありしとは雖も、三代將軍の果斷なかりせば如何ぞ三百年の久しきを保つを得んや。

我擊劍部建設の業は物の美事に成り、基礎全く固し、此後數年間は守成の時代にして、創業の華觀、外征の勇は見るべからずと雖も、內容の充實發達は此期に成りしものにして、後日我部が雄飛するに至りし潛勢力は、實に此間に養成せられたるものに外ならず。

此歲三十二年六月、鹽谷先生の學塾、菁莪書院に小集會あり、此機に際し擊劍部員全般より些少宛醵金して銀盃を製し先生に献ず、蓋し先生の十年一日の如く斯の道を奬勵し、部員を薰陶せられて秋毫も倦怠の色なく、かくして吾部今日の隆盛を致せるは、部員一同の感佩措く能はざる所なりき、況んや今次空前の大會を擧行す。爭で記念を致さずして可ならんやとの趣意を以てなり、あゝこれ眞に師弟の情誼なり、物質的恩謝我に於て何かせん、口に萬言を縷して其德を述ぶるも士に於て何かせん、只人生意氣に感ずる所、先生の德を體して日常之を以て心とし、之を以て旨となし、部員一日も擊劍部の爲に怠る事なく、造次も人物の修養に思を致さざる事なかりき、而して今此事ある、誠に眞情の發露にして、一點虛禮虛式の介在せざる、却て人をして感泣に堪へざらしむ。

九月、寄宿寮增築の爲め無聲堂移轉の事あり、茲に體操部の北側に置く、是より先き三月一日の寄宿寮記念祭當日、吾部主催にて餘興として野仕合を行ふ、此事毎年の例となり、士氣振興の一助として其功尠少に非ざりき、

十一月六日、過る大會出演者を無聲堂に集め、謹んで行啓の光榮を永遠に傳へんが爲め、恩賜金を以て調製したる革鍔

を鹽谷部長より各個に配付せらる、終りて部長衆に警告するに、諸子之によつて深く殿下尚武の大御心を想見し奉り、大會當時の精勵を續け、且は文事に忘るなく、長へに國家の干城となり、國運の隆盛を計るべし、些少だも懈怠の心を生じ、大御心を無にする如き事斷じてこれなかるべきを以てせらる、傳へ聞く吾人、豈亦務めずして可ならんや。

明治三十三年度記錄の一節を讀まんに、「去年に至る迄は寒稽古皆勤者年々增加したる結果、七十餘名の多きに及びしに、今年は減ずること二十五名なり、たとへ氣候の不順に因ると雖も、こは全く我等斡旋の術にあたる委員の勸誘宜しきを得ざる所多きに居るなり、寒稽古皆勤者の多寡は以て本部盛衰の有樣を卜するに足るものなり、上に劍道の眞髓を熟知する部長を戴き、知名なる根岸先生の教示の下にある我部の盛衰如何は、實に委員たる者の雙肩にあり、而して我部は由來高尚に位し、運動の眞價を發揮するに務め、部員の品性の廉潔にして、相互の交親密なる、而も禮節を貴ぶは我部の特色として誇る所なり、願くは此點に深く留意して、益々部の隆盛を致し、日本劍道界の覇王たるを期すべきなり、」と熱火の如き意氣を見るべし、宜なるかな數月ならずして復た誌して曰く「武香陵頭、春の花、夏の草、秋の日、冬の雪、四季夫々に變化はあれど、我擊劍部員の熱心と精勵とは幾星霜も異なる事なく、三伏の炎熱に汗を流して技を錬ひ、三旬の猛冬に氷を嚙みて膽を養ひ、叱咤の聲、戛々の響は無聲堂に絶ゆる事なし」と、嗚呼、年々歲々花相似たれども、歲々年々人同じからず、昨日新來の健兒を迎ふと思へば、今日すでに先進を送らざるべからず、人物の轉遷、滄桑の變も普ならず、然れども部員の愛部心に到つては、先後承繼いつの代にも遜色なし、明治三十四年度の記錄に吾人は見る、曰く「團體は尚個人の如きか、個人の主腦は能く團體の各部を自由に運用す、故に主腦の完美を缺かんか、四肢の發育如何に健全なるも、なんすれぞ其功あらん、團體に於ける又同じ、而して團體精神は實に委員其人にありとす、我部に於ては隆替盛衰の原動力は委員其人の熱心如何に在りと斷ずるを得んか、然らば則ち我部の由來目的とし理想として日に日に近づきつゝある所の、敢て外形上の勝敗如何に關せず、嚴肅なる禮讓と、活潑なる精神とを以て、身體の發達と精神の修養とを專らにし、兼て我國固有の武術を保つてふ意志に殉じて、私を棄てゝ充分の盡力あるべし、乃ち吾部の前途や汪々洋々たるなり」と、團體精神の熾烈なる、報公の念此に兆さん。



翌三十四年五月六日、小集會に於て、鹽谷先生其作る所の無聲堂記を朗讀披露せられ、額面として道場に揭ぐ。

## 無聲堂記

明治三十有二年五月六日。皇太子臨第一高等學校。觀生徒劍術。東宮大夫中山孝麿。亮足立正聲。武官長黑田久孝從。既畢。大夫傳教旨。賜金幣若干奬勵之。謹按國史。自皇祖提三尺。定豐葦原中國。神后之征服三韓。北條時宗之殲元兵。豐臣秀吉之挫明師。威武赫々。照映前後。乃至今上中興。承列聖尙武之餘烈。擴疆土海外。國威之揚。度越乎前古。而殿下春秋鼎盛。乃能留心武事。其所以撫軍監國主器承壓之志。殆非微臣蠡測之所能及焉。校內舊設演武堂。聘師講習。生徒率皆少壯。氣力旺盛。放課之餘。群集于此。革甲竹刀。憂々相擊。陽開陰闔。批虛導窾。如處女。如脫兎。如熊虎之搏。如犀兕之觸。如蛟龍戰於淵。而獅子走於野。輸贏判於呼吸。雌雄決於轉瞬。倏忽變化。不可端倪。方其隆冬祁寒。積雪滿庭。朔風剪膚。五鼓即起上場。鬪罷解甲。汗淋漓如滴。不復知互寒之在體。鍛錬磨勵。日月長進。其徵殿下寵奬洵非偶然也。抑劍術起元龜天正之間。至江戶幕府益盛。並弓馬槍術。爲士大夫必修之技。迨大政歸朝。廢封建剏徵兵制。劍術遂衰。然而養氣錬膽之道。莫善乎此。夫人膽氣壯勇、肢體堅實。其爲兵也。必能耐困苦。忍艱難。臨危授命。爲長上甘死。一可以當十。寡能制衆。小能勝大。近日討淸之役。足以證之矣。臣聞之。客歲獨逸親理親王來遊。觀劍術。嘆息謂傍人曰。吾嘗疑貴邦能得勝於淸國由何術。今始釋然。嗚呼殿下奬勵之盛旨。與獨逸親王之讚嘆。一其揆。則臣等報國之道豈有他乎。臣無似。承乏教授十有餘年。兼監劍術部事。間與生徒較技。常以聖訓中義勇奉公等語戒勅之。今又竊推衍殿下之意。以作無聲堂記。無聲者取之孫子語。子爵渡邊昇書。揭諸楣間云。

歲在辛丑四月下浣

擊劍部部史

第一高等學校教授正六位勲六等　鹽谷時敏謹撰

同夜、蹈松亭に於ける懇親會に於て、一人起つて、吾部昔日の親なく、彼の殿下御來臨當時の盛大復た見る可らずを嘆じ、其稽古掛の不熱心より來るを慨し、實に先輩に對し申譯なしと言々皆是れ肺腑より迸出するものあり、衆皆感激して擊劍部の既往を談じ、將來を思ひ、意氣虹の如く、或は校風を說き、尊重を語り、和氣藹々として相互に奮勵努力、必ず昔日に倍する盛大の域に致さん事を期す、實に眞摯にして熱血の樣、眼前に髣髴たるを覺ゆ、他日眞面目なる憂國の士は必ずやこの處より生れずんばある可らず、內修練の功は彌が上に積みぬ、されば宮內省濟寧殿、帝國大學、學習院其他許多の擊劍會に於て、每に優秀なる成績を表はし、一高式擊劍の名は運動の眞髓を示し、とくに覇權を中原に握れり、其此に至れる根蔕甚だ深く、基礎極めて固く、容易に他の窺ふを許さず、年を經て覇道の壘益々高く、濠愈深し。

かくて明治三十六年に至るや、遠く風を望みて第二高等學校劍道部有志十名我無聲堂を訪ふ、實に四月三日なり、對外關係漸く始まる、是より先三月中旬、天外の飛報あり、曰く「春季休暇を利して我劍士十名向陵を訪はん、固より對校勝負にあらず、有志試合を乞はん」と。

好敵來、好敵來、彼青葉城に據りて陰然北方の雄たる蜂章男兒、相手にとつて不足なしと、我有志亦快諾す、名は校際に非ずと雖も、我擊劍部の名に繫る所甚大なれば、試驗中夕食後に練習を試む、大學先輩亦來りて援助に努めらる、三日午前地稽古を行ふ、黑塗の胴あざやかに、心惡き程悠々たる態度、ことに猛烈なる双手突は、あつぱれ腕の力を競ふに恥しからぬ敵と見へたり。

午後二時、三本勝負開始、山田先生檢證の勞を取らる、狩野校長、鹽谷部長亦來臨せらる、成績果して如何。



1 幸田（二高）　○成瀨
2 佐治（二高）　○內田正
3 大多和（二高）　○渡邊
4 衣斐（二高）　○福井
5 入來（二高）　○松野
6 寺崎（二高）　○山田
7 ○今井（二高）　山脇
8 三上（二高）　○內田孝
9 東（二高）　○松島
10 白石（二高）　○田邊

炎熱の夕、極寒の朝、鍛ひに錬ひし腕には敵する者ぞなかりける、遠來の客態度悠々、一毫も大人君子の名を恥しめざりしは、百里の北に知己を得たりしの感なくんばあらず、況んや此日の勝負の如きは、單に武を練り、腕を試むるものなるをや。

此夕、大學のホールに於て歡迎の宴を張り、主客胸襟を開いて談笑、十年舊知の如し、勝敗は士の論ずる所に非ず、劍を持して起つの時こそ遥る所なけれ、互に手を握つては敵も味方もなかりけり、吾曹の採るべきは徹頭徹尾武士道にありて道に非るは毫も容す所にあらず、吾黨の交際や正々堂々たるべし、凡そ此事たる永遠に保持して變るべきにあらざるなり。

斯の月、先年東宮行啓紀念の爲め、恩賜の革胴二枚を謹製し、之を無窮に傳へて、殿下の御懿德に副はん事を期せり。

吾部生れて玆に十有餘歲、此の長年月師範の任に在られし根岸信五郎先生、斯年陽春事故引退せられたるを以て、諸先輩委員等專ら奔走して、遂に眞摯熱誠なる故得能關四郎先生を迎ふるを得たり、補助として檜山義質氏亦來つて熱心に教授せらる。

青葉城下、松島の夕月夜、鹽釜の朝嵐、ひそかに腕を錬るものあるを知るや知らずや、翌三十七年四月三日、二高の有志再び無聲堂を訪ふ、彼れ客歳一度戈を交へ、今年重ねて來る所以のもの多少の感慨なきに非るべし、不幸にして佐々木成瀬等の豪の者不在なりしかども、吾有志何ぞ辭せんや、此に雄々しき戰こそ現出せられたれ、部長亦旅行中。

時しも明治甲辰の歳、卯月初の頃とかや、五城樓下の武者十騎、吹く春風に征衣の袖なぶらせつ、青葉山を後にして、南を指して下りゆく、さして行衛は武藏の原、向ケ岡に關八州を睥睨せる殿原に、一泡ふかし吳れんずと、出陣ありしとぞ聞えける、八幡太郎義家が、道もせに散る山櫻かな、と詠じけん名古曾の關も、春未だ淺くして、鎧にこぼるゝ花もなし、遮莫、敗れてはつとめて越えじ勿來の關との思は、何か昔にかはるべき、長汀曲浦、雲山百里、いつしか過ぎて、四月二日といふに、花の都につきにけり。

明くれば三日、朝の間より向ケ岡に攻め寄せて、先づ矢合せ始めたり、やがて午後にもなりぬれば、保元平治の昔に準ひて、一騎打の三本勝負、山田得能兩先生檢證の勞をぞ取られける。（×印は引分）

1（○河田　芳賀（二高））
2（○横田　三浦（二高））
3（○切山　○川田（二高））
4（×幸田　渡邊（二高））
5（○佐藤　○渡會（二高））
6（○鶴見　衣裴（二高））
7（○藤沼　○横地（二高））
8（○清原　○大多和（二高））
10（×内田　今井（二高））
5（×三澤　寺崎（二高））



一々はくどければ記さねど、蒼龍躍て踏雲を起し、猛虎嘯いて疾風を呼ぶ、勢破竹の如くにて、入亂れ入亂れ一上一下虛々實々、寄ては返す太刀音掛聲、兩虎深山に挑む時、颯然として風生じ、二龍青潭に戰ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべきと觀る人手に汗握るが間に、皆々十分に手並の程をあらはして、今は是迄と刄の血潮拭ひもあへず、兩軍さつと西東、一禮なして分れしは花も實もある益荒夫の、いとも男々しき戰振に、賞へぬ人こそなかりけれ、やがて兩軍勢を纒め、大學集會所に宴を張る、晝間の合戰の苦を佳肴に忘れ、怨を芳醇に洗ふ、一盃一臠、又一杯、陶然として醉ひ、恰然として樂む、大和歌、唐歌謠ふ聲喇啞と空に澄み、壽永の昔熊谷次郎直實が、櫻花散る一の谷、春の夕に幽に遠く、青葉の笛の音を聞きしも、かくやとばかり思はれて、いとど哀を添へにけり、やがて夜も更けたれば宮城野勢は別を告げ、我軍の萬歳清く呼ばひつゝ、銀梨地とも見ゆる星月夜を、北を指してぞ歸りける。

斯の前後二回の有志試合は、箇々に三本勝負を決するのみにして、未だ團體として勝敗を定むるには至らざりき、此二度の刺激の齎らせし所や莫大なり、無聲堂裡人才雲の如く、俊傑悉く集るの慨あり、鬱勃たる英氣徒に内に跼蹐するを許さんや、都下劍道界、吾部劍士の赴く所、颯々たる木枯の荒野に殺到するにさも似たり。

十二月、先輩の雅量により大學仕合なるもの行はる、この勝負たる吾部草創の時よりして春花秋月十幾裘葛、しかも未だ曾て其例を見ざる所、之を以て嚆矢となす、爾後機ある毎に大學仕合の名の下に、先輩後進の誘導に努む、吾人は時の部員の懇請を容れ、後輩と相擊つの襟度を持し、好範を後世に垂れたる當時の大學先輩に對し、感謝の言を呈する者なり。

明治三十八年と云へば、幾萬の肉彈を擲て漸く旅順を陷れしの歳なり、其陷落祝捷會の翌一月十二日午前四時半、軍國の寒稽古は開始せられぬ、あゝ嵐に伏し氷に枕し、六花紛々たる異域の山河に身を曝す、愛國の赤心燃えて萬丈の燄となり、忠義凝りなす鐵石の心腸、さは云へ軍に野に籠る百萬の猛者、いかばかりか辛からむ、行潦の汚水も時ありてか渴を醫するに足らず、寒風戎衣を掠めて全身に透徹す、榾火にかがへたる指さしのべんとすれば、四邊の巒丘兀として獨山の

如し、あゝ之をしも思へば血あり涙ある神州男兒、日三竿尙惰眠を貪るの醜ありて可ならんや、曉聲都門萬戸に響けば、一點明星未だ光を失はず、殘月未だ影を霜に斷たざるに、枕を蹶て長嘯一番劍を把て無聲堂に舞ふ、突擊奮鬪縱橫無盡、刀折れ力つくるの頃は滿身の流汗瀑となつて下る、陛下の彝倫鑾輦、百戰百勝、夷族をして山河徒に在りの嘆を發せしむ、武夫千載一遇の秋、無聲堂上釘鏹の音雷の如きを聞いては、人をして殊更意を强うせしむるものありたり。

此歲鹽谷部長回祿の災に罹り給ひ、菁莪書院道場を缺くに至りし爲、每朝小石川より通はれ、三旬一日の缺を見ず、金聲して之れを玉振するものと謂ふべく部員の意氣また爲に鼓舞せられたるもの幾何ぞ。

## 部威維揚

明治三十九年四月、外征の大志禁ずるによしなく、吾部有志九名、獨眼侯の跡を襲ふ、多年蓄積せられたる英氣俄然其の鋒鋩を露したるものにして、これより擊劍部對外發展の時代に入りたるものと謂ひつべし。

遠征勇士の一人中島氏によつて物されたる花草鞋の記を揭げて當時を偲ぶとせん。

## 花草鞋の記　（校友會雜誌百四十六號所載）

月やあらぬ、春やむかしの春ならぬ、しかも果敢なきは人事變轉の跡なりや、沅湘の流浩蕩絕えずして、日ねもす夜もすがら、東流し去るまゝに、宮女花の如く滿ちたりけん春の宮殿は、いま惟鷓鴣の飛ぶあるのみ、草とさす賤が伏せやの樞に通ひ來て、忽ちせかれ忽ちゆるき、裏山の檜の木立の秋蜩は、桂魂の光、皎々廣寒の宮居を洩れて、丹霄に透徹し、繁霜ふりて、籬畔一朶の晚香を碎きぬる明方の空よりえ聞えずなりぬ、恐らくはその歌ぶくろ支離滅裂して、むくろ化して一介の土となりけらし、人生また螻蛄と相距る遠からず、あはれ往くものはしもまさに斯の如きか。

枕上の青山依然たるに、鏡中千絲の髮、皎々雪より白く、宿昔青雲の志、一柯の夢の跡となり果てては、蹉跎として年のみつもり、末は小さき野寺の晚鐘に誘はれて、梵筵一縷の烟となりてのぼり往ぬ、今にしてきのふの事を思ふ、また千載



邀たりの感なくばあらず。

そのむかし結髮長劍の士、草枕の夢を、住みすたれたる茅店殘礎の上に結び、野鷄雨を喚ぶ幽溪の奥深く、連拱樹蓊の皮、爪とぐ熊羆に剝がれ去るところ、蕭條として篠つく雨に一夜を立ちあかし、狐狸の妖術に誑かされて、累々たる石くれを髏骼かと疑ひ、蛇ふすいばらを花の臺とあやまり、叢柯の露に袖をかたしきては、螭魅魍魎と技を較し、流星の光芒よく之を殪し、惡魔の巢窟に闖入しては、劍影閃電の下其屍をしてつたかづら纏ふ塵塚を築かしめ、かたへに生ふる草の花をして、白露滋きあしたは、蓮々として涙千行たらしめたる武士修練のみちも、はかなき世の習ひにもれやらで、鳴潮洗ふ荒磯の、沙頭の鳥の足跡と消えはてたるは、嘆かはしきことどもの極みならずや。

われ等そも如何なるものゝ輪廻にや、はた如何なる前の世の宿緣にや、百敷の都の人の袞服羅裙これきそひ、倩たる巧笑、盼たる美目これ尊ぶの風にそむき、古英雄の稜々たる俠骨の手ぶりを慕ひ、滿都の紅塵を瞰下して、唯我獨存の域にさすらひ、細腰懦弱の輩を名劍の一揮に塵殺して、やまと男の子の本領を發揮せむものと、つまらぬ所に力入れつゝ、苔の袂に身を窶し、燭をたいて日につぎ、つるぎの道の修練こゝに果して、幾春秋の花紅葉ぞや、しかもたゞ肩摩轂擊、車馬絡繹たる花の都の一隅に割據し、無聲堂てふ一棟の、蝸舍の中に豆がらを焚く音にもまさらぬ點頭蟲の、ほと〳〵とほとめくも、蝸牛角上に小闘を試むるにも似て、やがて身は一合程ちゞまり、果ては軒昂の意氣委靡しつきて、晚秋の籬に吊されたる烏瓜といふものゝ如くならむ事を恐れ、長劍を腰間に撫して、浙瀝たる武香陵上、深宵孤燈に對して慨嘆久しうしたることも度重なりては、那智の瀧つ白玉の數にもまさりぬ。

あだかもよし千紫百紅の春としなれば、青葉城下の士連歲みちのくより南下し來り、同氣相求め、同明相照らし、肝膽を吐露し、胸襟をひらいて吾人と練磨研鑽をともにせられたることや、これ吾人が一すぢの命脈にして、また春秋に富む青年輩が痛絕の快事にあらずや。

今や春帝親しく駕を枉げられ、洛城東邊の桃李、百紅萬雷將に綻びんとするに、歳々年々人同じからず、青葉城下の志士、住みなれし宮城野の巣を離立ちて、奈須野が原の風に征衣を掠めしめ、櫻に烟る花の都に、墨江の月に嘯かんとはせられず、人事變異常なしと雖も、かれ等果して何の主義によりて、つれなく萬朶の花にそむきて、陸奥の果てに蟄在せんとはする。

しかも勃々たる吾人の意氣は、湧出奔溢して新潮の如く、强ひて抑壓を加ふれば、五臟六腑に凝りて以て病痾を釀さむとす、おもふに奥羽は東隈の僻地、吾人の遊屐未だ至らず、しかも蜿蜒たる横枕、連亙幾十里溪川中を蛇引盤曲して、泡沫飛散激流怒號し或は岩石ながれを束ねて深潭をなす、雞犬茅簷の下に眠り、歸半菜畦を迎り林鳩はるかに雨を喚ぶ、剩へ澎湃淘湧たるわたつみの、濤碎けて萬顆の玉となるところ、金華山の沖つ邊に、鯨鯢千仞の波瀾をきり、一灣の弦月影依稀たる夕、松島の棹歌蛟龍を舞はし、松籟おもむろに耳朶をつく、吾妻の噴烟、半空は飛龍を描き、そぞろに遊魂をして迷はしむ、青郊の路、いにしよの古墓荒墳多し、概ね昔の俤をとゞめ、亭々たる松柏未だ碎かれて薪とならず、孤塋荒墳未だ犁かれて田とならず、青苔にうもれ蔦蘿にまとはれ、人をして征衣の袖をかいつくろひ、往昔逐鹿の年を追懐して、惆悵涙滂沱たらしむ、いでや年ごろの恩報じがてら、古へ武夫の手ぶりをしぬび、氷刀を汽車の網棚に横へ、一寒羈旅の客に身をなして、奥羽の烟嵐に放浪し、長刀を振ひて韋駄天の如荒び廻らむ、青春重ねて來らず、須らく當に南船北馬すべしと思なりぬ、一犬よべば萬犬應じ、北國巡禮の士同行九人、一蓋の菅笠に筆太に書きしるし、ゆくりなく上野よりあくがれ出でぬ、鹽谷疎髯の部長も亦折柄遊僊の志あり、以て幸に吾行を賑はし給ふ、さりとて文屋の康秀が誘ふにもあらず、すむべき國求むるにもあらず、はたまたいざよふ月に誘はれて、出でなんと思ひなりぬるにもあらず、迸溢する覇氣の一片を洩らさむ爲ならし、ころは卯月二日、かきくらしふる春雨に、軒の玉水、琴瑟のしらべをなすに、旅裝甲斐々々しくととのへ、無聲堂裡に一輪にゐ並び、瓦器をとつてともに屬し、陶然一醉して前途のさちを祝し、輦車十臺を驅つて



上野停車場に至れば、柔道部、野球部其他校友諸氏の、脛を埋む泥濘を犯して、親しく來られ、さきくあれと吾人の門出を賀し、柔道部、野球部は殊に賜ふに美酒佳肴を以てせらる、一蓋の呼鈴玎璫として時の逼れるを報ずれば、雨をついて車内に入り、居を窓の一隅に占む。やがて百尺の長蛇一再の長鳴を與ふるまゝに、校友諸氏の萬歳聲裡に送られて、關山千里のあなたに搖ぎ出でぬ、九千の春光都門に音づれて、東台墨堤の花嬋妍人を蕩せんとする時、つれなくも花草鞋ひきしめて、一刻千金の宵に別れ、宮城野のはて白皚々たるみちの奥に、殺氣紛々たる業に從はむとす、客愁忽焉として方寸の胸に起り、異域天涯に流落して、藜杖をひいて配所の月を見むのおもゝちあり、一行の人々三昧に入りし僧のごと、一方に割據趺坐して蝦蟇のごと、眼のみぱち〳〵、しばしが程は無限の沈默をこそ守りたりしが、やゝありては蜂の巣をつゝきたらんごと、栄花に虻の集ひたらんが如、噪ぎ出しぬ、その昔都をば霞と共に立ち出でて、梧桐一葉の秋に、漸く白河の關に辿りつきぬと讀みたりけむ人はいざ知らず、瞬く間に百里の山河を過ぎて暮色蒼然としてあたりをこめさるに既に青葉城下の士となりて、客窓孤枕冷やかなる下に、邯鄲の夢を結ばむ旅の習ひこそ、あはれに興あるものなれ。

中略

翌三日は雨を犯して青葉城趾を尋ねた、鹽谷先生其時詩を作られた。

青葉城頭頭勢雄　銅鵬標下立笻中
扶搖一擊圖南翼　却奮猛威向北風

後にまた五言絶句

沽酒燕臺市　浩歌憶昔雄
圖南謀未就　空嘯滿洲風

この夜は明日肝心な試合があるから、一同充分な睡眠が必要と云ふので、はやく床の中に潜り込んだ。

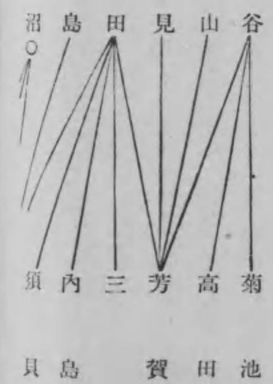
翌日黎明、一輪に居ならんで仲よく朝飯を喫し、八時だと云ふからそろ〳〵出掛けた、食膳に向つた時内田に電報が屆いた氣も氣でなくひらいて見ると、

シツカリヤレ　アニノナヲケガスナ　カツタラヘンジ　シヅコ

とある、一同よつて大いに勇み立つた。

第二高等學校には吾校よりも植物が澤山植はつて居て、梅柳參差して誠に奥床しい、その間を連れられる儘に尾行すると、やがて一棟があつて入口に紙が貼つてあつて、試合のある事を示して居る、中に入るとこれは劍柔兩道の共有と見えて、一方には疊がしいてある、其上には二高の校友諸氏が凡百人ばかり坐列して、勝負如何にと見て居らるゝ、他の側にもまた疊が布いてあつて、二高の劍道師範及新に檢證として聘したる小池先生、原先生がござる、鹽谷先生も溫容逼らず端坐して居られる。

先づ二三本使ふがよいと云ふので、佐々木、池田、中島等が道具を著けて二高の諸氏、かつは小池、原兩先生と劍戟の間に見えた、これがすむと愈々紅白一本勝負の番組が青い繪の具で麗々しく書いて貼付せられたのである。



双方甲斐々々しく武裝して兩側へ其順にゐ並んだ、其目は皆耿々として夜叉の樣である、もう斯うなつた以上は死地に深く突入したのである、たとひ白刃未だ舞はず、双龍雲霄に上らず潜んで劍客の腰にありとも、誰も針のさき程も油斷はせぬ、皆跪坐して檢證の言を俟つて居る、原先生が起つて勝負に就いて色々話された、やがて檢證が席についた、兩劍士は默禮した、忽ち堂中に躍出したは熊谷と菊池である、滿場水を打つたる樣に靜り返つて蚊の啼く程も人語はない、只兩士の劍尖が時々ふれる計りである、偖て熊谷は氣が相手を呑んで居たに違ない、立合ふや否や大喝一つの獅子吼をもたらした、已に黄河の決するが如き勢で突き出した切先は正しく命中して、竹刀は鍋蔓の如くしなつたこれで一本、菊池の君定めて雲蒸龍變の妙術があつたらうが、惜い哉もろく破れた、次で高田の君が出現せられて猛然切掛らむとした瞬間熊谷の方が突入して例の小手から胴に行く手を遣つた、うまくも又應へがあつて一本と聲がかゝつた、次で芳賀の君が舞臺の人となつた、君は中々の遣ひ手である、熊谷が破竹の如く猛り狂うて掛つたが、遂に敵手の毒刃に伏した、しかも熊谷の功は千載不滅だ、次で霜山將軍が鐵蹄煙を蹴つて來つて、三尺の秋水を駸して斬りかゝつた、數合互に手傷を負うたが、未だ何れも致命に至らない、其中如何なる機會か、芳賀が胴を引あげた、霜山は遂に屍を戰の庭に曝した。次に鶴見が龍攘の勢を以てせめかゝらうとしたが、勝誇りたる芳賀氏は心得たりと先に突入した、蓋し二士を呑噬して尚血に飽ない、三度目も上の目にしやうとするのである。悲しい事ぢや、可惜劍士機先を制せられたので何條たまるべき御面をしたゝかに遣れた、一輪の芙蓉未だ開きあへぬに、はやく夭折の不幸を見た、次で池田南京鼠が堂に入つた、見るからに一小漢細腰蒲柳の質である、芳賀の君の元氣は愈々高まつた、已れ鼠一呑と夜叉の如き赤き舌を出して打掛つた、其處が鼠小僧だけ中

明治三十八年對二高有志試合撃劍部選手

中術中に落つべきや丁と受止めて二の太刀に面上へ延びた、幸にして敵は白玉樓中の人と化した、好闘の士惜むべきである、次で三浦の君體を隼の如くかはして池田の小手を打つた、殘念な事には少しく不十分であつた、池田之は食へない奴じやと緊禪一番突擊して、鏨をも斷つの勢で例の小手をやつた、軍扇は池田に上つた、次で四國の男兒内島兄が挑戰した、彼は雲煙萬里、遙々肥健の白馬に跨りて來たのである、惜しい事である、又池田に一臂を落されて了た、古來征戰幾人か歸るとは善くも詠じた句だ、風采偉なる須貝兄が、戰の友垣の恨我ぞ報いて臭れんと息まき込で來るとガチンと受止め横面へ延た太刀は、正しく命中して紅英四散した、あたら勇士術を施すに所なく、徒に宮城野萎々の草を肥した、次で現れたは中村氏である。誠に有望な劍士である、池田と對峙した時勝負如何にと人々片唾を呑んで見て居ると、池田が滿身の力を臍下に籠めて胴を打と同時に面へ確に應へた。胴は外れた、此に於て池田不歸の客となつた、次で中島が立出た、中村と互に隙を伺つて容易に手を下さなんだ、



M39

忽ち一合して相接し、離るゝ時に中島が面を撃ち、中村が胴にて勝負なし、二合目の放れ際に中村の胴正く這入つて一言もない、多年の辛酸一朝にして水泡と消えた、之も人生の常事だから怪むには足りないものゝ、何と云ても後の祭、次で藤沼が畫中の人となつた、中村と數合して互の虛實の間を彷徨して居る、鋭利の寶刀果して誰の血を以て汚さるるか、疑問の所が面白い、かれこれする中矢張り離れる時に藤沼の面が正しく中村に入て、次で副將渡會、魁偉の體を以て龍虎玉を爭ふ如く、藤沼と闘ふ、黑雲油然として乾坤を埋め、只眼光が烱々として尖電の様に光るばかり、藤沼の飛込み胴が成功して渡會の頭足處を異にした、あつたら劍士又凉しき國の彼方に去るとは、拔山蓋世の俊傑と雖命運の盡る所只默從の外はない、愈々寺崎大將の出馬と相成つた、寺崎體幹小ではあるが、義經の様で鞍馬山の天狗の妙計を知つて居る、右往左往一瀉千里の勢を以て戰場を疾驅して、千變萬化窮天極地の妙を盡した、さすがの藤沼ももてあました時に横面へ二回許深手を負ひ、然しひるまず戰たので、兩士の目眦は裂け鮮血淋漓と云ふ始末、終に離れ際の小手に辛くも成功した、白軍の城上に日は落て、屍は道場に狼藉たる有様目もあてられぬ程である、佐藤、佐々木、内田の輩、張つめた勇氣洩らす所なく呆然としてしばしは言葉もなかつた。

これで勝負は終つたのだが、佐々木は其名刀を用ふるに所なく、遂に二高劍士九人を相手に戰つた、之は却て紅白勝負よりも勇しく見ものであつた、何と云ても江戸で研いた撃劍界の麒麟兒だけあつて、四尺餘の太刀を水車の如く振廻して幾春の閒鍛へ貯へた秘術を現して切結ぶからたまらない、白軍の士交互新陳代謝してやつたが、概ね佐々木の敵に非ずして、前後兜を脱いで了た、此で一同宿舍へ引とつて二高諸氏の御馳走を頂戴した、實に美かつた、下略、翌日松島見物、六日夜雨中向陵凱旋。

花々しき戰は終りぬ、之を以て對二高有志試合の第一回となす。

翌四十年五月四日、第十九回大會を催す、此大會に於て、本邦劍道界に特筆大書すべき事柄を有す、吾鹽谷部長世間勝

敗を爭ふの餘り、審判の聲のみを待つ隨を認めらるるや久し、吾擊劍部員は古武士を以て自ら任ずる者なり、自ら潔うするに於ては何ぞ他人の容喙を要せんや、との先生の發議に、先輩師範亦之を贊し、本大會より自信あるべき五級以上の試合には檢證を廢止す、敢て是が濫觴を作りし所以の者は、徒らに奇を好むに非ず、試合を君子の爭たらしめ、幾分にも正々堂々ならしめんが爲めの武士的大精神に淵源するものなり、後日東京學生劍道會に於ても、之を範とするに至れり。

此年九月、新入部員百名を超え、しかも斯道の手練者少からず、部内光明に輝き生氣溢る。

十一月初め、第二高等學校劍道部より挑戰狀來る、好き敵こそあれと部員勇奮一番、手ぐすねひいて待構えしに、故ありて沙汰止みとなりしは、勇士の遺憾推計られて哀れなり、然れとも士氣を振興したる事疑を容れざる所なり、第一高等學校擊劍部ありてより年を閲ゆる事正に二十歳、櫛風沐雨營々培はれし大樹は、こゝに至り果然艶麗比類なき芳華を開き、馨香馥郁一世に振ひ、我部全盛時代を現出するに至りぬ、即四十二年十月三十一日創立二十年記念大會開かる、これより先四十年大學先輩及委員間に二十年祭大會の議あり、一は吾部二十年間結び來りし美果を示し、一は二十年一日の如く誘導を賜はりし鹽谷部長の德を表し奉り、並に老體退身し給へる根岸老先生に對し、感謝の意と慰老の志とを呈せんものと、先輩部員中より九人を擧げて、準備委員となし、記念大會開催の事とはなりたるなれ、乃ち創立記念日たる十月三十日の頃を卜して大會を催し、記念品贈呈の儀を畫し、先輩諸氏に醵金を募る、言下に十金を遠く海外より贈る士あり、衆共に盛典を祝し、擊劍部の隆盛を賀し、兩老先生の健康を祝し來る、會未だ開かれざるに、各委員の胸中已に躍るものありきと云ふ、三十日午後は一部對二部三部大紅白勝負を行ひ、翌三十一日午前十時より記念大會を擧行す、來り會する者常に倍し、未曾有の盛大を致せり。

午下二點鐘をきゝて記念品贈呈式の幕は開かれぬ、菊池教頭拍手場裡に起て、新渡戸校長に代つて挨拶あり、次に二十年記念大會創立委員總代として、文學士根岸和一郎君登壇、兩先生に對する謝辭、部員に對する激勵の詞あり、氏の降



壇と共に、菊池教頭、記念品を鹽谷部長、根岸老先生始め多年本部の爲めに靈瘁せられたる檜山、中山、木下、山里、瀬戸山の諸先生に贈る。豫て薫隣に浴せし先輩、部員の、微志の一端茲に屆きたるなり、鹽谷先生溫顏に笑を湛へられ、起つて答辭を述べらる、曰、

記念品は有難く頂戴仕る、回顧すれば二十年前に呱々の聲を擧げたる赤兒、漸く成年の境に達したる事故、永き星霜と云べし、今日我擊劍部の隆盛は、二十年前の比にあらざるは、十目の見る所なれど、漸く一人前の年齒になりたるなれば、今一層の發達を望まざるべからざるは云ふ迄もなき事なり、創立以來多大の助力を與へられし、河田子爵及渡邊子爵は、一は已に沒し、一は事故の爲め又當時世話役たりし高橋博士、兒玉、野元の諸氏も夫々差支ありて本日出席なかりしは、大に遺憾とする所なり、尙望む、此盛儀は此に止む可らず、更に三十年五十年の未來を期せざるべからず、云々と。

拍手聲裡無檢證勝負を開始す。數十番の龍攘虎搏中舊き先輩の組合は殊に萬目を峙てしめたり、了つて根岸信五郎先生五人掛（部員）及根岸先生對鹽谷先生の試合あり、一は白髮と青年、一は老翁と老師、一は動一は靜、曖々の中善く凛乎たる趣を藏し、壯烈懦夫をも起たしむるの概あり。

夜根津娯樂園に懇親會あり、來賓堂に溢れ、盛會を極む、去ぬる三十八年春吾部の有志、懸軍百里東征の途に止り、勇戰奮鬪城下の誓を爲さしめて以來、兩雄相見えざる事茲に六星霜、四十二年極月、忽焉として飛檄北邊より來り、古き歴史は再び繰り返されんとす、古の勇士は祈りしに非ずや。

うき事のなほ此上につもれかし
限ある身の力ためさん

丈夫の血潮は躍り、健兒の鐵腕は鳴る、況んや日本固有の武道に於て、模範試合の事たる、意氣沈滯せる天下學生界に覺醒の刺激を與ふる甚大なるに於てをや、向陵男兒何ぞ辭せんや、乃ち冬季休業始まるや、十數名相寄りて練習を開始す。

明くれば明治四十三年なり、一月二十一日降り初めし雨を犯して先輩佐々木保藏君、中島喜久平君、藤沼庄平君、佐藤莊一郎君、末廣嚴太郎君、寺井久信君、乾孝彦君寄宿寮に參集せられ、部員十餘名出席の上、對二高有志試合交渉の顚末を先輩に述べて熟議を凝らす。

一、試合擧行の件、　滿場一致可決

二、勝負の方法、　一切二高に任する事

三、試合場、　嚶鳴堂か本校講堂に於て爲すべき事、斷じて他の場所を許さず。

右議決す、第二項をかく決したる所以は、吾擊劍部に流るゝ貴き精神を重んじ、武士の情、遠來の客を遇する道なりと認めたればなり、第三項に於ては聞く所によれば、柔道試合は高等師範の講堂を借りて行ふの議あり、二高方深く敵地に侵入する事を不利とし、他に處を選ばん事を望むや切なり、然れども顧ふに神聖なる嚶鳴堂の巍然として在るあり、何ぞ外に所を借る事を敢てせんや、多人數を容るゝ能はずとするも、見世物に非ず、何ぞ妨げんや、嚶鳴堂狹しと雖も、一二高の校友を包容して餘りあり、依て斷乎として之に決す。

擊劍部、柔道部共に彼の挑戰に應じて快諾を與ふるや、寄宿寮員は二月二十一日、倫理講堂に於て兩部選手推薦式を擧行す、午後三時、新渡戸校長、各部長、教授、校友一千制服整然式場に會す、寄宿寮總代會議長岩切君の先導にて兩部選手着席す、此に於て岩切君一々選手を紹介す。

先づ校長訓へて曰く、「武藝は身を修むるもの、昔日は之を以て直に能く君國に報ずるの道としたれど、今日吾人には更に貴きものあるを遺る可らず、」と、谷山生徒監亦ビスマルクの言を引いて勵まして曰く、「大膽にして直進せよ、左顧右眄する勿れ、」と、次で鹽谷部長誡めて曰く、「願くは態度を慎み、品格を重じ、鋭鋒を揖讓の間に藏め、奇略を謙抑の內に蘊み、衿誇なる勿れ、怯懦なる勿れ、敵を侮る勿れ、己を恃む勿れ、徒に勝負の末を爭ふ勿れ、勝つべきに勝ち、勝たざるにも亦勝つ、是れ我黨の精神なり、」と、菅柔道部長亦告ぐる所あり。次に眞野寮生總代の式辭あり、熱誠の情を綴るに、鐵石の文字を以てし、之を誦するに、獨特の力ある聲を以てす、「聞說、昔時對校試合に於ては、其效果利益の多大なるものありしと共に、之を伴ふ弊害も亦少きに非りき、然れども吾等は玆に對校試合の是非利害を論議せんとするものにあらず、今吾柔道部及擊劍部の歷史は繰返されんとす、此時に當り、吾等は吾歷史に進歩あり、歷史に向上あらんことを衷心より期望して已まざる所なり、然らば進歩とは何ぞ、向上とは何ぞ、之を要するに、試合に附隨するあらゆ弊害を除去し、其美果を納むるに在り、換言すれば、廣く天下學生界に向て、武道試合の範を垂れ、滔々たる輕跳浮華の徒に對して、質實勇健の實例を示し、渾沌濛々其歸趣する所を識らざる彼の徒輩に向つて、其方向と針路とを指示するにあり、（中略）見よ彼の矗々として雲表に聳え、亭々として九天を摩する古松老杉は、其根よく九泉の深きに及ぶ、其能く天空を摩するものは選手にして其能く九泉に及ぶものは校友に非ずや、吾等は選手諸君に信頼する所極めて深し、然れども選手既に意氣軒昂衝天の慨あるも、其根柢よりそが後援たるべき大任ある校友諸氏にして、萬々一少しにても其熱誠に缺くる所あり、其同情にして、乏しき所あらんか彼の天に聳ゆると見えし巨木も、亦何ぞ十字街頭の電信柱と選ぶ所あらんや、電柱に對し樹葉の繁茂を求め、花開き實結ぶを望むもの、百年黃河の淸冽を待つと、其愚何ぞ撰ばんや。

醒めよ、一千の校友、再言す、吾歷史は今將に繰返されんとす、起て自治寮の健兒、朔風一過腥騷の氣、向陵の天地に滿つ、此秋に於て吾歷史に進歩を促し、吹く北風に陽春を回すもの、抑々誰が任ぞ、果して誰が任ぞ、」と、粟野柔道部選手總代、必勝を期すと叫ぶ、次に相浦、二十名の擊劍部選手を代表して、一言謝意を表し、選手一同の方寸に低徊する同感を卒直に吐露して曰く、「吾人、諸君の意氣に感ず、功名亦誰か論ぜん、唯熱誠以て報ずるあるのみ、」と言得て又餘蘊なし、選手の心胸只是あるのみ、曾一文字に結び眦はつりぬ、言ふ可らざる氣は場に漲り、一道のエレキ校友より選手へ、胸より、胸と相通じ、其處に强固なる或物を結晶す、團結の美や、此に至りて極れりと云ふべく、至大至强、天下何者ぞ、

敢て蟷螂の斧を振はんとぞする。

對外試合の練習としては、新手に接するを最とするの見地より、練習試合の擧行を高等師範に交渉する所ありたれど、彼應ぜず、乃ち早稲田大學に求めて應諾を得たり、三月五日、選手二十名道具を肩にして徒歩戸塚に赴く。比大事の前に於て、選手が各所の大會に參じ顯したる成績は、實に天下無敵と云ふも過言にあらず、戰へば必ず勝ち、爲めに士氣油然として益々振起したり。

推薦式後、朶寮四番五番の兩室に、選手悉く合宿す、然も一般部員の稽古亦等閑に附する能はず、乃ち選手を折半し、隔日に之が任に當る事とし、一半は放課後大學道場に通ひ、夜に入りては一同打連れて、小石川有信館に赴き、粉骨碎身練習に凝る。

此間試合に就き、二高先輩と吾先輩との間に屢々交渉あり、吾に於ては試合場の何等要求する所なし、檢證の如きも先方の申出により、眞貝忠篤、高野佐三郎兩先生の勞を乞ふに決す。

三月二十二日、選手一同相談の上、決定する所左の如し。

一、試合場所　　嚶鳴堂

二、選手人員　　十五名

三、期　　日　　四月七日午後二時

四、勝負方法　　三本勝負紅白試合

三月三十一日番組交換を爲す確定したる吾部有志選手左の如し。

水野、相浦、小室、吉植、鈴木、長谷川、田原、近藤、稲月、山崎、鶴田、榊原、宇野、吉井、須賀、

補缺　森戸、伊原、山口、羽部、富田



骰子は既に投ぜられたり、選手の決意今更に堅きを加ふ。

四月一日午後六時、二高選手の入京を上野に迎ふ、先輩の斡旋により、豐國に於て懇親會を開く、重大なる責任を荷ひて、不日旗鼓の間に見えんとする兩軍の勇士、一堂の中、談笑の間、互に肉を喰ふ、健兒の感懐そも奈如、翌二日夜、菓子蜜柑を携へて、上村旅館に二高選手を訪ひ、遠來の勞をねぎらふ、武人の情愛流露、金色の光をなして、玉と閃く。

遂に四月七日は來れり、將に人事の極を盡して、天命の定むる所を待つ、昨日中霏々たりし春雨の漸く晴れ、朝暾輝々として上野の森に高く昇り、庭前の櫻色美しう、南風靜に梢を渡る、さはれ、戰友昨日大塚の野に利あらざりき、武香陵覇者の任あゝ果して何人の肩に落ちしぞ、戰友を弔ふも今なり、戰友の長恨を解くも今なり。

試合開始前、兩檢證及び二高側先輩、寺崎、渡會兩君、一高側佐々木、中島兩先輩、一室に議す、高野氏突如として曰く、勝敗容易に決せざる時は引分く可しと、吾先輩引分全廢を主張す、彼頑として聽かず、終に息の續かん限十分技を競はしむるに決す。

時既に迫り、無聲堂準備全く成る。

南の方には、馮陵たる青葉城下の健兒、綺羅星の如くに打ち列び、痛嘆の一太刀を向陵健兒に報ひ、凱歌の聲に自治の根城を搖り動かさんず勢はと見れば、我校の勇士、勃々たる英氣を胸中に抑へ、髀肉を撫して勝負如何と待ち顏なり、東の來賓席も、西の大學生席も、一時過ぐる頃には立錐の餘地なく、堂内一千餘の人衆を以て溢れんばかりの有樣なり。忽焉として急霰の如き拍手滿堂に響けば群衆を分けて悠然南と北とに分れて出でたる三十の貔貅、甲冑は戛々として兩肩になり、秋刀は閃々として腰間に閃く、兩軍相對して禮する頃は殺氣空濛、沈默場を壓すること、恰も颶風の到らむとするに先ち、月光冴ゆる海上、一瀾の飜るなきが如く、只黑き胴の中に蜂章の鮮かに、柏葉の明かに輝けるあるのみ、時に鹽谷部長泰然として場に現はれ、美髯を撫して徐に語つて曰く、

玆に二高選手諸君と試合を行ふ、各長日月の間の練習に鍛え上げられし伎倆を以て勇ましき活劇を演ぜらるゝなるべし、抑も試合に於ては、競ふ所は技なりと雖も、心は和平ならざるべからず、相手なければ技を進めむ由なければ、技の上達を願ふ者は、勝敗の數を爭ふ必要ありと雖も、精神に於ては何の敵視するあるなし、勝者必ずしも誇るに足らず、敗者必ずしも屈するの要なし、勝つて冑の緒を弛めず、敗れて自ら顧みるあつて、始めて、試合はその目的を達すべし。去ぬる日露の戰に於て、東郷・乃木の將軍は勳功四海に轟くあるも、聊の驕傲なるなく彼れが使節ウィッテも亦、大敗の後を受け、よく自若として、その任を全うしたり、吾等此の覺悟を胸に藏して、今日の勝負を終らんか、其の益や計り難かるべし、願くば此の試合が都下延いては、天下に斯道の模範を垂れんことを。

拍手の裡に部長座に復し、佐々木大學生應援に關して衆に告ぐるあり、時辰二時を指すの頃、眞貝先生表審判、高野先生裏審判の下に愈々試合は始まりぬ。(紅白三本勝負)

再び拍手閧聲、堂内に轟きて、兩勇は徐ろに場に現れたり。

若見――須賀　須賀は英姿四邊を拂ひ、兼ねて鍛えし鐵腕に、研磨怠らざりし利刀を提げ、人觸るれば人を切り、馬觸るれば馬を截らむづ勢、彼れ若見は身長須賀に及ばずと雖も、逞しき筋骨は彼れが慓悍を示し、烱々たる眼光は彼れの弱卒ならざるを表せり、彼必ずや先陣の功名をなして、士氣の鼓舞に資せん爲め、撰ばれし一方の驕將、黑き袴、黑き稽古着、黑き道具に身を固め、寶刀一閃向陵の木の葉武者を秋風も待たず散じくれむと待ち構へたり、太刀先合ふてヤーオーの聲聞ゆるや、彼黑豹の如く飛び廻れば、須賀はすか〳〵しく受け流し、樣を見て飛び入らむと伺ふ折、時してあれや、若見全身の力を込めたる一刀を、須賀受け損じて紅英面上に四散たり、須賀無念の痛手を押へて敵に肉迫し、一聲高く擧ぐると見れば、若見の小手は既になし、若見も今は必死となり、左拂右擊、手負猪の荒るゝはかくやと偲ばしむるばかり、須賀は風に撓む柳絲の如く、柔よく剛を操り、隙を伺ふて再び小手を切り込めば、流石の若見も身を轉せん由もなく、憐れ陣頭の血祭となりぬ。



長内――須賀　戰友の仇觀念せよと、怒髮恚眼、白面を被り躍り出でたる長内滋雄、面小手胴の脈ひなく、當るを幸ひ薙ぎ立て〳〵攻むれども、須賀はちつとも騷かず、受けては流し、流しては打ち込む樣、千軍萬馬の老將の如し、長内何處に隙を見出しけむ、勢込めて打込みしも、須賀ひらりと身を開けば劍は長く空に鳴り、須賀飛鳥の如く乘り入るやと見る間に敵の横面既になし、長内は思はぬ不覺とかつと怒り、此處を先度と火花を散らして攻め立つれども、須賀の守りは金城湯池陷るべき術もなし、敵の勢ひるむよと見し須賀眞向に振り翳して打ち下せば憐れ長内の頭は唐竹破り。

濱口――須賀　頼み難きは我が先陣の殿原かな、いざ濱口が太刀の切れ味思ひ知れと青眼につけて迫り來れば、須賀心得たりと身を退き丁々發石と打ち合ふこと二三合、劍光一閃あなやと見れば濱口が脇腹に血紅なり、敵の守りは胴に薄しと須賀再び胸を拂はむとすれば敵もさるもの體を代して眞向より打ち下す一刀、面に當つて音戛然。思はぬ不覺とりたりと氣をとり直し旗鼓堂々と攻め寄せて、三度目に拂ふ胴一本、濱口遂に路傍の白骨となり畢んぬ。

鈴木――須賀　天晴なる敵の振舞かな青葉城下にその人ありと知られたる鈴木政三見參せんと寄せ來れば數度の合戰に筋骨疲れし須賀武者所已れも敵の片割れか、いざ我が太刀の錆となれと渡り合ふ、鈴木先づ胴に利し順賀引き留まつて防戰せしも連戰の疲れ如何ともすべからず、再び敵の刀に胴を拂はれて、あはれ好漢遂に白玉樓中の人となる。

鈴木――吉井　敵の先鋒を斃せし門出の、功名魑魅魍魎も何かはせんと、猛り狂ふ鈴木を尻目にかけてしづ〳〵現はれ出でしは吉井なり、鈴木獅子奮迅の勢を以て亂打衝激至らざるなかりしも吉井の守備は嚴として動かず喉も通れと突き込む鈴木の太刀を流して胴を拔けば鏗然として手ごたえあり。これにも懲りず寄せ來る敵を再び拂へば胴體二つとなつて鮮血淋漓。

高橋――吉井　吉井血に渴きて敵や何處と見廻せば敵軍押し分けて悠然出でし高橋は「我こそ敵に勝太郎」と無二無三

と切つてかゝれど、吉井は頑然として、其の守るや、岩礁の磯波を碎くが如く、その攻むるや蒼鷹の燕雀を襲ふが如く、敵の胴を切ること二、さしもの高橋遂に向陵の土となる。

渡邊――吉井　二人を斃せし吉井は血刀拭ひ一息つかんと思ふ折しも躍り出でたる渡邊三郎身長吉井に及ばずと雖も「我れ一歩を進んでこれに加へん」とキッ先鋭く詰め寄せたり、吉井心得たりと身をかはして腕に覺えの腹一撃、渡邊恨みの一太刀返さむものと逸りしも吉井の打ち込む太刀受け損じて頭上に霹靂一聲。須賀三人を倒し、吉井亦三人を切れば吾軍色めき渡りて意氣軒昂なるに引き換へて、敵は無念の涙やる瀬なく、鎧の袖をぞ濡しける。されど榮枯盛衰は世の習勝者必ずしも常に勝たず敗者必ずしも常に敗れず、玆に遠征軍の希望を一身に集めて中堅の勇將堂々として出馬しぬ。

高野――吉井　敵三人を截つて勢猖獗を極め、後より來るは何の知れたもの葉末の露を拂ひくれむと勢込むと高野心得たりと一歩を退き吉井の打ち込まむとする小手を押へて一本、吉井し損んじたりと身構せんとする所にすかさず高野小手を撃てば、吉井の右腕遂に空し、勇士斃れて悲愁の風蕭々として場を拂ふ。

高野――宇野　敵ながら美事の腕前、いざや見參せんと迫り寄りしは宇野愼三、今日の戰に敵三人を撫切にして、後日初戰の功名談にせんと物せし身、前車の覆りしは我が誡めと、小手を守りて、胴を伺ふ、いざ一打と思ふ所を、こゝぞと打ちし高野の小手に手ごたへあり、かゝる薄手に何條ひるむべき、復仇の刄觀念せよと、進む所を高野得たりと打てば宇野の手首は既になし、

高野――榊原　榊原小兵なりと雖も術に於て鳳雛麒麟兒いざ打ち來れと身構ふれば、勝ちに誇れる高野、猪小才なと小手を拂へば榊原受け損じて無念の痛手、吾勇を鼓して撃ちかゝれば彼も應戰花々しく、奇態變姿を盡したり、折もあれ、彼が一刀空に哮りて榊原の面上轟然として音あり。

高野――鶴田　高野愈々猛り狂ふて右往左往に馳せ廻り、脫兎の如く、夜叉の如く、振舞へど、吾は皆て三田臺上に血の雨降せし豪の者、丁々發石と鎬を削るかと見ればさつと開いて隙を伺ふ、鶴田岩をも通れと打ち込む所、老狸の秘術體を轉じて鶴田の小手を美事に拂ふ、再び悍戰健闘十餘分何れ勝つべしとも見えざりしが高野の切り込む刄鶴田が胴に當り死屍空しう野草を培ふなり。



高野――山崎　叱咤の聲耳朶を打つて面を上ぐれば山崎の英姿巍然として場に仁王立ちになり、寄らば切らむの勢あり、高野心得たりと渡り合へば山崎連りに面を打ち小手を切り胴を拂ひ秘術を盡して相争ひ、攻むるや火の如く、守るや山の如し、相搏撃すること數十合高野遂に面を利し次いで胴を得て、我軍の勇者彼れが毒刄に斃るゝ者都合五人大厦の壞れんとするを一木を以て支へよく頽勢を挽回したる功や逸大、敵ながらも大晴れの振舞なり、此の勇者を得て敵軍俄かに色めき渡りぬ。

高野――稻月　「吾こそは無聲堂裡にその人ありと知られたる稻月光勝光榮ある勝利は我が物なりと名乘りを擧げて現れ出でしは大兵ならずと雖も低からず、太刀先の鋭さは寒天に冴ゆる利鎌の月の光に譬へんか、高野悍なりと雖も前數度の戰に既に困憊の色あり、一上一下相争ふとき稻月得意の胴を打ち、敵の意氣漸く衰ふる所を身を挺して面を撃てばあはれ勇將遂に稻月が太刀風に散りたりける、されど一本をも失はずして五人を倒したる彼れが意氣誠に盛なりと謂つべし。

石和田――稻月　勇將を失ひたれども頽勢遂に回復せり、此時出で來りしは、敵中の最小冠者、石和田氏、東西跳梁高下を避けず、勢激しく相争ひ、谷は搖り山動かむばかり、彼は連りに我が面を伺ふ、吾進んで面を得れば彼れも亦面を利して一勝一敗更に力戰苦闘の末稻月胴を切つて、あはれ石和田の白骨路傍の石となり畢んぬ。

國澤――稻月　敵や何處と見廻す所國澤長軀を以ておうと答へて進み寄る、彼れが突き入る太刀空を掃せて、胴を拔けば見事一本勝は吾にあり。國澤怒つて面を打てば稻月受け損じて彼亦一勝、奮激突進「ドー」の一聲聞ゆれば國澤既に此の世の人にあらず。

高久――稲月　稲月大河を決したらむ勢を以て敵三人を討ち取れば、善き敵こそは御座んなれと跳り出でしは中堅の勇將高久忠一、縱横無盡に切り廻り遂に稲月小手を失ひしも再び盛り返して横面を打つ、勝負となつて戰愈々激しかりしが武運や拙なかりけむ勇將稲月小手を切られて引き下る。

高久――近藤　近藤肥滿の五體を持ちながら左に飛び右に遁れ前進後退、隙を伺ふて截り込む「腹一本」高久防ぎ得ずして鮮血迸つて戎衣紅なり高久胴を拂へば近藤面を打ち暫の間は何れあやめと引きぞ爭ふ有樣、高久の小手、美事近藤の局所を打つ、近藤怒つてしたゝか面を打ちしも充分ならず、猶も詰めよる所を高久小手を打ちて無念の返討。

高久――田原　あてなる姿は卿相雲客を偲ばしめ田原中納言とでも云ひたき樣なれど、刄を把つては鬼神魔神も三舍を避けむ田原武夫、兼て研きし刄の味試すは今日なれや、いで拔群の功名をと、逸る心を押へつゝ一打くれんと勢込めば既に高久の術中に陷りて小手を失ふ、氣を取り直して攻めよれば高久體を開いて得意の小手、勝は遂に彼れの者なり、珠玉空しく千尋の底の岩間にかくれ、芳蕋空しく甘香を朝風に傳ふとは豈詩人が墓畔の空想に止まらんや、研きし刄の試みられずして再び鞘に收めらる、賴み難きは勝負の數なるかな。

高久――長谷川　小兵なりと雖も神出鬼沒の妙を得たる長谷川俊明、寄せつ返しつ相爭ふ、高久先づ小手を得しも長谷川急叢の如くに打つて掛り敵のひるむ所を小手を打ちて一勝一敗、長谷川滿身の力を込めて横面を拂ふを高久刄の下をくぐりて胴を切れば鏗然として響あり。

高久――鈴本　玆に鈴本六尺に垂んとする偉軀を以て、悠然進み出でゝキツト身構ふれば、牢として拔くべからざる泰山の如く、巖として動かざる盤石の如し、高久勝ち誇りて散々に切り立つれども、鈴本は疾風の如く飛鳥の如く、變現自在、流石の高久も何條たまるべき、小手を落されて茫然たる處、再び鈴本打ち込めば申分なき小手、高野と共に中興の驍將あはれ鈴本の刄の塵と消え、死屍吹く風のみ哀なり。



杉沼――鈴本　杉沼、長こそ我に及ばされこれ亦一騎當千の勇士、よし敵神明に通ずとも吾が劍には及ばじと激しく打つてかゝる、鈴本おうと答へて面を打てば刀痕歴然として杉沼が面上にあり、劍戟の音に河を析き叱咤の聲電電を崩さむばかり、疾戰の間に杉沼小手を得て一勝一敗。紛々紜々亂鬪し、渾々沌々力戰し、殺氣凝つて虹の如く兩軍手に汗して勝敗如何にと見守るとき、裏審判より聲ありて別け、知らず吾人は審判の打合せ　、されど時は未だ三時半甚だ遲きにあらず、鈴本は意氣昂然として甚だ疲れたりとも見えず、あゝ輸贏を決するの由なく再會を期して分れしとは殘り惜しき事共なり。

梶塚――吉植　壇上に立ちては滔々懸河の辯、劍を把つては鬼神の秘術、文武兼備の勇將吉植庄亮、白き袴に身を固めて進み出づれば、梶塚この勇將の首搔切つて後の手柄談にしてくれむと脇腹見がけて切り込めば吉植が身を退いて、眞向より切り下す一刀誤たずして梶塚が頭上に碎け、再び打ち込む吉植の太刀を受け損じて面を失ふ、此日の吉植の働き振り、白隼の如く白虎の如く意氣抗すべからざるあり。

山吉――吉植　山吉畢生の勇を鼓して吉植と渡り合ひ、二三合打ち合ふと見し間に刄を潛りて胴を得たり吉植小癪なと、獅子奮迅の勢を以て先づ面に利し兩勇蹇りてせり合ふと見し間に吉植得意の離れ小手敵は見事に敗れたり。

野村――吉植　三軍の囑望を一身に集め、最後の防ぎ矢なして、北軍の威を擧げむと現はれしは敵が副將野村なり、高さ吉植に優る二寸、流石の吉植も暫時は打ち込む術もなく兩勇相睥睨して立ちたる樣、敵は二高一の腕前と見て取つたるは我が僻目か、やがて、一擊二搏追ひつ追はれつ相爭ふ姿は兩虎深山に爭ふとき鏗然として風起り、二龍青潭に戰ふ時沛然として雲起るとは誠にこれ等の謂ひにや、攻むるに一擊を苟もせず守るに一絲を亂さず、紅か白かと爭ふ樣心行くばかりの試合なり、吉植下りし袴をしめ直し且つ進み且つ退くこと飛鳥の如く陽炎の如し、一千餘の觀客かたづを呑んで何れが勝つ何れが負くるやと手に汗握り、滿堂肅然として只響くは劍戟の音と叱咤の聲のみ、時しもあれ表審判に聲あり兩雄

他日再會を期して分れ行けば、勝敗の數自ら定まりぬ。

岩澤――小室　敵は大將吾は三將、龍攘虎擲相打ち相受くる中、小室は常に優勢に、岩澤は常に受太刀なり、小室先づ面を利し、猶も面に胴にしきりに攻め立つること餓虎の兎兒を追ふが如し、再び挺身面を打てば敵將の首は飛んで寞々たり、

大將副將を殘して我車の勝利となる。時に四時過ぐる五分、見よや水野相浦の身には恩賜の胴燦として光を放つにあらずや、その結果は

紅（二高）　白（一高）

- 岩澤庫治 ― 水野秀
- 野村益雄 ― 相浦鼎五
- 山吉直一郎 ― ○小室由三
- 梶塚隆二 ― 吉植庄亮
- 杉沼忠三 ― 鈴木英正
- 高久忠一 ― 長谷川俊明
- 岡崎忠勇 ― 田原武夫
- 石和田一 ― 近藤興次郎
- 高野誠三 ― 稲月光勝
- 渡邊三郎 ― 山崎匡輔
- 高橋勝太郎 ― 鶴田雅二



- 鈴木政三 ― 榊原鉞止
- 濱口覺太郎 ― 宇野愼三
- 長內滋雄 ― 吉井誠一
- 若見伍郎 ― 須賀吉之助

たとへ屍は巨港の岸を塡め血は長城の窟に滿つるの慘劇なしと雖も、殺氣空濛凜として人に迫る者ありしが、兩軍互に兩校の萬歲を三唱すれば悽慘の氣自ら晴れて親睦の情これに代り、堂內の人に莞爾たる破顏あり、堂外の花に烈々たる雍光あり。後兩軍の戰士は諸先生諸先輩と共に本館食堂內に茶菓を擁して且つ語り且つ笑ふ、劍戟の間に見えては狼虎鬼神にも劣らぬ勇士、談笑の興に乘じてはその無邪氣なる小兒の如し半時間餘にして、各々別を惜み、和氣靄々の中に解散せり。

嗚呼・浮沈は時なり、勝敗は數なり、勝者永劫に然るにあらず敗者永劫に然るにあらず、若し勝敗の數に囚はれてそれ以上何者をも求むるなくんば、今日此の光榮ある勝利も一時を飾る空虛の虹、春の夜のあだし夢その樂しく喜ばしきは、やがて來らむ、事々の悲しさと、苦しさを增さむよすがたらむのみ、而して勝負以上の或者は必ずしも勝者の得る所にあらず必ずしも敗者の失ふ所にあらず、これ勝者敢て驕るに足らず、敗て屈するの要なき理、吾人は勝利の名譽に醉はんよりは寧ろこの或者を失はざらむに汲々たらむかな。願くは、一千の校友が此の競技をして、ローマのアンフィシエターのそれならしめず、ギリシヤのオリンピヤのそれたらしめんことを、同じくこれ技の優劣を爭ふ、而して一は大なるローマを亡ぼし他は小なるギリシヤを盛にす。若し此の技が校友の意氣振興品格硏磨の一手段たらずして單に選手が技倆體力の競爭に留まらんか、かゝる競爭は餘りに高き犧牲を要す深く願るべきは吾人の態度なるかな。

翌八日大學道場にて兩選手の稽古を行ふ日敵を得ざりしもの好敵御座んなれと渡り合ひ、前日の不首尾を慨して腹癒せ

をなすものあり、對抗勝負よりも興味ある數番を見るを得たり。

九日午前九時、蜂章男兒帝都を辭す、青葉城健兒と勇を競ふ事玆に二回、彼等不幸にして未だ其志を成さず、顧れば二高劍道部との交際は明治三十六年に始まり誠に新しと云ふべからず、常に武士道に準據して君子の交を全うす、近者勝敗に拘泥するの極、今に縷々痴人の繰り言を爲すものあるを聞く、吾人何すれぞ彼が陋を學ばんや吾人の究竟する所斷じて勝敗の一途に非ず、道義地を拂ひ剛健の氣風稀なるの時、天下青年の龜鑑たるもの夫れ卿と吾れとのみ、遠大の抱負を持し功を永遠に期し、永劫君子の體度を失はざらんか、吾人何時にても歡んで諸君を待つものなり、二高劍士諸君切に自愛を祈る。

吾擊劍部の對外關係は二高とのそれを以て盡く、自ら進みて敵を求むる事は敢てせずと雖も、他の來りて角逐を乞ふあらば決して拒むものにあらざるなり。

此に一言を費さゞる可らざるは最近試合前の合宿の狀なりとす、試に當時朶寮に在りし人に問へ、彼等異口同音に答へて曰く「斯く有益にして充實したる生活は未だ他に於て經驗せざる所なり」と、各人當時を追懷していつの時にか忘れ得んや欣々として述懷せざる者なしかくてこそ合宿も意義あるなれ對抗勝負も意義あるなれ。

彼等の朶寮に相寄るや、禮に於て缺くるなく、友情に篤く、喜憂を分ち、正を勸め邪を匡すに力めしかば、美風俗をなし、人格の士の集ふ處新入部員蝟集し、延いて校風の揚りしこと極めて大なり。

五月二十二日、隈田川上流尾久村に於て三年送別舟遊會を催す、校長、部長、諸先生、先輩を始め部員五十餘名出席、盛會なり、夕陽森に沒し、穹窿眞紅、河水亦相映じ漣漪閃々、兩岸の新綠今尤も鮮なり、八葉の小舟一團となり、水流に托して下る、時しも團々たる月出て四圍寂たり、唯賽歌詩吟水上に震ふ、和氣靄々たる美しき會合に於ては粗酒野肴と雖も大牢の如けん。



此年六月、寄宿寮創立二十周年記念として道場新築の議あり、擊劍柔道兩部の發達は舊來の道場に堪へざらしめたればなり、建設資金は先輩に請うて其寄附を仰ぐ、柔劍道兩部亦委員を派して寄宿寮委員の東西奔走を助く、尙在校生及以後の新入生より醵金せしむるに決す、然も急に豫定の資を得ず大正二年迄繼續す。

爾來隆盛の後を承けて歲を經過する事三春秋、以て今日に至る少しく現狀に就いて記す所あらんか。

## 大正二年九月對二高試合交渉顚末

新學年劈頭に當りて對二高試合交渉の事あり、而して其顚末に就きては大正三年五月號校友會雜誌中に記載し有るより今之を全部摘記して以て當時部員の意氣を偲ばん。

『對外試合が術を磨き神を練るに有益である事は云ふ迄も無い、其の徒に之に伴ふ弊害が多いと云ふ理由で屢ゝ識者の試合其物を非難する爲か近來一般に對校的性質のものが減じて來たのは頗る吾部が劍術の爲に恨として居た所である、然るに昨年九月俄に仙臺から檄を飛ばして理想的試合を行うて範を天下に垂れん事を述ぶる事慇懃を極むるものがあつた。

青葉城の士は曩に幾度か戈を交へた天晴の者願つたり叶つたり脾肉の歎も今こそはと算を運して即日猛練習を開始した、然し一方試合場所に就ては彼は偶ゝ我柔道部選手が北征すべきを以て之と同時に二高方に於てせんとする意向であつたに拘らず我は我に四十三年の大捷あるを以て從來の例として必ずや彼の我門に來つて戰を請ふの適當なるべきを主張したから玆に交渉の進捗を缺き十月小柴委員自ら彼地に至つて三好二高校長及委員諸氏と協議を重ねて漸く我意を貫くを得て左の申合條件を締結した。

時　日　大正三年正月休暇中
場　所　第一高等學校道場
選手人數　二十名乃至三十名

擊劍部部史

試合方法　紅白三本勝負、其他

斯くて彼我の委員は署名調印を交換した、而も協議は理想試合に就て大抱負を有し給ふ三好校長の裁可を經たものである、若しも世に信ずべき物ありとせば此試合履行は必ずや其一でなければならない。

早速選手を擇ぶ朶寮に合宿する所あり練磨の方法を盡して粉骨碎身を惜まなかつた、部長師範は固より先輩委員の勵精叱咤は言語に絶する位、十一月寄宿寮委員諸氏が選手推薦式と應援費募集とを圖られた時我部が是を辭退したのは一に名を有志試合に置く以上全校的形式の相應しからぬを慮れたる心に外ならぬのであつて其厚意と熱誠とは玆に改めて御禮を云はねばならぬ、十二月の試驗が迫つても練習は變らない、餘所の大學や專門學校へ毎日順を定めて稽古に行く事も怠らなかつた、學習院を聘しての目覺しい試合に我力の程を覺えて來ん晴の場の戰功を期する若武者の血は躍つた。

然るに何事ぞ是より先已に三好校長から我瀬戸校長に宛てゝ私かに此試合の中止を申込んで來たと云ふ事を知つた、驚かざるを得ない、非常な理田無しには徹回の出來る約束でない筈である、それにしても最初試合を申込み後に調印の交換までした當の委員から一言も言つて來ない以上どうする事も出來ない、選手は合宿を續ける委員は交渉を再び始めた、すると待ちに待つた揚句試驗間近になつて漸く彼の委員から一通の手紙が屆いた『先般の試合申合は事姑息に出たるを以て自然立消えと致度候』我々は甚しく此文句の解釋に苦んだ、これ丈の事では纏らぬ、佐々木、末弘其他の先輩諸氏が二高先輩野村氏と極力調停に力められたが更に要領を得ない、そして最後に二高劍道部部長の上京を促すに至つた、寒い無聲堂で一時間餘も部長の辯明を拜聽した、勿論それは謝罪的辯明である、固より同情すべき事情が少くない三好校長の試合申合に對する誤解と云ふ事もあつた、選手諸君が內部事情の齟齬の爲に意氣聊か沮喪して正月迄には上京する丈の元氣を恢復する事が不確かであるから安全の策として中止したいと云ふ事もあつた、併しどれも全然理由となるべきものは無い樣である、けれども吾々は是以上追求する事の男らしく無い事を知つて居る、何となれば部長は現に已に謝罪の爲に來て



居られるからである、乃ち吾々は玆で總てを潔く擲つた、たゞ充分の理由を見出し得なかつた事を二高方の爲に恨み且熱誠なる我校友諸君に御詫びせねばならぬ。

顧れば九月から十二月末迄丸一學期間委員の奔走選手の勵精は有難い程であつた、其結果を見る事の出來無いのは返す返すも殘念である僅かに戰はずして勝の誇りに蟲を抑へねばならぬ、先頃先輩の催された選手慰勞會の席上で吉植氏の話に『自分が三好校長に面會して試合の事を論じた時に先生は先の對一高試合申合締結の際に於ける一高方の委員の態度の如何にもしつかりして居るのに感じ入つて二高にもこんな委員を欲しいと言はれた』と云ふ事であつた、之は我小柴委員を指すのである、校友諸君と共に凡そ委員等する人の人知れぬ苦勞のある事を思ひ度い。

要するに試合は出來なかつた、然し今後益ゝ好感情を以て兩校間に試合の續行せらるゝ事を望む。以上』

斯くて殘念にも試合は中止となり而も其後今日に至る迄遂に未だ一回だも之を見る能はざる也、當時部員諸氏の殘念如何ばかりなりけむ、さてこそ幾許も無くしてかの武者修行團の成立を見るに至れるなりけり。

**大正三年一月**　左の三氏を委員に推薦す。

一、二、四　武藤秀三(庶務)
二、二、一　李家孝(會計)
一、二、二　船田中(記錄)

今年初めて新築道場に於て例年の如く寒稽古を爲す。

二月二十七日、第二學期小會を擧行し會後上野花山亭に於て對二高試合、練習慰勞會を催し、末弘法學士の試合交渉顚末の報告並二高の先輩野村氏の演說あり、二高との試合中止顚末を解するものゝ最も意義深しと爲す會合なりき。

## 東北武者修業

大正三年は諒闇と共に道場亦寂寞を極め平凡の中に逝けり、對二高試合は中止となり吾人の意氣は僅に都下各校間に昂るのみ、昔日の觀なきを慨し是に對校勝負の如く紛議の處無くして而も膽を練り技を磨き廣く範を示す武者修行なるものを企てたり。

大正四年一月八日、白雪を踏んで上野を發す、同勢、武藤秀三、李家孝、船田中、香川壽人、綱繼彌三、千葉三郎、木村又一郎、詫摩武人の八名なり、先づ浦和武德殿に於て中學生、師範學校生百名を相手に遠征最初の稽古をなし後宇都宮に至りて泊す、船田氏の盡力大なり。

一月九日、郡山安積中學に乘込み中學生と戰ひ更に進みて福島に至り武德殿にて稽古す、福島中學寄宿舍泊。

一月十日、米澤に兵を進め武德殿を襲ひ一擧山形を衝く、山形中學寄宿舍泊。

一月十一日、師範學校及中學校にて戰ふ、後秋田に向ひ秋田中學寄宿舍に泊す。

一月十二日、秋田武德殿にて稽古し之を以て武者修業を終り、同日夜汽車にて直ちに歸京の途に上り、十三日無事上野に着す。

以上を我部に於る東北遠征の第一回となす、大いに向陵健兒の意氣を示し武道奬勵上效果甚大なるものありき、而して之が爲には各地先輩有志の盡力又與て大いに力あり、一行の深く感謝せる處なりき、蓋し是實に後に述べんとする彌生會修業團の先驅たるものにて我部に於る重大事件の一と爲す。

**大正四年**一月　左の三氏を委員に推薦せり。

一、二、五　綱繼彌三（庶務）



二、二、一　大野巖（會計）

三、二、一　久保田貞二（記錄）

十一月二十一日　鹽谷部長還曆祝賀小會を開催し紅白試合を行ひ後上野韻松亭に於て我部主催となりて先生の祝賀の宴を張る。

**大正五年**一月　左の三氏を委員に推薦す。

一、二、五　太田三六（庶務）

二、二、二　木村又一郎（會計）

三、二、一　佐野實（記錄）

此年九月より對二高試合あらんかと部員一同大いに練習したれど事無くして已む。

**大正六年**一月

我部の大先輩にして夙に我部の爲種々盡力し下されたる佐々木（保藏）法學士は此年遂に我部を思ふの餘り自ら劍をとりて我等を指導激勵せらるゝ事となりぬ、而して舊來親しく御教導下されし檜山先生を名譽師範とし佐々木法學士を師範とせり、爾來佐々木師範の獻身的努力と我部員の之に對する感奮とに依り我部は益々隆盛の氣運に向へり、實に佐々木師範と我部とは離る可らざる關係を有し或は師範として或は先輩として部員を誘掖せらるゝ事實に深ければ部員一同之に對し感謝の辭を求むるに苦しむ次第なり、而して以後述べんとする事業は總て佐々木師範の畫策せられしものと知るべし。

二月、左の三氏を新委員に推薦す。

一、二、二　松隈秀雄（記錄）
二、二、二　橋本新助（會計）
三、二、一　森口昇（庶務）

四月、佐々木師範靈力の下に彌生會成立し第一回遠征を東海道に爲す。（彌生會に就きては最後に總括して細記すれば此處に於ては單に表題のみを載せ置く事とせん）。

六月—七月、彌生會夏稽古。

九月、擊劍部の部屋成る、彌生會遠征の事起りてより合宿練習の必要ありと爲し寮委員に請願して北寮八番を得たり。部に對する責任觀念の上よりも共同的精神を養ふ上よりも、又練習の上よりも大いに得る處ありき。

十二月、彌生會千葉遠征。

**大正七年一月**　彌生會東北大遠征。

二月、左の三氏を新委員に推薦す。

一、二、五　土田豐（庶務）
二、二、三　矢野一郎（會計）
三、二、一　小川孝（記錄）
二、二、三　蠟山勝次郎（會計）（三月より矢野病氣休學の爲）

本部大會は例年五月五日（行啓の日）に開催せしかど此年より二月を以て之に代ふる事とせり、其重なる理由左の如し。

（一）五月五日は京都武德會大會の日なるを以て各道場師範西下せられ審判者少き事。



（二）招待すべき各學校の卒業期は大部分三月なるを以て二月に開催せば派遣選手に技倆優れたるものを得らるゝ事
（三）五月に入りては三年生も大學入學試驗準備の爲充分なる稽古を爲し得ざる事。
（四）寒稽古終りて直ちに之を行へば出場部員多數有るべき事。　以上

六月—七月、彌生會夏稽古。

九月、此年も又前述の理由により、北寮八番を部の部屋として合宿す。

十二月、彌生會冬稽古。

**大正八年一月**

京都帝國大學劍道部有志遙々遠征せられ我道場にも來場せられ部員と稽古せらる。

二月、左の三氏を新委員に推薦す。

一、二、二　横田正俊（庶務）
二、二、三　矢野一郎（會計）
三、二、二　和久金藏（記錄）

三月—四月、彌生會九州大遠征。

六月—七月、彌生會夏稽古。

九月、近來各部各々部屋を取りて割據する爲其道の普及の爲遺憾なる點多く此年部の部屋を廢する事となれり、佐々木師範前より同意見を有せられしかば我部も之に贊し北寮八番の合宿を解けり。

十二月、彌生會冬稽古。

## 級全廢之事

古來我一高擊劍部の級なるものは個人の劍技によりて定むるは勿論なれども其人の人格本位なる事一大特色たり、蓋し精神修養として劍道を見る事深き結果として當然の事たるなり、而して他に往々見るが如く徒に末技に依りて高級を得て得々たるが如きは吾人の深く恥ぢ且避くる處のもの也、故に我部にありては新學年に當りてや如何に技術秀れし新入部員ありとも其人格如何の明ならざる時は必ず六級以上は與へざりしなり。

然れども一歩進めて更に徹底的に考ふる時は人の劍技を細密に級にて分つ事の難きと同樣其人格に對して細き級別を附するが如きは甚だ困難にして且又聊か滑稽の感無きに非ざる也、是に於て我部の先輩とも云ふべき帝國大學劍道部の夙に同意見の下に級を廢したるに倣ひ今玆に斷然級を全廢し只便宜上稽古掛なる者を任命して一般部員稽古の助手とせり、而して他校と對抗上級を要する時は委員之に時に從ひて適當なる級を附して派遣する事とせり、級全廢亦吾人の理想の實現せられしものなりと云ふべし。

## 彌生會

大正六年以後を以て我擊劍部の新時代となす而して之彌生會の成立を以て始る。

由來我部は沈默主義を採り對校試合の如きも之を奬勵するは單に一部の專門家を生ずるに止り一般學生に對する武道普及を阻害する傾向あれば强ひて之を求めざりき、內に力を養ひ相練磨する事是に數歲、然れども我劍は冴え我腕は既に鳴る、臥龍將に窟を出でんとす、修養なりて社會を救ふは之男子の本領、爭で此力を國家の爲に用ひざるべき、斯くして此精氣の凝りて成れるものを彌生會の事業と成す、彌生會とは何ぞ。

### 彌生會の成立及目的



大正六年彌生東京帝國大學、學習院及我第一高等學校劍道部有志は彌生會なるものを組織し武技練達に資し併せて我國古來の劍道の發達に對し聊盡力する處あらんことを志したり、抑劍道を天下に擴め質實剛健の氣風を我國青年間に養成せしめんとは我鹽谷部長及佐々木師範の夙に懷かれし抱負にして此彌生會なるものは其宿志の實現せられたるもの也、然して前記せる如く大正四年我擊劍部有志は北陸巡遊をなし又同五年鹽谷部長は武藤先輩を率ゐ東北を漫遊せられ共に或は稽古或は試合を行ひ武道奬勵士氣振興に貢献する處甚大なりき。此に武者修業團の效果大なるを痛切に感じ遂に同六年佐々本師範盡力の下に其成立を見るに至れり熟々他校劍道部を見るに往々自校の名譽校風を重んずるの餘り自校道場內に屛息し單に對校試合のみによりて部名校名を擧げんとす、故にその對校試合たるや一利百害なり、焉ぞ廣き自由の天地に武道の發達を計り至剛至大の氣を修得し得んや、和氣靄々の中に道の隆盛を見る是我彌生會の主旨とする處にして一校の劍道部を以てせず三校併合せるは又同趣旨に出でたるもの也、又是に三校併合よりなれる彌生會の記事を載するは聊不當なるが如くなれども我一高擊劍部の其中心を成して此會と離る可らざる關係あるを思へば寧ろ當然なるものと言ふを得べし、而して此大事業を成すに當り會長幹事の盡力、先輩諸兄の援助、各地在住先輩、劍客の斡旋、會員の協力一致により豫期以上の成功を收め得たるは神の我誠意に感じてか正義の世に强き爲か實に慶賀の至りに堪へざる也。

### 彌生會事業

彌生會事業は之を遠征及夏冬二期の稽古の二種とす、前者は專ら各地を巡遊して此道の普及を目的とし後者は專ら一定の地に止りて己の練磨修養を目的とす、左に順次之を記さん。

第一回　東海道遠征之記（靜岡、岐阜、京都）

大正六年四月一日、我一高擊劍部員十八名東京帝大五名學習院一名は鹽谷會長、佐々木幹事と共に東海道遠征の途に就けり、東寮三番有志の「勝つたがえー」の聲を後に東京驛を發す、一氣に函嶺の險を突破し汽車は駿河路に入り正午靜岡

に着す、同地の有志に迎へられ直に靜岡中學校に入り小憩の後稽古を開始せり、彌生會員は靜岡中學校生徒約五十人警察署劍客十餘名と相對峙す、道場狹隘にして一時に戰ふを許さず、兩軍兵を二分して交互に出で戰ふ、龍攘虎搏の勢物凄く場の內外に堵列せる觀衆感嘆せざるは無かりき、約二時間にて稽古を終へ試合は行はず、夜中學校の寄宿舍に泊る、舍生盛大なる歡迎會を開き我一行を歡待し江崎校長の挨拶あり、佐々木幹事彌生會遠征の趣旨を述べ又會員の居合ありき。

四月三日、早朝中學生其他に送られ萬歲聲裡に靜岡を發す、當地滯在中二荒芳德伯一行の爲に專ら盡力せられたるは一同の深く感謝する處なり、濱名湖の勝景を送りて愛知縣に入る、午後一時半名古屋に着せり、然れども故ありて殘念ながら同地の稽古を中止し再び三時車中の人となる、春雨霏々として煙る中に名古屋城を望みつゝ岐阜に向ふ、四時半岐阜着、直に岐阜中學校寄宿舍に入る、夜コンパを開き蠻聲宿舍を搖り舍生を震はしぬ。

四月四日、午前岐阜名勝金華山に登り濃美の大平野を眼下に見る、午後岐阜中學校道場に於て中學校、商業學校、師範學校の各選手を始め警察道場の有志七十名と相見え火花を散して奮戰す、最後に三本勝負を爲す、我軍成績好し、夜內務部長、校長其他の盡力により彌生會大歡迎會を催さる、席上鹽谷會長中學生の爲に歌ふて曰く

金華之山秀麗　長良之水清駛
人生於其間者應秀且英

四月五日、午前八時岐阜發、茫々たる關ヶ原古戰場を過ぎ殘雪高き伊吹山下を馳る、會長一詩ありて曰く

愕然破夢一聲雷　身倚車窓睡始回
風冷膽吹山下路　梅花映雪八分開

午後一時目的地京都に乘込みぬ、一行意氣軒昂雄心勃々たり、同地先輩に導かれ京都大學道場に至り京大、三高、武專の有志と稽古せり、夜京大學生集會場に於て京大在學一高先輩の鹽谷先生歡迎會ありて頗る盛大なりき、それより京都府

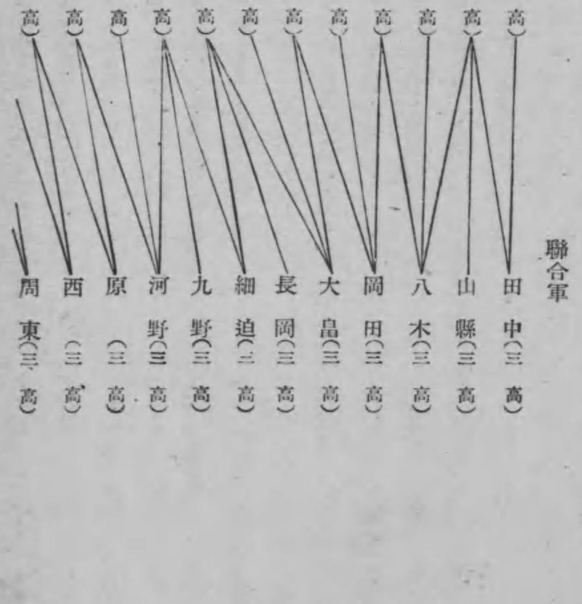


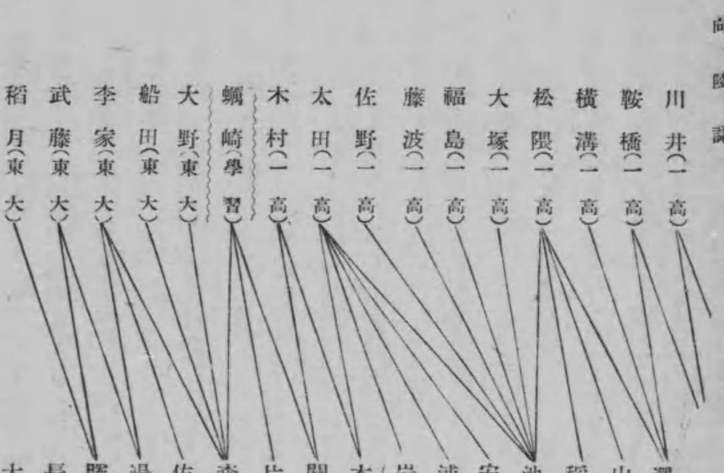
中なる一高野球部應援團の宿舍に入りて之と合す。

四月六日、午前再び京大道場にて地稽古せり、午後野球部の對三高戰を應援す。

四月七日、午前桃山に明治天皇御陵及び昭憲皇太后御陵を參拜し又乃木神社に詣でたり。

午後京大道場に於て京大、三高聯合軍と戰ふ、內藤高治先生審判なり、此回は遠征中最も緊張したる試合なりき、結果左の如し。






殘念なる哉、戰我に利あらず、聯合軍をして名を成さしめたり、されど我一高太田の奮戰目覺しきものありき。

夜三高劍道部と懇親會を開きぬ。



四月八日、午前武德殿を訪ひ武德會講習生と戰ふ、此日最後の稽古なれば一同あらん限りの元氣を以て奮鬪す、敵も流石は大日本武德會本部の部員なり、鋭鋒侮る可らず、然も其の數我に倍せり、されば其地稽古の猛烈なる今回遠征中隨一にして想ふだに血湧き肉躍るの感あり、最後に三本勝負を行ふ、好成績なり、試合終りて歡迎會に招待せらる、庭内櫻樹の下に席を設け酒肴置かれたり、一度は劍を執りて相搏擊せる者今は忽十年の舊知の如く杯を擧げ胸襟を開きて談笑痛飲す、櫻花既に八分開きて花蓋をなし醉顏色光と相映射す、鹽谷會長一詩を賦して曰く

平安宮裏萬櫻花　花下開筵情勝花
對酒莫言花尙早　紅顏帶醉美於花

かくて東西劍道會の意志を充分疎通せしめ劍道發達上貢獻する所ありて彌生會使命の一端を盡すを得たり。

午後嵐山に遊び幽邃閑雅の景に遇ひ心身清暢なるを覺ゆ、而して月夜に乘じて舟を浮ぶ、蘇氏赤壁の賦を想起せしめたり。

四月九日、京都を發し夜歸京す、鹽谷會長を圍み彌生會萬歲を三唱して解散せり、之を以て彌生會第一回東海道遠征を畢る。

## 第二回　夏稽古之記（於信州山田）

佐々木幹事盡力の下に大正六年夏初めて夏稽古を企畫せり、その目的とする處は即ち

一、會員相互の親睦を增す事
一、會員の健康狀態を增進せしむる事
一、會員の學力を增進せしむる事

右三理由を以て適當なる稽古場無きに拘らず特に土地醇朴泉効嘖々たる信州上高井郡山田溫泉を選び先輩の緣故より同

地山小旅館に泊す事とせり。

六月二十五日深夜、我部員十一名は佐々木幹事と共に上野發翌日午後一時山田着、爾來七月十六日下山の日迄三週間此僻地に籠り、午前は專ら書を讀み學を勵み午後は一途劍技の修練をなす、勿論道場とて無ければ藥師堂境内の土間を以て之に代ふ、蒼天を天井とし峻岳を床とす、翠巒四周に聳立して我を還視し溪流遙に淙々の響をなして我を激勵するに似たり、斯の如く崇高にして偉大なる道場天下何れの地にか之を求むるを得んや、劍を擊つ傍ら居合及型の稽古をなす、酷暑の候烈日萬物を燒くが如き下に於ける修業は嚴寒中に於る寒稽古と比して其苦しさ勝るとも劣る事無し、汗は瀧をなして流れ稽古着は烈しき組打の爲め土に塗る、土間の稽古なれば技の敏捷は望む可らざるも地稽古の强味を增し間合の呼吸を會得する點に於て效果大なり、佐々木幹事は帝大武藤氏と共に最後迄熱心に種々御指導下されたり。

七月十四日、夏稽古紀念額を藥師堂に寄進し十五日紀念撮影をなしたり、十六日山田を出發し長野に至りて一泊す。

七月十七日、午前長野縣廳内警察部道場にて巡査講習生と稽古せり、諸先輩の御盡力を謝す、午後同地を發し夜上野着、直ちに解散す、最初の試にも拘らず多大の效果を收めて此夏稽古を終了せり。

## 第三回　千葉、佐倉遠征之記

彌生會は夙に大遠征の外土曜日曜を利用して近縣を訪れ僅少の時間と費用とを以て有效に其趣旨の一部を實現せん事を期したり。千葉佐倉遠征は此種の第一回のもの也。

十二月一日午後、鹽谷會長佐々木幹事に引率せられ會員二十三名は兩國を出で千葉に至る、先輩三澤氏の盡力に依り警察部道場にて稽古す、土地劍客、千葉醫專、千葉中學生徒、警察官と稽古し終て三本勝負をなす、殆んど全勝なり、薄暮千葉を去りて佐倉に向ふ、堀田伯爵の盡力によりて佐倉中學校寄宿舍に泊す、道具を肩に遠き道を歩む、流石の勇將猛卒も難色ありき。



十二月二日、午前より中學講堂にて中學生と稽古及試合をなす、又我會員の型及居合ありき、午後中學を辭し成田に向ふ、諸所見物なし夕驛前茶亭に忘年會を開き彌生會將來の進歩發展を祈れり、午後九時半歸京解散せり。

彌生會成立後其事業功績漸く天下人士の認むる處となりたれば形式上之を充實せしむる必要生じたると又一方次に記さんとする東北大遠征を起さんとするにより益ゝ其必要を切に感じ是に彌生會委員なる者を設けたり、而して其事務所を佐々木幹事宅に置き彌生會趣意書なるものを起草して天下に配布し賛助員（先輩其他）名譽會員を選定し是に於て初めて内容形式整ひたり。

## 第四回　東北大遠征之記（宇都宮、山形、福島、仙臺、盛岡）

曩に陽春櫻花爛漫たる舊都に遠征したる彌生會は一歲ならざるに今や轉じて白皚々たる東北を襲はんとす、正に驚天動地の大活動と云ふべし。

大正七年一月五日、午前十時上野發、鹽谷會長、佐々木幹事を初め鹽谷溫先輩帝大二名一高十八名にて一同元氣横溢意氣天を衝く。

午後宇都宮着、船田大學生を先登に武德殿へ乘込む、殿の内側劍客觀客を以て溢る、一同一高健兒の太刀の冴を見よやと奮戰す、相手も年少者少く且軍人多く加りたれば稽古の猛烈なる年を經たる武德殿の堂宇今にも崩壞すべしと見えたり、午後五時稽古終りて下野中學校に引上げ此處にて船田校長より丁重なる晩餐の饗に與りたり、深夜車中の人となり北上す。

一月六日、白河の關を過ぎ行くまゝ車窓外雪は斑に積み下弦の月物凄きばかりに冴え渡りて征者轉感慨無量なるものあり、夜は福島にて明け初め雪は一驛毎に激し、粉雪は空に舞ひ狂ひ一望悉く銀白なり、板谷峠の難も過ぎて午前九時半山形に着し雪を踏みて山形中學校寄宿舍に入る、午後瑞雲寺に於ける帝大先輩野村氏の追悼會に出席す、夜は同市在住先輩

より盛大なる歡迎會に招待せらる。

一月七日、午後九時より中學校道場にて中學生及土地劍客と稽古す、午後武德會に臨みて會員と戰ふ、それより山形を辭し上の山に至り溫泉旅館に泊し疲勞を癒し將來の奮鬪に備ふ。

一月八日、福島に向ふ、雪多くして列車遲延甚し、午後福島縣廳內武殿にて稽古す、夕同市在住先輩の歡迎會に臨む、會長幹事は直に仙臺に向はれ一同は福島師範の寄宿舍に泊す。

一月九日、午前福島を去り午後一時仙臺着、午後三時より仙臺第一中學校道場に乘込み中學生と稽古を爲す、夜は一同明日の稽古の爲自重して早く就寢す。

一月十日、昧爽武德殿に赴きて寒稽古に加る寒氣凜烈、されど一同の元氣又凜々たり、晝同地先輩より歡迎會に招待せらる。

午後一時二高の道場に乘込む、二高は東北の雄嘗ては一高と雌雄を爭ひき、兩雄戰場に相見えざる事玆に數歲、對校試合ならずと言へ今や機運再び熟して相會す、一同元氣百倍し力を盡して相戰ふ態猛虎風に嘯き蒼龍雲を卷くにも似て物凄きまで雄壯なり、彼迅き事風の如くなれば我動かざる事泰山の如く彼冷靜水の如く我隙を窺へば我熱烈火の如く彼の虛を衝く、猛劍空に飛び地に摎々の響あり、兩軍秘術を盡して戰ふ事一時間餘、終りて二高控室にて汁粉の饗應に與る、未だ席暖らざるに再度武德殿に向ふ、又此處にて各中學生徒師範學校、幼年學校生徒、武德會講習生師範等と手合せをなす、一日三度の激戰に疲勞はありしも初めて眞に武者修業の氣分を味ひ得て一同意氣昂然たるものありき。

一月十一日、早朝汽車にて盛岡に向ふ、雪原を突破する事七時間にして午後盛岡に着す、佐々木幹事故鄕の地なり、出迎者多し、直に武德殿に入りて稽古す、最後に三本勝負數番をなす、終りて旅舍に引上ぐ。

一月十二日、未明床を蹴て武德殿に至り寒稽古に加る、之當遠征の最後の稽古なれば遺憾なき迄に奮戰す、午後盛岡の



地を後に歸路に就く、薄暮松島驛に下車し海岸觀月樓に宿し彌生會新年宴會を開き大いに歡を盡す。

一月十三日、早朝日出の絕景を賞し後名刹を訪ひ史蹟を尋ぬ、和舟三艘に分乘して鹽釜に向ふ途中勝景を前に杯を擧ぐ、樂云ふべからず鹽釜にて記念撮影をなし夕再車中の人となり十四日朝歸京、無事解散せり、之を東北大遠征となす。

## 第五回　東北遠征之記（仙臺、平）

青葉城下に攻め寄せたる我柔道部選手を應援し且前回歷訪せざりし地を尋ぬんと大正七年四月一高部員三名佐々木幹事と共に再び東北遠征を試む、六日夜上野發、翌七日早朝仙臺着、直ちに二高に向ひ應援をなす、翌八日午前仙臺幼年學校を訪れ學生及武德會員と相對戰す、相手は十七八歲の少年乍ら體格頗る好く元氣充溢、激しき稽古をなせり、翌九日朝仙臺を立ち平なる磐城中學を訪れたり。午後中學生卅名及地方の劍客數名と戰ふ生徒甚元氣よし、歸途湯本溫泉にて疲勞を癒し十日歸京せり。

## 第六回夏稽古之記　（於信州山田）

第一回夏稽古の成績頗る良好なりしより大正七年夏再之を試みたり、候補地多く有りしが不都合の點あれば結局山田に決定しぬ。

六月十三日夜、武藤先輩と共に一高部員四名上野出發、十四日正午山田着、山小旅館に泊す、前年の如く藥師堂境內土間を道場とす、最初は人數少き爲充分の稽古を爲し得ざりしも後佐々木幹事其他部員一名來泉ありしより猛烈なる稽古始れり、百本勝負の如き新しき試を爲せるが其苦しき事限なし、然れども一人にて多くの敵を引受け戰ふ練習としては最も有效なるものなりき、途中大學生諸兄の交代來泉ありて我等を指導なし下されしは感謝の他無し、稽古終了後新潟縣會津方面を歷遊せんとせるも故ありて中止せるは殘念なりき。七日十一日萬坐溫泉を訪れ十二日早朝白根山に登る、夕山田に歸る、十三日前年に倣ひ記念額を奉納し撮影をなす、十四日午後九時歸京、解散せり。

第七回　冬稽古之記（於房州北條）

此年の一學期終了後年末一週間を利用し夏稽古と同趣旨の下に冬稽古なるものを計畫し槍術薙刀太刀の型を研究せんとせり、師範には山里名譽師範を聘し八幡なる我校水泳部寄宿舍に泊する事とす。

大正七年十二月二十三日、佐々木幹事山里師範と先發せられ二十四日大學生六名一高生十一名出發、滞在期間僅々一週日なりしも習得せる警視流型十、刃引型三、寶藏院流高田派槍術型十四、一心流薙刀型十二にて槍、薙刀の如きは最初の試なれば大いに苦心せるも得る處甚大なりき、山里先生の御懇篤なる御教授を深謝す、三十日歸京、解散せり。

第八回　九州大遠征之記（廣島、長崎、佐賀、鹿兒島、熊本、福岡）

九州は古來武道を以て鳴るの地也、而して之を訪れんとは我等多年の宿志なりしが土地遠隔にして多大なる時間、費用を要する爲果さざりしも大正八年陽春佐々木幹事の斡旋盡力先輩の援助に依り玆に其目的を達するを得たり。

大正八年三月卅一日早朝、鹽谷會長、佐々木幹事と共に帝大八名學習院一名一高十三名の大軍は東都を後に九州大遠征の途に上る、沼津、濱松にて先輩の激勵を辱くし五十三次一擧に突破して京都に着す、此處に又京大諸兄の應援を受け、京都武德會の大島治喜太氏此處より同行せらる、賽歌に大阪神戸を過ぎ須磨明石は夢の中。

四月一日、正午廣島着、先輩及高師生徒諸君の出迎を受け直ちに高師寄宿舍に入り寮生と晝食を共にす、午後案内せられて市内を見物す、夜盛大なる歡迎コンパありき。

四月二日、午前高師道場に於て最初の稽古を初む、高師生徒、同市劍客約百名と戰ふ、高師の山岡先生創流一刀流（短劍）は精神的なるものにして一同大いに得る處ありき、約一時間半にして稽古を終へ後偶來廣中たる上杉博士の講話あり、鹽谷會長の挨拶を最後に直ちに高師を辭し正午車中の人となりて九州長崎に向ふ、車中彌生會會歌を作る、左に之を掲げん。



彌生會會歌（横溝作歌矢野作曲）

一、瑞雲映ゆる旭日に　　橄欖香る武香陵
　此處正大氣磅礴し　　無聲堂裡に丈夫が
　太和魂培ひし　　幾春秋の花紅葉
二、幾春秋の來し方は　　歷史を飾る光榮の跡
　武邊の流絶えずして　　柏の綠更に濃し
　流風餘韻永久に　　遺芳萬朶の花に見る
三、九重の雲深れど　　眞誠聞ゆる時つ風
　明治の半やすみしゝ　　我大君を迎へけり
　恩賜の胴の燦燃と　　鄙く先仰がずや
四、青葉城下の戰や　　嚶鳴堂の晴戰
　蒼龍起り雲を卷き　　猛虎嘯き風を呼ぶ
　乾坤とよむ喊の聲　　橄欖の香ぞ彌高き
五、名も懐しき彌生の　　西に東に花草鞋
　士道を思ひ世を濟ふ　　吾等が務此處に在り
　いざ進まなん諸共に　　男子さびしく勇ましく

（曲は大正八年寮歌「東皇回る」と同じ）

四月三日、早朝長崎着、縣立中學校寄宿舍に入る、午後諏訪山武德殿に向ふ、途中蘭醫シーボルトの宅跡及記念碑を訪

ふ、會長賦して曰く

明師良友此追隨　　創始他年興國基
狼藉落花春寂寞　　霏々細雨灑殘碑

武德殿にては高商學生、武德殿講習生其他約五十人を相手に戰ふ、觀衆二三百。佐々木、大島兩先生の神技には敵も味方も鳴を靜めて感嘆す、三時間にして稽古終る。後三菱の八卷先輩の案内にてランチに乘りて長崎港、造船所等見學す。

四月四日、早朝中學校を辭し汽車にて佐賀に向ふ、正午佐賀着、直ちに城址内武德殿に至り二時半稽古開始、相手は武德會員中學選手にて流石鍋島侯城下の人元氣滿々たり、後案内せられて佐賀城を見る、宿屋に泊す。

四月五日、今日は對三高野球戰の日なり、萬朶の櫻花の下に血を流す我選手の胸中や如何、一同大勝を祈れり、大島氏に分れて九時佐賀發鹿兒島に向ひて南下す、久留米には都合により寄るを得ず、夜九時鹿兒島着先輩及七高生徒諸君に迎へられて七高寄宿舍に入る、同校の歡待一方ならず、一同感謝す。

四月六日、朝食後七高の背後に聳ゆる城山に登り南州翁を忍び又鹿兒島灣の曉景を三嘆す、九時武德殿に至り七高生及武德會會員と稽古をなす、七高生諸君元氣なり、午後各自散策の後三時熊本へ向ふ、途中車中野球部部歌凱歌を高唱す、八時熊本着、先輩諸兄に迎へられて旅館に泊す、此處にて我野球部の勝利を聞き躍喜す。

四月七日、午前先輩に案内せられて水前寺を訪れ後江津湖に輕舟を浮べて遊ぶ、午後二時武德殿に至る數百の觀客は殿中に集ふ、流石尙武の地と頷れぬ、土地の老劍客諸流の型及居合多數我等の爲に演ぜられ一同その嬰鑠たるに感服し又大いに感謝せり、後各學校選手並びに武德會會員と猛烈なる地稽古をなしたるが、其勇猛なる體當りには一同大いに得る所あり、終りて十餘組の三本試合を行ふ、四時閉止、今回遠征中にて最も盛なる稽古の一なりき、夕熊本向陵會より招待せられて大歡迎會に臨む。當地在留の先輩甚多ければ鹽谷會長大いに滿足して一詩を賦せらる。



逢迎隨處忘爲客　　詩酒從客如在家
一路春風三百里　　看來七縣九州花

四月八日、午前五高道場に乘込む、生徒諸君數百名場内に詰れり、地稽古を行ふ、人數甚僅少なりしは遺憾なりき、終りて十餘組の三本勝負をなす、時間の都合上急遽五高を辭して熊本城内第六師團司令部に至り晝食後見學し午後四時白煙を後に福岡に志す、福岡にては先輩なる九州帝大生諸兄に迎へられて修猷館中學に至り菁莪堂に入る、校長は一高先輩なり。

四月九日、午前市中を見物し、晝市長久世氏の彌生會歡迎會に赴く、午後二時武德殿に至り、九州帝大劍道部長の挨拶の後九州帝大生其他五十名を相手に猛烈なる地稽古を始む、遠征最後の稽古なれば一同力を盡して心殘り無き迄奮戰したり、されば其盛なりし事熊本に於けると好一對なり、鹽谷會長も老驅を陣頭に現し五六名を相手に戰はる、觀衆一同大いに感嘆せり、終て先輩より歡迎會に招かれ大いに歡を盡す。

四月十日、午前八時福岡發、旬日來の大奮戰にはさしも一騎當千の勇者も疲勞せり、勞を癒し心を鎭めん爲別府に清遊す、夕汽船にて思出多き九州を顧みつゝ瀨戸内海に出づ、十一日多度津により岡山に出でゝ十二日神戸に遊ぶ、同午後車中の人となり一瀉千里歸心矢の如く歸京の途に就く、十三日午前歸京、一同其無事及成功を祝して萬歲聲裡に解散す。

嗚呼、日を閲する事十有四、突破する事二千餘哩、劍を執る事七度、各地に彌生會主旨を宣傳し得て我等の喜之に益する者無し、而のみならず一同種々なる方面に於て大いに知識を得たるは之亦遠征の一德か、之を是九州大遠征と爲す也。

* * * * * *

大正八年四月二十一日、彌生會九州遠征終了を期とし先輩、大學、學習院及一高部員を向島艇庫樓上に招き懇親會を開けり、出席者約五十名。

擊劍部部史

## 第九回　夏稽古之記(於信州山田)

大正八年六月三度夏稽古を企畫す、二十三日先輩多數に送られて上野出發、佐々木幹事以下帝大生四名一高生九名なり、山田にては連日午後より藥師堂前庭に稽古し、五十本勝負、二十本勝負等を行ふ、鹽谷會長、山里先生、吉植先輩も滯在半にして參加せらる、今年は擊劍の外槍術、薙刀、太刀の型を稽古し得る所大なりき、七月十三日山田出發、白根山に登り草津に一泊し吾妻より輕井澤に出で十五日歸京す。

## 第十回　冬稽古之記(於千葉町)

前年の好成績に鑑み冬稽古を再度試みんとし地を千葉町にトして同町長洲なる佐々木幹事宅に合宿する事とす、十二月二十四日出發、佐々木幹事、山里先生を初め大學生三名一高生十二名なり、道場には同地武德殿を借り午前は槍術、薙刀、太刀の型を研究し午後は劍を戰はし、又槍、薙刀の試合をなす、同武德殿師範の休暇なるにも拘らず稽古し下されしには一同感謝せり、二十八日彌生會懇親會を開きて同地先輩及有志を招き彌生會の過去及將來につき述ぶる處ありき、三十日冬稽古を終り歸京解散せり。

* * *

抑彌生會成立以來僅々是に三歲に過ぎずと雖も遠征を行ふ事五度夏稽古三度冬稽古二度にして其活躍著しきものあり、而も其遠征に至りては或は北に或は南に東に西に遠近を問はず足跡殆ど天下に普し、實に驚天動地の活動と云ふも過言に非るべし、かくして其主旨とする處を天下に宣傳し幾分我國青年をして奮起せしむるを得れば我使命は果されたるなり、我奔走は報ひられたる也、再び言はむ、武道の精華は劍道に存す、而して之を以て我國民を奮起せしむるは我等の使命なり、後來者意を是に存し幸に先驅者の奔命に違ふ處無くんば我等の喜又之に若くもの無し、それ努めよや。

彌生會の記を終るに當り、左に我部員にして之に參加盡力せるもの〻芳名を載せて後に傳へん。



木村又一郎。太田三六。佐野實。藤波壽。福島熊男。大塚萬丈。森口昇。松隈秀雄。横溝光暉。鞍橋重義。橋本新助。磯田仙三郎。野上久幸。梁井淳二。辻守昌。川井一。渡邊寧。小川孝。土田豐。矢野一郎。高田賢次郎。螺山勝次郎。小金義照。鈴木英雄。田口武次郎。北岡磬。三富秀夫。森木武重。中島義行。堺田博雄。和久金藏。横田正俊。大塚利雄。橋爪健。石井政一。丸中一保。淨法寺圭。摺澤勁四郎。中庸雄。西村高兄。山中幸男。井出德男。堀眞道。富山清憲。有馬宏。松本愼一。

大正九年

二月十四日　左の諸氏委員となられたり。

一、二、四、西村高兄（四月より一。二、一、井出德男）
二、二、二、中　庸雄
三、二、一、山中幸男

### 對六高三高二高有志校外試合。

此處に數ケ年間或は武者修業に或は諸方の春、夏、冬稽古に腕を鍛へたる我が部員の蓄積せられたる元氣を外部に發すべき時は來りぬ。此の年劈頭師範佐々木保藏氏始め、先輩部員大いに談ずる所有り遂に意を決し二月二十日、此の春墨堤に行はる可き短艇競漕に諸高等學校生徒の應援として上京するを期として、我等互に技を練り長短補はんと、二、三、六各高等學校へ其の旨勸誘狀を發したり。三月四日六高は先輩を通じて選手十六名程送り來る旨通知あり。次いで三月八日二高より來信、時期接迫の爲上京不可能なるも部員の我が部を訪ふことあれば宜しく賴むとの事稍遲れて三高よりも略同意味の來信有り。此處に三校を敵として戰はざる可からず。我が部員の意氣大いに上り、寒稽古に續けて再び朝はそれと同樣なる猛練習を行ひ、午後更に熱血的練習を行ひ傍ら或は全部員を三分して之が對抗試合を行ひ或は高點勝負、三本勝

負をなして、試合の練習を重ぬる中月日は早くも過ぎて、四月とはなりぬ。四月一日午前十時六高選手十四名東京驛着更に二高選手五名三高選手三名來京す。四月二日午前中各校選手と聯合地稽古をなす。同日夜柔道場に於いて六高選手とコンパを開き、一同歡を盡す。

四月四日遂に試合の日來る。一同腕を撫して待ちたりし日は來りぬ。一同必ず充分なる技を發揮せんことを期す。試合は次の順序に始りぬ。

一心流薙刀形
　太刀　土田　豐
　薙刀　堺田博雄

長谷川英信流居合
　中山先生

寶藏院流高田派槍術型
　鎌　横田正俊
　素　和久金藏

大日本劍道型
　打　中山先生
　仕　大島先生
　審判　木下先生
　　中山先生
　　山里先生
　　大島先生
　　佐々木先生

三本勝負

(ヨヨ)一高　清田　―　六高　渡邊(メメ)
(メメ)一高　坂上　―　三高　手島(ヨヨ)
(ヨヨ)二高　川原　―　二高　大塚(ヨヨ)
　　×
(ヨヨ)二高　和達　―　二高　河原村(ヨヨ)
(メメ)六高　有馬　―　六高　時枝(メメ)
　　×
(ヨヨ)六高　淨法寺　―　六高　吉田(メメ)
(ヨヨ)高高　井出　―　六高　吉田(吉)(ヨヨ)

(メメ)六高　川崎　―　六高　鶴海(メメ)
(ヨヨ)一高　松本　―　三高　竹內(ヨヨ)
(ヨヨ)二高　堀　―　二高　小味淵(ヨヨ)
(メメ)二高　飯島　―　二高　曾根(メメ)
(メメ)六高　富山　―　六高　桑田(メメ)
(ヨヨ)六高　西村　―　六高　佐藤(ヨヨ)
(ヨヨ)六高　大塚　―　六高　平松(ヨヨ)

（ト）六高　加藤
（メ）（コ）　松岡

（メ）（ト）六高　久保田
（コ）　山中

（コ）（コ）三高　盛
（メ）　中

×
（メ）（メ）六高　佐田
（コ）　石井

（メ）（コ）六高　福場
　　丸中

（ツ）二高　尾高
（メ）（コ）　横田

（コ）八高　五十嵐
（メ）（ツ）　和久

（コ）（ト）六高　奥野
（ヨ）　堺田

（コ）六高　神寶
（メ）（メ）　中島

試合の結果斯の如し。即ち大いに部威を發揚し得て余す處無し。一同欣喜雀躍す。

四月二十四日千葉縣姉ヶ崎丁字屋に於いて、佐々木氏師範告別會を開く。山里先生、豐田先生、大島先輩大學鞘橋先輩及び部員多數出席し頗る盛會に師弟の情誼掬す可きものありき。翌日同處に於いて本部對外試合祝勝會を開く。

## 對商船學校試合

越えて六月一日、商船學校より來信有り。曰はく「本校擊劍部は帝都の一隅に僻在して、未だ充分に其の腕を伸ばし得ず、今勇名極めて高き貴校擊劍部と鋒を交へて以て力を試し得ば幸也」と。我固より望む所承諾の旨を報ず。されど送別試合も濟み三年は殊に試驗も近づきしより、二年以下にて引受けん事とゝて、再び猛練習を開始して、以て好敵を迎へたり。六月五日正午頃より、商船學校の應援團五十餘名陸續として道場に來る。彼が選手と二三合地稽古をなし愈々試合を



行ふ。成績左の如し。

1.（コ）（コ）商船　小野
（メ）　宮地

2.（メ）（メ）商船　篠塚
　　清田

3.（メ）（ト）商船　黑川
　　和達

4.（コ）（コ）商船　山田
（メ）　大澤

5.（コ）（メ）商船　津江
　　高岡

6.（メ）（メ）商船　中西
　　川崎

7.（メ）（メ）商船　村山
　　松本

8.（メ）（コ）商船　末永
（メ）　川原

9.
×
（メ）（ト）商船　村山
　　富山

10.（メ）（メ）商船　安藤
　　有馬

11.（ト）（ト）商船　瀬川
　　堀商

12.（ト）（ト）商船　横田
　　井出

13.（コ）（ト）商船　赤井
　　山中

14.（メ）（メ）商船　喜多村
　　西村

15.（メ）（メ）商船　小檜山
　　中

檢證　中山先生

即ち十五中勝十、負四、分一、高く凱歌は我に揚れり、右終りて道場にて選手とコンパを開きたり。

七月　彌生會第十一回夏稽古

齊掛に於いて夏稽古を行ふ　彌生會第十一回の夏稽古なり。先輩部員相會するもの多數、頗る盛なりき。

十二月二十日夜鹽谷舊部長今井新部長の送迎會をパラダイスに於て開く。

大正十年

二月五日　左の諸氏委員に推薦せられたり。

文、二、四　富山清憲

理、二、四　有馬　宏

文、二、四　松本愼一

理、二、五　和達清夫

理、二、三　川崎忠夫

文、二、五　宮地通彥

四月　彌生會第十二回　春稽古

五日より十五日迄十日間千葉に於て春稽古を行ふ。

七月　彌生會第十三回　夏稽古

三日より約二十日間信州山田に於て夏稽古を行ひ歸途新潟福島等を巡遊して七月二十五日歸京す。

大正十一年

一月　對二高戰は一時破棄に決したるも佐々木先輩等の勸めにより且は二高擊劍部の請に依り、六日第二高等學校擊劍部選手を迎へて、俱に地稽古を爲せり。約二十名來る豫定なりしも會するもの僅か九名、猛烈なる稽古を見る能はざりしは返す〳〵も遺憾なりき。中山、大島、豐田の三師範、佐々木、中、大澤、堀の四先輩來會有り。地稽古を終りて本郷パラダイスに於て、二高選手と夕食を共にす。出席者三十四名明日の端艇競爭を忘れて樂しき夕を送れり。



二十日　本年度委員として、左の三名を推薦す。

文甲二　稀田光男（記錄）

理甲二　山内　俶（會計）

理乙二　中　貞男（庶務）

四月　第十四回北陸武者修業の記

彌生會成立後年を閲すること玆に五歲其の事業駸々として進み或は西に九州を訪ひ、或は北陸奥の地をおとづれ時あつては山田千葉に合宿し、新潟福島に遠征し、其の足跡殆ど天下に普く殘す所只北陸のみ。しかも其の北陸たるや百萬石前田藩の城下たる金澤を中心として富山、福井等尙武の地として知られ其の武名天下に響き此處を訪れんとは彌生會多年の宿志なりき。玆に佐々木先生の少からざる御盡力及び其の他諸先輩の御贊助を得て時恰も櫻花爛熳たる春彌生の候、帝大及び一高の有志十五名は元氣旺盛花の都を後にして四月六日午後八時四十五分東京驛を發せり。

夫れ靈劍の威德は夙く神代に著れ、而して武道の精華は實に劍術に存す、史實の證明する所誣ゆべからざる也。今や學世滔々浮華に流れ士道の萎靡亦甚し。是に於てか帝大、學習院、一高の三校の劍道部有志者相集りて彌生會なるものを組織し、各地を歷訪し相互に技を練り藝を磨き古來の武士道の精神を振興し以て此の弊風を矯正せんとせしなり。由來本校擊劍部は沈默主義を取り對校試合の如きも却つて一般學生に對する、武道普及を阻害する傾向あれば强ひて之を求めず、内に力を養ひ相練磨するありき。然れども我が劍は冴え我腕は鳴る。臥龍將に窟を出でんとす、修養なりて社會を救ふは

之男子の本領、爭で此力を國家の爲に用ひざる可き。此の精氣の凝りて成れるもの實に彌生會の事業なり。かくして遠征合宿等を重ぬること玆に十四となりぬ。

六日東京を發してより、續々參加するものあり、一行は益々元氣溢れ一氣に西下して長濱に着す。武德會の犬塚氏に迎へられて直ちに武德會に赴き小憩の後稽古を開始せり。青年團員、警察署員等數十名と相對峙し、約二時間に亘りて猛烈なる稽古を行ふ。終りて一同武德殿を辭し長濱公園を見物し夕刻敦賀に向ひ、敦賀にて警察署員其の他有志の出迎へを受け若六旅館に泊す。

四月八日　一同五時半起床。港は大船小船に埋められ、海波渺々として勝景實に言はん方なし。金ケ崎城趾の山腹を縫ふ櫻花爛熳として雲か花かと疑はるゝ計りなり。

十時より警察署にて稽古をなす、道場狹隘にして交る〳〵五六人宛立つ。相手は皆警察署員及び憲兵なり。二時間にして終へ署員の案内にて金ケ崎城趾に至り、更に署のランチに乘じて、海上波のしぶきにぬれつゝ盛大なる甕廠にあづかり美景を賞しつゝ常宮神社に參拜し、獸皮研究所を見、松原公園を經て、午後四時三十六分多數の見送りを受け、敦賀を辭す。福井にて佐々木先生及び他の數名同地の有志に迎へられて、師範學校の寄宿舍に泊す。時に月東空にかゝり藤島の黑影を照し凉氣身にしみて淸らかなり。

四月九日九時より、昨日來福せられし會長鹽谷時敏先生を月見旅館に訪ひ、佐々木先生を先頭に橋本左内の墓、藤島神社に參拜す。足羽山の田樂は甘味にして、北の庄は勝家の武をしのばせ纒體天皇の巨像は中空に聳ゆ田樂の味未だしきに小雨そぼふり來り一同立つて去る。四顧薄雾をかけて將に嵐峽の美を思はしむ。福井中學に至り午後二時より稽古を開始す、中學、師範、警察署員と相對峙する事約二時間、道場廣大にして、大いに氣持よく、一同頗る元氣なりき。北陸の雄と知られし豪の者岩越氏と大島先生及び佐々木先生との稽古は實に雄壯なりき。汗を拭つて師範學校に歸れば、盛大な



る歡迎會開かる。同地の有志に深く厚意を謝す。

四月十日　鹽谷、佐々木、大島先生と共に永平寺に行く。考杉鬱々千古の風の韻あり。歸途佐々木先生の發音にてマラソン、先生曰はく「上りは遲いが、下りは加速度で早いぞ」。三時六分福井發。多數の見送りを受けて、萬歲裡に北に向ふ。金澤にて四高醫專中等學校の有志の出迎へを受け、四高寄宿舍に泊す。此の晩四高生とコンパを開き互に心地よく談笑す。

四月十一日　鹽谷先生をふじや旅館に訪ひ兼六公園を見物す。午後二時より四高道場に於いて、稽古を開始す。始め中等學校と對す。敵も皆晉に聞ゆる北陸健兒、彼等猛虎の勢を以て打ちかゝれば我又蛟龍の氣あり。約五十分にて四高醫專と代る。年々南下の軍となり、京に於て、勇を現はし勢天を衝く四高健兒、皆竹胴にて極めて粗末なる出で立ちなり。敵皆小手に妙なり、之年々の試合の結果ならんか。兩軍互に下らず、龍攘虎搏の勢物凄く場の內外に堵列せる觀衆感嘆せざるはなかりき。名は同じ無聲堂なれども、彼は北國に技を練る四高健兒我は東都に氣を練る向陵男子、一騎當千の若武者共、玆を先途と戰ふ。一劍飛んで敵の頭なく、我が小手得らるれば彼橫面危し。汗眼に流るゝも我退かず向陵の意氣かくありと大いに頑張る。聞くならく四高は今年數人の選手を失へりと。今年の南下を思へば、同情に堪へず、約一時間半にして惜しき稽古を終へ、各先生連と對峙す、皆更に元氣を增し已む所を知らず、午後六時頃三時間に餘る稽古を終へ、中山先生の居合ありて、一同風呂に入る、凉風飄然と何處よりか來り、流石の猛者も驚天動地の活動の疲勞一時に出で暫し湯に醉ひて我を忘る、七時より道場にて減多汁を御馳走になる。今までは互に劍を取り、敵味方として奮鬪せしも今や百年の知己なり、互に歡を盡す。鹽谷先生自作の詩を吟ぜらる。興は盡きざれども、時間立ちぬれば、九時頃散會して、校庭に出づ。此の夜恰も滿月中空にかゝりて、老櫻を照す。悠々たる天地、出でて兼六公園に至れば之亦天下の絕景なり。

四月十二日　金澤を立つて七尾に向ふ、二條邦基公及び多數の有志に送らる、遙かに後に望むは白雪皚々たる白山立山の連峰なり。都召旅館に泊す。懇親會に一同意氣昂然船を浮べて歌ひ、歡を盡す。正に之天下絕佳の地たり。

四月十三日　晝食後和倉を發し、七尾より汽車、津幡を經て富山に向ふ。途中津幡のあんころ、うどんに腹を滿し富山にて、藥專、中學等の有志に迎へられて中學の寄宿舍に宿る。

四月十四日　朝八時先生をホテル支店に訪ふ。午後二時より約二時間、中等學校及び藥專、及び先生連と猛烈に稽古す。金澤の頑張りに味をしめ、一同元氣百倍當るものなし。稽古後學士會より歡迎の宴開かれ愉快に散會す、夜八時多數の見送りに富山を發し、高岡に至り、驛前吉野旅館に泊す。

四月十五日　公園に至れば花見の賑はひに人々興じ居れり。工藝學校にて中等學校の若武者共と約二時間の稽古をなす夜公園にて懇親會を開き、一同大いに飲み且食ふ。十一時高岡を發して高崎に向ふ。途中親不知の難關も夢と過ぎ、未だ白雪の原たる信越を經、淺間の白峰の下を廻りて一擧高崎に至る。然れども都合により稽古を中止し、直ちに歸京、一同萬々歲裡に解散す。時維れ、四月十六日午後六時三十分。

今回の遠征は始め僅か十數名に過ぎざりしが、續々增加して、その數三十に達し、其の盛なる事未だ曾てなき所なり。其の元氣亦頗る旺盛、殊に金澤に於いては數百名と相對峙し、三時間に餘る大活躍を演じて猶且餘裕綽々たるものありき。其の勵精刻苦の點亦大いに列擧すべし。されど如何に我々はこの遠征に於て修業せしか、そは論を俟つ所に非ず。日を閱する十有一日、突破する事數千哩、劍を取る事六度、各地に彌生會主旨を宣傳し得て、我等の喜び之に增すなし、しかのみならず一同種々なる方面に於て大いに知識を得たるは之亦遠征の一得か、之を是北陸大遠征となすなり。

尙今回の遠征に參加せるもの左の如し。

會長　鹽谷時敏

幹事　佐々木保藏

師範　中山博道、大島治喜太



大學　和久金藏、石井政一、中庸雄、堀眞道、西村高兄、宮地通彥、多羅尾光道、五十嵐金治、川越淸、安田、鈴木

一高　中貞男、小野薫、山內佩、梯田光男、原田富一、石田和外、園賀、加賀山之雄、篠原幹興、市川淸敏、北村隆

井上司朗、內田重雄、上野辰雄　以上

## 第十五回夏稽古(於信州山田)

七月六日　例年の通り山田夏稽古を企劃し上野驛を出發信州に向ふ。一行佐々木先輩、大學生六名一高生十二名なり。二週間の間午前は槍術、薙刀、太刀の型の練習、午後は地稽古をなす。朝に白雪皚々たる日本アルプスを眺め夕に谷間を轉々する谿流の音を聞き、俗塵を離れたる山間幽邃の地に心膽を練磨す、期間短かしと雖も得る處何ぞ少なしと言ふ可けんや。今年も例年の如く個人五十本勝負大學對一高試合等を爲し、炎熱の下大いに鍛錬する所ありき。

七月二十二日　一同萬座溫泉を經て白根山に登る。二十三日に解散せり。

### 對二高試合顚末

思ひぞ起す、明治四十二年春四月、朔北の梟雄、二高劍道部が南下の軍を嚶鳴堂に邀へ擊ちて、龍攘虎搏の爭の後、旗を捲きて北歸せしめてより爾來年を經て十三、偶々壯擧再び行はれんとして、故ありて中止さるゝこと二度。我等鐵腕を撫して脾肉の嘆に堪へず、寶刀夜鳴きて、泰平を嘆ずる玆に年ありき。九月、忽焉として飛檄北邊より來り泰平の夢を打醒しぬ。即ち、二高劍道部員、高橋八郎氏我部を訪れ、語るに劍道試合を以てす。嗚呼古き歷史は繰り返されんとす、我等が血潮は湧き肉は躍りぬ。先輩佐々木保藏氏等相會し、熟議を凝らし、之を快諾するに決したり。

抑々對外試合たる、術を磨き神を練り、斯道の向上發展に有益なる論を俟たざる也。然るに識者屢々その之に伴ふ弊害の多きを以て、正々堂々の試合その者を非難す。之吾人の久しく潛かに恨みとせし處なり、理想的試合を行ひて、範を天下に垂れ、以て斯道に貢獻する所あらんとは吾人の年來の希望なりき。偶々好敵手二高を得、吾人蓋んぞ欣喜雀躍せざら

んや。玆に於いてか、早晩二高との對戰を豫期して、練磨怠らざりし吾部々員は更に結束して、互に刻苦勉勵、骨を削り肉を殺ぎ、專心技の上達を計りぬ。部長師範は云はずもかな、先輩校友の叱咤鞭撻は言語に絶せん計りなりき。

九月中旬左の檄文を掲げて一般寮生に風雲の急なるを告げたり。

金風颯々の秋天高くして氣亦朗玉風梢を拂へば梧葉一片又一片窓前の落葉日に漸く繁からんとす。あゝ我等が劍を振ふ可き時は至りぬ。數旬の休暇も此處に終へ八寮主を迎へて活氣再び向陵の天地に横溢せんとす。吾等が鐵腕は轉脾肉の嘆を覺ゆるに非ずや。

されど遠く北の方青葉城上に蟠る戰雲暗澹としては、好敵將に我が部を襲はんとす。思ふに彼昔日我と戟を交ゆること二度而も再敗し旗を捲きて北に歸りしより、玆に歳あり、今や彼將に報復の師を起さんとす。頃日二高劍道部委員及先輩我が部を訪れ齎すに彼我對校勝負を以てす。我もとより好敵手を欲するもの何ぞ流星光底長蛇を逸すべけんや、即ち熟議の上快諾する事に決し今や兩校當事者の公式交渉の結果を待つのみとなれり。

聞くならく彼二高我に銜む所深く校友亦復讐の意氣に燃ゆと。彼に報復の念あらば我に守成の堅志あり、何すれぞ北方蜂章の兒をして我が志を遮げしめんや。

大正十一年九月　　擊劍部

此の檄文は校友に多大の反響を與へ我が部の意氣天を衝くものあり。

十月二日二高劍道部委員丸共平、若山雅三兩氏上京し我が部を訪れ直ちに相携へて、先輩佐々木保藏氏宅を訪ふ。二高先輩佐々慎三氏も共に會し、鼎坐熟議を凝らし遂に左の事項を決したり。

一、期日　大年十二年一月（ボートレースの前日）

一、場處　當道場（但し勝負に拘はらず毎年交互に東京及び仙臺に於て行ふこと）



一、名稱　一高擊劍部對二高劍道部

一、形式　追て定む

一、人員　最小限拾五名

形式に關しては、二高委員紅白勝負を主張せるが、兩先輩紅白勝負の弊を說き、組合はせ三本勝負を勸めぬ。我が部その何れにても可なることを告ぐれば、二高委員は再考の餘地を與へられんことを請ひ保留したるなり、尙二高委員は歸仙後直ちに我部に對する正式挑戰狀を發することを約して、袂を分ちぬ。越えて十一月、二高校長公文書を以て我が校長に紹介し來る。辭甚だ慇懃、只管兩校擊劍部の隆盛及び天下に範を垂れんことを述べたり。而して勝負の形式に關しては、組合はせ三本勝負をなし、審判は、本校師範之に當らんことを望む旨記せり。我又正式に之が快諾を與へしかば來春勞頭堂々雌雄を決する事となりぬ。玆に至つてか我が選手の意氣昂然たるものありき。誓つて、光榮の歷史の完成を期し正々堂々相戰ひて滔々たる輕佻浮華の徒に質實剛健の實例を示さんとす。既にして選手を選び中寮九番に合宿するや、互に相勵まし、喜憂を分ち正を勸め邪を匡せば、團結の美は渾然として、玲瓏玉の如く、至大至强、天下何者か來つて潛に我を窺窺せんものぞ。

吾人徒らに内に踟躕して、獨り劍を學ばんには、彼の井底の蛙の嘲を免れじ。乃ち對外試合の練習として、帝國大學、戸山學校、高等師範、高等工業、研心館、有信館を訪れ、技を磨き、業を練るに努めぬ。此の間各選手が各處の大會に參じ得たる成績は、戰へば必ず勝ち攻むれば必ず取る。士氣大いに揚り、巍然として天下を呑むの概あり。朔北の梟雄至るも夫れ螳螂の臂を怒らして車轍に當る如けん。歳改まりて一陽來復、春は都に訪れ世の人皆屠蘇の香に醉ひぬ。然れども初春も我にとつては何かあらん、營々具さに辛苦を嘗め一劍以て彼が頭上に酬ゐんとす。此の間期日に關し種々交渉あり。彼ボートの翌日を固執しければ即ち讓る事とし、一月七日午後一時より無聲堂裡に劍戟の間に見えん事を約しぬ。

一月五日　午後四時四十分、二高選手及其の關係者上京す。我部選手一同、佐々木、小川、和久、堀、西村各先輩、豐田氏と共に之を上野驛に出迎へ、澹如として、交々遠來の勞をねぎらふ。同夜、監督岡野、先輩西村、堀兩氏と共に鷄卵を携へて、二高選手宿泊所たる上野驛前、かすみ館を訪ふ。武人の情愛實に美はしきものありき。

然るに何事ぞ一不祥事の突發するありて、試合擧行さへも危まるゝに至らんとは。一月六日、夜、先輩佐々木、和久、堀、山中諸氏、岡野監督と共に番組交換の爲、かすみ館を訪れ、番組の交換を了す。彼に影山二刀流をよくするものあり。之固より我の詳知する所なりと雖も、此の流、普通の二刀流と異り、大刀を左にして楯の如く打込む太刀を流しつゝ近よりて右なる小刀を以て打たんとするものにして、居合の一種正々堂々の劍に非ず。我此の故を以て是を詰り、此の度の試合のみ之を許すこととし、その堂々天下の範たる可き君子の爭に、斯かる流を以て爭ふは趣旨に反することを說きぬ。次に審判問題出づるに及び紛糾その極度に達せり。審判は我校の師範、その衝に當らんと、既に公文書を以て兩校間に誓約したる處、然るに二高劍道部長は突如校長の命と稱して、中山師範のみ檢證されん事を申出でぬ。之もとより約に反す、大島師範固より之を諾せず。共に其の違約を責めて、兩師範憤然席を蹴つて歸りぬ。然も尙、今後試合を繼續するの點に關しては、亦前約に背きて、言を左右に托して確言せず。遂に「今度の試合の結果によりて、繼續するやも計られず」との暴言を吐くに至つて、事局は拾收すべからざるに至りぬ。かくて交渉遂に破裂し、翌日の試合の有無さへも危まるゝに至りぬ。兩校先輩その後代に殘す惡影響の大なるを慮り、徹宵その調停に努むれども遂に解決の曙光すらも望まれざりき。かくて一月七日の夜は明けぬ、和久堀先輩は急遽、有信館を訪れ、中山師範に面會して、懇談の極其の諒解を得て審判問題は漸く解決することを得たり、其の他に關しては、全然前約を破棄して、恰も遭遇戰の如く、兩校劍道部の練習試合といふ事にて其の解決を得たり。かくて午後一時に始まる可き試合は三時半より行はるゝこととなりぬ。

時既に迫り、無聲堂準備全く成る。乃ち南には馮陵たる青葉城下の健兒綺羅星の如く打並び、銀の一太刀報いんものと



鐵腕撫して控ふれば、北の方には我部の勇士、雲の如く勃々たる英氣を胸に抑へ、逸らず、騷がず。西の席には兩校部長師範、一段高き處には先輩、諸教授の席を設け東は一段の席に當てぬ。

午後二時四十分、我が部選手は先輩校友に擁せられて部歌を高唱しつゝ旗鼓堂々、先づ入場すれば、拍手萬雷の如く、各々設けの席につき敵の來るを今や遲しと待てば、三時十五分、二高選手、部長先輩師範等先導の下に入場す。試合に先ち一高先輩佐々木保藏二高先輩佐々愼三氏立會の下に、今に至りし迂餘曲折、並びに試合の性質變更に關し衆に告ぐる處あり。次に今井部長徐ろに席を起ちて、二高選手遠來の勞を多とし、剛健なる意思の氣風を養成するを本領とする劍道が徒らに奇を好み華を喜ぶ現代思想の橫流せる今日、殊に必要なるが故に、卿等充分なる自重を以て斯道に貢献せんことを望み且此の試合をして勝敗の末技に拘泥する處なく、以て他の試合の範たることを望む旨の挨拶を述ぶれば、二高部長起つて此の有意義なる試合の復歸を喜び、今井部長の主旨に共鳴するを以て此の試合の永續されんことを望むとの挨拶あり。中山大島兩師範、交々起立して、引分けは絕對になく、只餘り試合の長くなるときは「輕くともとる」の審判の宣言後は輕くとも、勝敗を決する事ある可しとの注意ありて、龍攘虎搏の戰の幕は切つて落されぬ。時正に午後三時三十六分。

中山師範表審判、大島師範裏審判の席につき、三十の貔貅起つて五に一揖すれば、甲冑は戛々として肩に鳴り秋霜凜々腰間に閃く。一道の殺氣漲つて虹の如く、山雨至らんとして風樓に滿つるが如く凄々の氣堂に溢れて、沈默の氣は深く一同を壓す。決意の色は選手の眉宇に漂ひ、眼を瞋らし、肘を張り、勝負如何にと息をぞ凝らしける。

（一）　㋐二高　由利壽彌
　　㋑㋒　伊吹幸隆

伊吹凜々たる一裝、堂々たる一軀英姿四邊を拂ひ、兼ねて練習怠らざりし鐵腕に、日頃名譽の寶刀提げ、靜々と場に現はるれば、人も許し自らも許せる天與の妙術神明に通じ人觸るれば人を切り、馬觸るれば馬を截らんず勢、由利亦二高が

三軍の嘱望を一身に集めて先鋒を承はりし一方の驍將げにや烱々たる眼光、稜々たる體軀天晴門出の功名して芳名を千載に傳へむものと、只一刀にと詰めよれば戰はざるに慘々の氣は堂に滿ち、暗雲低徊するが如く、一同思はず固唾を呑み手に汗をぞ握りける。閃々たる刀刃正に合し、火花を散ぜし折しもあれ、大喝一聲鋼を劈くが如く、伊吹の寶刀一閃するよと見えしが、由利の小手既に空し。由利怒髪冠をつかん計りにて、「何を小癪な」と許り、肉迫すれば、伊吹再び鐵をも斷てと小手を打つ。由利危くも引はずし、益々哮りて機を伺ひしが如何なる隙や見出しけん。一聲高く伊吹の小手をかき落す。兩雄互に血に染みて、茲を先途ともみ立て雍ぎ立て迫れば、一團の猛火烈々たるが如く離るれば龍虎珠を爭ふが如し。伊吹畢世の勇を振ひて、胴を拂ひしも功をなさず。大いに哮りて肉薄し流石の由利もたじ〳〵と退く處を伊吹得たりと横に拂へば鏗然たる響ありて、由利頭足處を異にしあはれ陣頭の血祭となりぬ。

（二）　㋐㋐（二高　吉田彌　園實

園劍を學びてより日尚淺しと雖も、豪俠を以て鳴る快男兒、雄姿堂々場の中央に仁王立ちとなれば、吉田心や臆しけん、遠く離れて近付かず、只管隙を窺へば、園ぴたりと刀を青眼につけジリ〳〵と譬へば猛虎の羊を襲ふが如く薄れば、吉田俎上の魚の如し。園の一劍虛空に鳴りて、閃くよと見えしが吉田施さん術をなみ、面上紅英飛んで慘たり。吉田覺悟の臍を定め、窮鼠却つて猫を喰むの譬猛然として挺身横に拂へば、園さしつたりと身を轉じ、火光彩裡の刀刃閃き甲冑相觸れて戛々、もつれつはなれつ決戰數合、互に胴に薄手を負ひしが、園退くよと見せて、刀を振へば再び吉田が面上、轟然たる響ありて、あはれや眞向唐竹割り。

（三）　㋒㋒（二高一桝悅三郎　井本臺吉



拙き味方の振舞ひに、一桝大いに怒り、一把無明の業火、烈々として、天を焦すが如く、頑強なる體軀を手鞠の如く、床板とゞろに踏み鳴らして、右往左往、奮戰すれば、井本少しも騷がず柳を潛る燕の如く、受けては流し流しては打つ、實に天晴凛々しき武者振りなり。打つては一團となり、もつれては一塊となり、暫しが程は何れ黑白も見え分かず。井本發矢と小手を打てば敵もさるもの丁と受止め、得たりと輕く伸びたる一刀、井本思はず深手を横面に受けたり。井本流るゝ血潮拭ひも敢えず大いに哮りて頻りに攻むる虛々實々兩雄蹙ると見えしが、井本得意の離れ際に振りかざす刄の下をかき潛り胴を拔けば、一桝が戎衣鮮血淋漓。井本しきりに小手を覗ひ、一桝又敵の守りは横に薄しとて、寶刀を振ふこと兩三度井本巧に受けては返しつ、焦つて打込む一桝が霜刀の下かき潛りて、再び鮮かに胴を拂へば、一桝あはれ、白玉樓中の人となり畢んぬ。

（四）　㋓㋓（二高　横澤三郎　内田重雄

内田聲に應じて悠然と進み出でキッと身構へれば、自他共に許せし快男子の動かざる事山の如く、徐かなる事林の如く知り難き事陰の如し。横澤亦精悍の氣面に溢れ「觀念せよ」と肉薄せしも如何ともせん術なかりけり。しきりに隙を覗ひしが、大いに焦つて、獅子吼一聲、發矢と小手を打てば、内田悠然迫らず、ガッキと鍔にて受止め、曳つと一聲返す太刀にて横澤が右腕をば物の見事に切り落す。内田敵の臆するに乘じて、常に攻勢に出で、洪波怒濤の湧き、天上黃河の水瀉傾するが如く、面小手胴の嫌なく、右拂左擊功を一時に決せんものと、焦つて打ちし腹一本、武運拙く功をなさず、さらばと内田飛鳥の如く鐵をも斷たん勢にて挺身面を打てば、横澤あはれ身を轉ぜん由もなく、鮮血さつと迸つて、向陵の土と化したりける。

（五）　（二高　小原辰三　北村　隆）

小原味方が再三再四の敗北に怒髪皆倒に立ち、「我が恨の切尖受けて見よ」と許り誓も斷たんず勢、凄じくぞ見えたりける、北村小兵なりと雖も膽甕の如し。意氣を以て立つ快男子何條之にひるむ可き、雷霆の怒りを爲して切尖鋭く詰めよりぬ。小原何を小冠者岩をも通れと切り下せば、翻然と代す鬼神の妙術、霜刃空に嘯きて、横に拂へば、應へあり小原無念の齒嚙をなして、物々しやと斬り立つれば、再び試みし拔胴に小原が太刀は空に掛りてあはれ回天の偉業遂に空しく我軍連戰連勝陣營色めき渡つてぞ見えたりける。

（六）　（二高　日下部智　市川清敏）

日下部は嘗つて東都に遙かに遠征して、帝大に、將又商大に其の鐵腕を振ひて血の雨を降らせし豪の者、向陵の木葉武者、刀の錆となしくれんずとて聲は江河を析き、勢雷電の崩るゝにさも似たり、市川「よき敵ざさんなれ」とて猛り狂ふ日下部を受け返へしつ刀を振へば、疾きこと風の如く、速かなること雷震の如し、日下部輪贏を一時に決せんものと、かさに掛りて切つてかゝれば、鼠に齧く柳絮の如く、柔よく剛を制しつゝ打込む太刀を飛鳥の如く搔ひ潛り、玆ぞと小手を抑ふれば發矢と許り手應あり。

日下部、手負猪の荒れたる如く、憤怒の勢眦を決し、牙をかみて肉薄し、互にせり合ふよと見えしが、市川曳と大上段に振翳し霹靂一聲眞向より打下す一刀、誤たず面上嚮然。日下部あはれ路傍一片の白骨と化して、死屍吹く風のみ肅々として哀なり。



（七）　（二高　村田　晋　篠原幹興）

敵既に六人の勇將を失ひて、陣營轉慘憺、涙痕血點胸臆に垂れて、暫しが程は聲もなく、只牙をぞかみたりける。村田悲憤の涙打しぼりて、戰友の仇報ぜんものと、洪河の一時に決する如く切つて掛れば、大象の如く、猛虎の狂ふが如し、篠原神出鬼沒の早業に名を得し若武者右に潛り左に馳せて、一進一退、虛々實々、玆を先途ともみ立てたり。村田颯風地を動かすが如く、オーと一聲横面を襲ひ、心得たりと受止むるを翻然と返す稀代の早業に篠原一臂を失ひたり、斯る薄手に何條ひるむ可き。篠原秘術を盡して寄り立て、互に小手を打ちたりしが、退くよと見せて篠原が勢に乘じて覆ひ來る村田が刄かい潛り横に拂へば、村田が脇腹鮮血迸流したりけり。村田述然として戒め暫は近寄らざりしも、かくては果てじと、亂打衝擊至らざるなく、鎬を削る五合、篠原思はずたじ〳〵と退りしが「何を」と許り脫兎の如く、寄せては返す折しもあれや、村田が悲憤の切尖、受け損じて、あはれ篠原彼が毒刄の下に斃れ志を得ずして憤死せしこそあはれなれ。

（八）　（二高　丸　共平　安藤銀作）

丸、その名の如く丸々たる體軀、大ならずと雖も、三軍を叱咤するの勇將。豐頰、美髯、天晴丈夫の面魂なり。安藤こそは中堅を守る稀代の猛將、その攻むるや、燎原の火の如く、その守るや泰山の如く、その哮るや鬼膽を寒からしむ。床板トウ〳〵と踏み鳴らして、劍尖相合し、火花を散らすや、一喝一聲乾坤に徹して得意の飛込胴、丸も遲れて劍を拂ひしも力及ばず。丸今は之迄なりと激水の石を流すが如く、猛りに猛りて、奮激數合、獅子奮迅の勢にて攻めよすれば、物々しき敵の振舞ひやとて安藤泰然と刀を擧げて小刀を抑ふれば、あはれ美髯の偉丈夫も黄泉の客となり畢んぬ。敵陣益亂れて大勢既に決したるが知し。

（九）

（二高　若山雅三　石田和外）

石田天表亭々、氣は雲の如く起り龍の如く寢る。神妙の妙技は必ず趨く處に出で、意はざる處に趨く。天魔の秘術とても、いかで我が正義の刃に敵せんやとて多年鍛えたる、寶刀の鞘打拂ひ、キッと許りに身構ふれば、自若として芙蓉峯の如し。若山は輕妙の早業疾電の如く、敵中錚々たる老功の强者、膽を怒らし魄を瞋らして懸河の如き勢にて突如として切つて掛れる棄身の胴、石田刀身を翻へして、受止め打込む手練の早業。流石の若山眞二つとぞ見えしが、老獪に危き處に身を轉じ、互に秘術を盡せしが、若山苛つて打込みつ、體の浮けるを石田すかさずつと入りて岩礁の波濤を碎くが如く滿身の力を玆に込めて、押しければ何條以て堪る可き。若山朽木の倒るゝが如く轟と後に打倒れて、暫しが程は起きも得ず。やがて起きん〳〵と焦る處を大上段に振被り只一刀に拜み打ち、若山今は意氣衰へ悄々として喪家の狗の如く、ひるむ處を慓虎の如く猛然突面胴と攻め立つれば、若山思はずたじ〳〵と退るを追込み〳〵再び上段に振被りて、發矢と伸びし神妙の劍、若山眞向唐竹割り。骨を砂礫に暴しけるぞいたましけれ。

玆に敵將斃るゝもの既に八人勝敗の數全く決す。敵營死屍壘々として、新鬼は煩寃し、舊鬼は哭し、聲啾々として哀なり。

（一〇）

（二高　高橋八郎（影山二刀流）　原田富一）

あはれ蜂章軍十歳の恨晴さんに由なく、圖南の翼いたましくも折れて、回天の偉業遂に空し。高橋味方の敗北に、騰々として熾なる烈火の如く、長刀左に楯となし、右なる小刀キッと構へて、寄らば斬らむず勢。原田固より手練の巧者、千軍萬馬の古强者、千變萬化、飛燕の飛花蹴るに似たり。もつれては一團となり、結んでは一塊となり渾々沌々力戰し、紛々



紜々鬪亂し、火光裡に身を轉ずれば、三刀等しく擧つて閃々、甲冑互に相觸れて戛々。原田逸る心を抑へつ頻りに胴を拔かんとすれば、高橋巧みに長刀にて受けつ流しつ、つと寄りしと見えしが、矢庭に長刀投げ捨てゝ原田が太刀の柄しつかと握り右刀を翳し發矢と打てば、無念や原田、面に痛手をぞ負ひにけり。原田玆に奬嗔が怒りをなして、右往左往に馳せ違ひ、高橋苛つて只一刀にとて進み來るを巧みにいなせば、梟雄高橋忽ち原田が術中に陷り、一刀誤たず高橋が頭を割りにけり。高橋無念の牙を嚙み精神を勵まして飛鳥の如く馳せ寄るにぞ、原田滿身の力を玆にこめ岩をも通れと突き出せば武運や拙かりけん、惜しや、高橋が胴に滑りて脇腹をぞ掠めにけり。高橋得たりと打下せば、あはれ勇將原田が英魂、永へに去つて復還らず。勝者常に勝たず、敗者必ずしも敗れずとか。計り難きは有爲轉變の世なる哉。

（一一）

（二高　吉田秀世　楢田光男）

吉田は嘗て東都遠征の際、帝大に萬丈の氣焰を吐きたる手練の巧者「向陵の木葉武者恨の一刀受けて見よ」と長刀翳して詰め寄りぬ。楢田刀をとつては名うての早業、滾々として盡きざる泉の如し。吉田圓石を千仞の嶺より轉ずるが如くどつと計りに打掛れば、楢田恐れず身を開き、兩勇互に蹙りてせり合ふよと見えしが、吉田が太刀空を飛んで奔雷の如く楢田が頭上に碎けぬ。楢田怒りて奮擊すれば吉田いかで默せんや。東西に馳廻り南北に飛び違ひ互に鎬を削りしが楢田勢漸く壯んに追込み〳〵突くよと見せて小手を薙げば、見事吉田の局處を打ちぬ。兩雄離れて機を覘へば、共に氣囊りて雲の如く、光影裡に身を發して爭へば、烈々たる二團の猛火の荒れ狂ふにさも似たり、楢田寄りつゝ面に返す兩三度、互に薄手を負ひしが流るゝ血潮拭ひもやらず、疾戰數合、流星の如く一劍閃けば、錚々一聲吉田無慙や小手かき切つて落されぬ。

（一二）㋕㋣（二高　古谷千代吉
㋕　山内　佶

山内威風凛々一剣を振へば、巨雲山を擘げて洪河を決すが如く、出没變化雷軍を馳せるに似たり。古谷亦千軍萬馬の飛將軍。一進一退燕の飜るに似て、猛きは猛牛の狂ふにさも似たり。彼胸を窺へば我亦面を打ち、一上一下何れ劣らぬ手練の早業、一衝一截血戰數合引くかと見せて古谷千代吉乾坤一擲棄身の胴、山内身を轉ぜん術もなく、ザツクと一刀。山内何條默す可き、憤怒の眦血を決し、弱刀一閃、縱に切り横に薙げば、古谷亦血に染みたる太刀取り直し「得たりや應」と飛込み來る。山内「すはや」と許り引外せば、古谷が太刀は空を切り、取り直す間もあらばこそ、掣電爛爍、發矢と計り古谷が面に斬込みぬ。双方今や必死の勢、殺氣は凝て虹の如く、一擊二搏、寄せつ返しつ龍虎相搏つ疾戰數合、山内次第々々に詰めよりて、鐵を貫けと突き出せば古谷巧みに拂上げ飛鳥の如く手許に飛び込めば、山内が頭上に霹靂一聲、勇士空しく斃れて悲愁の風のみ嘯きたり。

（一三）㋕㋣（二高　石川鐵三郎
㋕　小野　薫

小野精悍の氣は五體に溢れ神妙の技は窮無きこと天地の如く晦明變化期す可からず。名刀提げて立ち出づれば「よき敵ぞ」とて石川暴雷の如く哮る事一聲、流星の如く切つて掛かる。疾風迅雷の如く端倪すべからず。實にや二高隨一の腕前と見てとつたるは我僻目か。兩雄相分れ睥睨する時は二龍青潭に臨むが如く、一往一來、刀影裡に身を翻して相爭ふ光景、兩虎深山に相搏つ樣に異ならず。互に銷を削りしが、小野石川の太刀を拂ひ物の見事に右腕を切つて落す。小野勢に乘じて突擊すれば、忽ち老猾彼が術中に陷りて、脇腹深く切り込まれぬ。小野何をと許り精神を勵まし、攻め立つる事、電光の閃くが如く、正々堂々と一絲亂れず、秘術を盡して斬り立て既にあはやと見えたりしが石川亦精神益ゝ熾に勇を鼓して



相爭ひ、霜刃縱横石火の閃くが如し。互に死力を盡せば、陽炎の狂ふが如く、一同思はず手に汗握りて勝負や如何にと眼を凝らせり。時しもあれや、互に小手を窺ひしが流星掣電の如く石川の一刀飜るよと見えしが、あはれ小野その寶刀を試みるの機なく、雄圖空しく消えて、南柯の一夢と消え畢りぬ。

（一四）㋕㋣（二高　坂　猶興（影山二刀流）
㋕　中　貞男

中は之、剣を把つては鳳雛麒麟兒、玄妙の剣は至極に達し、その守るや形なきに至り、その攻むるや神速聲なきに至る。その虚を衝くや疾風の如く、突如として流星の過ぐるが如し。坂は父祖傳來の影山二刀流、天晴東都にその名高き勇將の首搔き切つて、後日の功名話にせんものと長刀梢に身構えしが、暫しは打ち込む術もなし。互に睥睨時を久しうしたりしがかくては果てじと坂精神を勵まし、ジリ〳〵と詰寄すれば、中大喝一聲大地に徹りて、寶刀一閃、坂が頭上に碎けたり。中磐石の腐卵を壓するが如く堂々として之を覆壓して發矢と打ちし至妙の一剣、秋霜の邊地の草を摧き、春雨の上林の花を打つが如く見事坂の一臂を切り落しぬ。

あはれ坂家傳の寶刀用ふるの暇なく、魂魄剣光を逐ひて冥々の界に飛び去りぬ。

（一五）㋕㋣（二高　早川　智
㋕　有馬　宏

味方の勇士相續いて斃れしに、悲憤の涙に戎衣の袖を濡らしけん。早川は一剣以て戰友の仇を報いんものと覺悟の臍を定むれば、有馬亦有終の美をなして錦上更に花を添えんものと、決意の色を眉宇に漂はして、日頃手練の兩刀提げ只一打と睨えたり。早川いかで默せんや。叱咤の聲は雷電の如く劍戟の音は怒濤相搏つが如し。有馬の兩刀は奇正相生じ循環の端なきが如く、右に左に變化自在その應接に暇なし。追込み〳〵小手を窺ひ胴を拂へば敵もさるもの名だたる手練の妙技

巧みに拂ひて寄せつけず。有馬小手を攻むる益ゝ急、早川固く小手を覆ひて一刹那萬雷一時に發する如く應ツと一聲、長劍一閃して早川の頭上に伸びたり。早川斯る薄手にひるまんやとて憤怒の眼血を注ぎ、遂に有馬が小手を攻むれば有馬只一打ぞと長劍を横に拂へば力餘りて劍は手許をはなれて遙かに空に飛んだりけり。早川得たりと眞二つになれと許りに飛込み來る間一髪、丁と短劍以て受止めし有馬が早速の早業。敵も見方も呼ツと許り感嘆時を久しくしたり。早川堂々雌雄を決せんものと暫く打ち手を止めしは、敵ながらも天晴の武者振りなり。有馬血に染みたる大刀取直し再び向ふ折しもあれ、早川大刀鋭く切込めば、有馬は小手を失ひたり。早川再度小手を窺へば、有馬さはさせじと拂ひ上げ、小手を攻むる急なり。刀影閃々電光の如く、勢疾風の山林を震動し、激湍崖石を裂くに異ならず。早川が電光空に閃きて、有馬が玆ぞと打下せし小手に戛然として應あり。あゝ早川回天の偉業半にして倒れ魂魄幽明境を異にして猛き有馬が太刀風に花と散りけるこそ哀なれ。

時正に午後四時二十五分なり。

十一對四……凱歌は高く〳〵我が陣中に揚りぬ。嗚呼！思へば去ぬる一年間の努力、殊に十月以來肉を削り、骨を殺ぎ只光榮の歴史の守成に志したる五閲月の猛練習は報いられて猶餘りあり。此の勝！利此の榮冠！實にや是我部を縱に貫く大精神、先輩諸氏の殘せる偉なる歴史の力と部員一同の血汐と汗と涙に獲ち得たるものぞ。先輩師範の叱咤鞭撻、涙の泌む如き猛練習何れも是よき思出ならざるなし。總べてが歡喜すべてが光榮。一同語るに語なく、歌ふに詞なし。

されど記せよ。浮沈勝敗は時の數なるぞ、勝者常に勝つ者に非ず。敗者常に敗るゝものに非ず。吾人は勝者の悲哀を感ぜずんば非ず。述然として相戒むるなくんば、今日の光榮も春の野邊に立つ絲遊、淀みに浮ぶうたかたの如けん。「勝つて兜の緒を締めよ」。吾人大いに歌ふも可なり。されど含蓄多き此の語の意味を味はゝずや。

午後五時より江知勝に於いて懇親會あり。二高先輩委員部長師範、一高先輩選手一同、部長師範出席。約五十名。



劍戟の間に血汐に染みて相見えたる兩軍の勇士、今は酒杯の間に和氣藹々として談笑す。互に胸襟を開いて本懐を語れば、十年辱知の友の如し。二高諸君の辭し去りし後、一同心ゆく許りに勝利の盃に醉ひ大いに歌ひ大いに舞ひぬ。二高の諸君、十時に上野發歸仙との事に選手一同は先輩と共々に之を上野驛に送らんとす。然るに二高選手は其の夜歸仙せずとの事に懇に我等の意ある所を傳へて歸寮す。

されど此の日戰友隅田川に慘敗す。されど一劍以て彼に報ゆるあり。墨堤の恨、戰友の仇玆に晴らせりと云ふ可し。徹宵、中寮九番階上に談ず。苦しき稽古の思出、愉快なりし條々の數々語は何時盡く可しとも見えざりき。

大正十二年

一月十日　熟議の結果左の諸君を大正十二年度本部委員に推薦せられ、午後三時より、道場に於いて引繼をなす。

文、甲二、一、安藤銀作（庶務）

文、乙二、　市川清敏（記錄）

理、乙二、二、内田重雄（會計）

## 北支滿鮮武者修業記

時は維れ大正十二年春彌生、去ぬる正月三度我牙城に襲來せし彼青葉城下の强敵を屠りてより數旬、意氣頓に上り之を抑壓せんとするも能はず、加ふるに寒稽古に依りて得たる餘威を驅りて一劍武を天下に唱えんと欲するの氣鬱勃たるを如何せん。

眼を擧げて徐に海内を見渡すとき、既に我が彌生會の足跡諸道に遍かりければ、一躍海外に雄飛せんとする志切たり。時に先輩佐々木朶藏氏隣國北京にありて我を應く、何條默止すべき。乃ち意を決し、滿鮮武者修業の途に上る。

一行安藤銀作、北村隆、市川清敏、篠原幹興、内田重雄の五名一騎當千の壯夫なり。

三月十九日東西より一行神戸に集合、細雨煙り白鷗遠近に飛ぶ神戸港を鹿島立つ。魂既に三千里外に飛び、瀬戸内海の佳景も前途抱負の前に色なく、音に聞く海灘は風波靜なり。

馬關を去りて海上夜泊すること三、晝間は天氣晴朗、夜は星斗闌干たり。黄海を過ぎ渤海灣に入る。朝夕竹刀を振りて無聊を忘る、船客目をそばだてゝ傍觀せり。

夕陽渤海に沈み、紫色の陸地山影漸く近く、黄昏太沽に停泊す。天津上陸の前晩なれば船中にコンパを開く。船客水夫、共に痛飲して快談時を移す。

翌朝白河を遡る。兩岸沙原の茫々たるを過ぎ午前十時天津に入る。近づけば人あり、岸上魁偉なる佐々木先輩の風姿を望見し一同雀躍して喊聲をあぐ。上陸腕車に乘じ佐々木先輩に從ひて大木邸に投ず。次いで翌日北京に至る。月明の下腕車を連ねて佐々木氏寓居に向へば、北京城内邸宅街の夜は寂寞たり。

北京に滯在すること二週日なり。時恰も聞くならく全北京の劍士全天津と戰ひて凱歌を奏すと。我等勇躍異境に腕を振はん時期至れりと、直に刺を通じ又庭上に出でゝ劍をみがく。而るに彼辭を設けて應ぜず、先輩の斡旋大いにつとむと雖、滯在旬日に餘るも遂に一回の他流稽古に及ばざりしは千歳の恨事とす。

されど北京は大支那の國都たり、天下の偉觀壯絶此處に集る。歸りては劍を振り、出でては天壇紫禁城の大に氣を練り鼓樓鐘樓の高きに上る。又驢馬を近郊にかりて清朝の榮華萬壽山に足跡をとゞめ、遠く明朝の古蹟十三陵に詣で八達嶺に上りて萬里の長城を跨破す。

四月六日再び天津に入る、寶刀始めて腰を脱し、天津道場に劍士三十餘名と對す。角逐數刻の後佐々木先輩慨然として武を說き劍を明にし、「神武不殺」を豪唱すれば、滿堂色なかりき。同夜盛大なる一高會あり。

大連に向ひて天津を去り滿韓を席捲せんと欲す。佐々木先輩を載きて意氣天に沖す。



四月十日滿鐵道場に乘り込む、殖民地もと武盛なりと聞く、今大連に來りて始めて之を知れり。道場壯美、設備具る。集るもの老人より幼童に及ぶ數十百名なり。稽古一日にして足らず翌日に渡る。壯快なりし哉。

四月十二日早朝、日露戰跡を弔はんと欲し、武具を提げずして飄然旅順に向ふ。先輩内田某氏旅順に警察署長たり。懇なる請もだしがたく、警官練習所生五十餘名と稽古に及ぶ。武具皆新しくして重く且固し。稽古最も難澁を極めたり。

馬車に乘じて戰跡をめぐれば、爾靈山頭北風荒び、白玉山の夕陽を浴びて表忠塔に上れば、鹽谷時敏先生の表忠碑文あり。感涙にむせびて旅順を去る、車窓遙に老鐵山の暮影を望む。

大連に歸り即夜長驅して長春をつかんとす。唯見る茫々漠々たる原野、滿州の地は浩し、長春に敵を求むれども得ず。疾風の如く踵をかへし撫順を襲へり。

撫順練武盛なるは曩に大連に於て之を聞く、今刺を通ずるに始め應ぜず。さらばとて大山炭坑見物の後先輩鶴田氏邸に於て酒杯を傾け滿を引くころ、一使あり道場より來る。何條默すべき、武具を肩にかけ直に道場に向ふ。醉歩蹣跚たり顧みて互に笑ふ。

敵多からずと雖皆硬骨我好手なれども氣酒を帶ぶ。亦難戰の跡をとゞむ。撫順に泊して奉天に戻る、見物のみ。一高會あり、即夜奉天を去る。

四月十七日鴨綠江を渡りて新義州に泊す。翌朝新義州を去れば夕刻京城に着、先輩大塚氏邸に泊す。

四月二十日旅行中稽古の猛烈なる之を白眉とす。

早朝警官練習所より挑電あり。快諾、到れば京城の劍士有段者五十餘名陣容を整へて我を待つ、一見勇躍意氣天を衝く。

緊褌靜に進み出でし味方の軍勢を顧れば、佐々木先輩を頂いて六名なり。

いざ來い來れと立ち向ふ所、敵も强骨多けれど我に滿支席捲の意氣あり。龍攘虎搏入り代り立ち代る新鋭を向へて面を脫ぐの暇なし、汗を拭はん時味方は如何にと見るに、何れも獅子奮迅の樣けなげなり。勇奮戟突二時間に及べり、以て激戰の跡を知るべし。

晝食の後京城中學に至る。市川の舊師松井松次郎氏斡旋の下に、一時間餘に渡りて武者修業掉尾の勇を振ふ。

同夜パコダ公園勝利亭に於て最も盛大なる一高會あり。內務局長大塚常三郎氏朝鮮銀行飯泉幹太氏專賣局長靑木戒三氏等を始め三十餘名の先輩會合して歡を盡し、我々の行を盛にせらる。

翌日京城を去る。先輩劍士警官數十名の見送を受く。釜山に向ふ車窓、內地に近き風光に、漸く望鄕の念動く。夕刻釜山に着す。關釜連絡船に乘る。

四月二十二日早朝下の關に上陸す。內地の風光未だ嘗て此の時より麗はしかりしはあらず。

かねて、中國を徇へ、武者修業の終極を京洛と定めたりしが、日月足らず又旣に意なし。新部員の勸誘を慮り、一路東上に決し、四月二十四日無事東京に着す。

旅にあること四旬、支那滿洲を徇へて再び立てる東京驛頭、人馬豆の如く、大帝都恰も人なきに似たり。滿洲の大を負うて向陵に入る。

## 四月　上諏訪春稽古

春期休暇を利用して春稽古を爲さんことを計畫し、三日花の都を後にして春まだ寒き上諏訪に赴く。四面の連山雪尙消えず、八ケ岳嵐の未だ身に沁む卯月四日より、一旬の間、舊一高助敎授なる豐田氏宅に合宿し猛烈なる稽古を開始す、會するもの先輩、中、山內、櫛田、原田、石田諸氏、部員伊吹、南、井本、田瀨、近藤、道場は山の中腹に存する中學校の一を借り、型、練習共に勁む。都は花に醉ひ月に舞ふ時なるに僅か十日が間に積雪二回、雹降ること數回その苦しき事寒稽



古に異ならず。短日月なれども極めて充實し、槍薙刀の型は勿論、稽古も著しき上達にて一同の元氣溢るゝ許り、十三日諏訪を去つて名古屋に赴く、七時名古屋着、現八高敎授小室氏及び八高諸氏に迎へられ、八高集合所に泊る。十四日午前中の暇を利して鯱に名高き金鼓城を訪れ、熱田神宮に參拜し午後武德殿にて、八高、醫大、高工、高商、武德殿の人々と稽古をなす。約二時間、愉快、益する所多かりき。十五日。本日、靜岡遠征の筈なりしも斷り狀來り、止むを得ず、犬山八琴山方面を八高の諸氏と散策し夜東京に直行す。

今回の春稽古は期間短かしと雖も、人數少なしと雖も、意氣充實し極めて有益なる稽古なりき。

七月　夏稽古

本年十二月は、眞の劍道を天下に宣傳する爲、東京帝大が、試合式の京都の稽古に飽き足らず、優勝旗試合を行ふ旨確定、一高にも招待狀來る。故に試合の爲、道場の在る上諏訪を以て夏稽古の最適地となすの說ありしも、山田の美しき情緖を忘れ得ずして、遂に山田にて例年の通り猛烈なる夏稽古を行ふ。白雪を戴けるアルプスの連山、谿流藥師堂境內去年の儘にて、懷しき限りなり。槍、薙刀、太刀の型、猛練習を行ふ二週間、得る所頗る多かりき。

參加人員、中山師範、大島師範、佐々木先輩、大學、石田、一高、中、安藤、市川、北村、內田、伊吹、南、井本、田瀨、關屋、前田、齋藤、十文字、林、久保

九月一日突如として大震災起り、爾來已むなく十月二十二日まで稽古を休む。此の間、我が部にありては或は校內の警備に或は帝大の情報局に於て大いに盡力する所ありたり。此の震災の爲大學道場は火災に罹り、爲に十二月の優勝旗試合は擧行不可能無期延期となり、大學劍道部員は翌年一月大學道場出來するまで我が道場に於て、共に稽古を爲せり。

大正十三年

一月十日　左の諸氏委員となり、今半に於て引き繼ぎを爲す。

文、丙二　伊吹幸隆
理、甲二　小泉重政
理、甲二　南　修

（九月より小泉病氣の爲休學井本臺吉代理をなす）

## 大正十三年四月春稽古並びに關東武者修業の記

向陵春は訪れて寮庭の櫻梢日々肥大し開花の時も將に數日ならんとし都人の夢漸く春興に結ばる。

光榮の歴史を抱くこと數歳、劍を執つて士道に邁進せんとの意氣内に勃々たり。こゝに例年の通り春稽古を行ひ、且又關東武者修業を企て以て益々其の鋭氣を養はんとす。計なりて千葉を春稽古の地となしそれより漸次關東諸方を廻ることゝせり。

四月三日午后堀、山内兩先輩及び寮友に送られて兩國驛發車、千葉に向ふ。一行會する者尚ほ少くして九名。されど元氣旺盛なり。武德會警察署の人々に迎へられて千葉驛下車直ちに武德殿近くの巡査教習所宿舍に至る。此處を宿所として向ふ五日間春稽古を爲さんとす。先輩齋藤知事の御心盡し、又武德會の御盡力により我等の至るを聞き知れる縣下の諸劍士腕を撫して來り會す。是等諸劍士、千葉醫大等と對峙して翌四日より武德殿にて猛烈なる春稽古を開始す。土地自慢の武德殿とて壯大雄麗諸設備完備せり。集る者又强硬以て我が意を得たりとなす所なり。午前九時より十一時迄及び午後三時より五時まで二回の稽古をなす。腕は鳴り劍は冴え奮鬪目覺ましく大いに頑張る、續々來り參ずるものあり一同意氣益々昂然、技を磨き膽を練る。豫ねて聞く千葉は武道盛んなる地なりと。來り見れば聞きしに違はず五日の間は唯壯快の二字に盡きたり。四月八日午前のみ稽古を行ひ武者修業出發の準備をなす。知事に招ぜられ同地公會堂にて午餐の饗應に預り、多數の先輩並びに武德殿の諸先生と共に飲み共に食ひ、快談數刻に亘る。



同夜宿舍に於て武德會の諸氏とコンパを開く。千葉に留ること五日氣益々旺んにして既に關東一圓を一呑みにせし感あり。去るに際して縣廳並びに武德會の方々の深甚なる御好意御盡力に厚く感謝する次第なり。

× × × ×

四月九日　關東武者修業出發。早朝起床す。開くと見せてさて咲きも初めぬ櫻の梢に名殘を止むる情もしばし、多くの人々に送られて住み馴れたる心地する千葉を立つ。時に六時四十四分。成田線を經て一氣に水戸に向ふ。夫れ水藩は舊幕時代の重鎭文武の譽夙に高かりし處なり。昔日の面影さながらに存するならんか、東都に鍛へし我劍を振ふは必ずや彼地なるべしと想は既に梅林の内に遊ふ。水高の諸君に迎へられて水府に着き、直ちに演武場に到る。場は第二公園にあり。弘道館と對し後には老梅殘んの花を止めてなほ馥郁たるものあり。歴史の跡を偲び低徊時を移す。三時より五時まで稽古。武德會、水高、中學等集まる者多數なり。されども我には無聲堂裡に練りし意氣あり、加ふるに千葉に於ける猛練習の餘德あり。豫期に反して苦もなく之をあしらひ意氣大いに擧がる。操屋に宿る。同夜水高諸君旅舍を訪ふありコンパを開き快談す。

四月十日　常盤公園及び附近を見物す。午後三時半水戸發電車にて大洗海岸に遊ぶ。大洋波靜かにして松林僅かに磯風の戯むるゝを聞く。夕景汐干に出でたる岩礁に下り立てばいそぎんちやく、小蟹等棲み旅情を慰む。海波靜に至り杯を擧ぐれば夜は陶然として更く。

四月十一日　五時起床。大洗を立ち宇都宮に向ふ。三木先輩等に迎へられ下野中學に至る。武德會、高等農林、中學等と對す。戰ふこと約二時間、出でて我に向ふ者無きに至る。即ち刀を納めて分れ、高農寄宿舍に至り宿る。同校教授の三木先輩を初め多數來られ、高農の諸君と交つて歡談す。此の地に來りて初めて花の梢の綻びたるを見る。向ふ處坦々脾肉の歎あり。

四月十二日　桐生を衝く。一時半より高等工業に於て同地の有志、高工、中等學校と對して闘ふ。思ひの外盛んなりと雖も而も勢に乘ぜる我眞の力を試すに至らず。稽古後茶話會を開かる。校庭の櫻美事に開花せり。六時三分、多數に送られ

て桐生發車、一擧上州の本場前橋に至る。我部の先輩高田賢治郎氏外數氏に迎へられて下車す。直ちに歡迎會に招ぜられたり。會する者、大部分先輩にして數名の武德會の師範交れり。所謂一高會といふべきか。新舊の話に時の過ぐるを知らざる如し。一行の至れるを深く喜び款待謝辭に餘る。師範學校記念館に泊す。

四月十三日　今回の擧に於て稽古の烈しきこと此處を以て第一となす。殆んど千葉の練習を凌ぐに近し。小雨降る中を武德殿に到り稽古す。此の地もとより劍道盛んなり。上州氣質の蒐まれるものならんか。遙々來りて我々を邀ふるもあり。手硬の相手と對して流汗拭ふに遑なく、奮戰大いに努む。敵は新手を替へて入り代り立ち代り相刻すること二時間餘。稽古を終へて直ちに伊香保に向ふ。細雨霏々たる中に電車は一面の桑畠の中を走り、九折の山腹を回りて夕靄に電燈赤き伊香保の町に着く。千登世館に宿る。湯に浸りて醉えるが如し。

四月十四日　小雨尙ほ降る、湯に入りて疲れを醫す。雨竭むを窺ひ榛名湖榛名神社に向ふ。霧の間に榛名富士を望み老杉の間をくゞりて神社に詣づ。空腹を抱へて山水樓に至り鯉コクを食ふ。善なりし哉。

四月十五日　山を下つて高崎に向ふ。中學にて稽古す。

宇都宮武德殿の開殿の催ありし爲め武德會の人々來る者なく僅に中學商業等の生徒と稽古す。稽古を終へ直ちに浦和に至る。浦高生諸君に迎へられ同校ホールに泊る。

四月十六日　雨降る、掉尾の勇を振ふべき時は至れり。浦高劍道部さきに東北武者修業を終へて歸り勢物凄きものあり。好敵手來れりと我を迎ふ。午後三時半より同校道場に於て師範中學・有志諸氏等と對峙す。八州を呑みたる勢當るべくもあらず。奮戰二時間餘、向陵の意氣を示して稽古を終る。同夜浦高諸君の歡迎會に招かる。氣焰萬丈歡盡くるなし。別れを惜しみつゝ十時七分の列車にて浦和發歸京す。浦和高等學校劍道部諸君の厚き御盡力に深謝する次第なり。こゝに二週日の巡遊を終へて再び帝都の土を踏むに當つて銳氣倍々するを覺ゆ、我初志を貫徹し、我武威を發揚することを得たるを



思へば喜びに堪へざるなり。此の擧もとより範圍を近きに定めたり、されど各人氣力充溢よく其の所期を完うし、學びし所亦尠しとせず。

左に此の行に加はりし者の氏名を掲げん。

師範　大島師範

先輩　中貞男、安藤銀作、篠原幹興、上野辰雄

部員　伊吹幸隆、小泉重政、南修、光田忠雄、齋藤三郎、十文字俊夫、伊集院秀三、須藤靜一、林茂、阿藤卓志

## 大正十三年夏稽古の記

例年の如く夏稽古を行ふ。

場所　信州上諏訪

期間　七月九日より同廿九日迄

來し方を回みれば或は沓掛に或は山田にて行はれしなり。されど前記の處は何れも道場の備はるなく、炎日の下大地を踏み鳴らして奮鬪し來れる也。其の快や極まれりといふべし。心を磨き膽を練る、即ち人格修養の資となすに於て何爲ぞ其の處を選ばん。俗塵を放れて自然の大に接すれば其の氣自ら浩然たるあり。山田の地誰れも先づ指を屈せし處なり。されど又考ふるに來る十二月末には帝大主催になる高等專門學校劍道大會あり。設備の缺を補ひて稽古の充實を計り、又齷齪たる東都の生活より我等を救ふべき地をと部員、先輩相計りて斯く上諏訪の地を定めたるなり。俯下すれば湖水の藍を湛ふるあり。目を擧ぐれば日本アルプスの連山、芙蓉の勇姿あり。舊師範豐田先生同地の中學校にありて我等を迎へられ、又中學の道場を貸し與へられたるも幸なる哉。自然の偉と壯と云ふなく、道場亦廣大にして萬端備はる。我等の意氣內に躍る。即ち大いに爲すあらずんばあらず。二旬の快擧よく所期せし處を貫くを得たり。

七月八日午後十時先輩、部員の一行十二人勢天に沖して飯田町出發翌早朝上諏訪に乘り込む。佐々木先輩石田先輩既に數日前より來諏せられて種々御盡力下されたり。即ち旅館宿泊の不便を慮り、郊外道場に近き處に新しき一家を借り入れ自炊生活の夏稽古を行ふこととなれり。こゝに自炊生活の妙味忽ち現はれ我爲す處近隣の煩に係りなく、手を拱きては窓外只青草の水田を眺め凉風要めすして來り慰す。

先輩、部員の來り加はる者亦少からず、或は地稽古に或は五十本、百本仕合紅白仕合、高點仕合、等猛烈を極め、劍、槍、薙刀の形、又新に取り入れたる奥田氏傳授の柔の形などを行ふ。當地劍道盛んにして我が舉を慕ひて來る人士又多く其の旺なること、さしもの廣き道場も溢る許りなりき。時には惰眠の夢を冷笑して朝稽古を行ひしこともあり、時には唐澤山に登りて仙境唐澤寺の幽谷に杯を交はして吟じ(十五日)舟に棹しては湖上の清遊に一日の歡を盡す。(廿一日)珍味、佳肴は巧利の商人を外に大いに食ひ、烈日の下、流汗淋漓の苦行空しからず、成果を收めてこゝに終了の時は來れり。廿八日夜稽古に來りし土地の人士を招きて盛大なる別れのコンパを開けり。興何時盡くとも見えず地人我等に懷き去るの意なし。夜半に及びて乃ち散會せり。廿九日夜多數の見送りを受けて馴れし住家に離るゝが如くに歸京せり。道を求むれば同志の士少しとせず。此度の擧や爲す處多く、獲し處大なりといふべし。左に參加者の氏名を掲げん。

先輩　佐々木保藏、山内佩、原田富一、石田和外

中山博道師範、大島治喜太師範

一高部員　伊吹幸隆、南修、井本台吉、田瀨辰雄

齋藤三郎、十文字俊夫、伊集院秀三、須藤靜一、林茂、久保常明、細谷喜一、橋本永助、有賀勝、林征次

これを是上諏訪夏稽古とす。　以上

× × × × ×

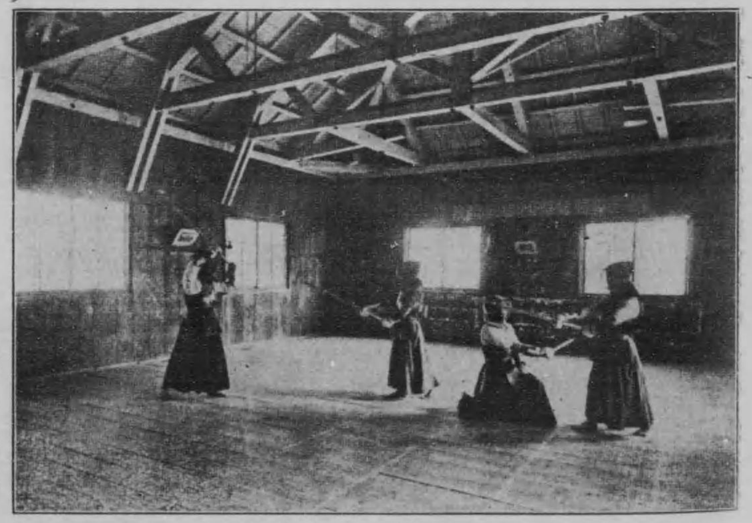


劍法及び劍道に就きては、擊劍部史中至る所に詳細に說かれ、餘蘊無し。されど擧世滔々浮華に流れ、內に顧みる所無くして徒に新につく。皮相の觀察多く、我國古來の精神たる武士道を忘れ、大和魂の表象たる劍を罵りて、殺人の道具となす。之國を誤るの徒、我が日本刀の爲に一言なかる可からず。

抑も劍は惡を截ちて、善を衞り、自ら顧みて愛慾の業鎖の自己の內生に纏縛するを、斷切するこそ、其の精神なれ。倭姫命、日本武尊に「愼勿怠。」とて劍を渡し給ひ、日本武尊は東征に劍の偉德に依りて總べての災厄を免れ給ひ、最後に尾張にて美夜受姫を得て劍を離れ、伊吹山にて悲しき運命に遭ひ給ふ。古來歷史に斯の如き例多し。皆劍を忘れ、劍の精神たる愛慾斷切を忘れたる結果なり。西哲人間の魂を擬へて、理性の手綱に依りて走る情慾意志の二馬なりとせり。情慾の馬よく走るとき、人は感能の享樂に沒落し、意志の馬よく走るとき、人は純粹なる世界、精神的快樂を得て情慾を抑制する事を得と。意志の駿馬は之日本刀の一の表象に非ずや。實に劍は吾人の精神に關し內面的生活に缺く可からざるものなり。而して劍は進みては國を守り國を鎭むるもの、神武天皇の御勅に曰く「鋒刃の威を驅らずして、天下を平げん。」と。之實に我が劍の大精神に非ずや。

（舊無聲堂）

撃剣部舊道場



（舊無聲堂）

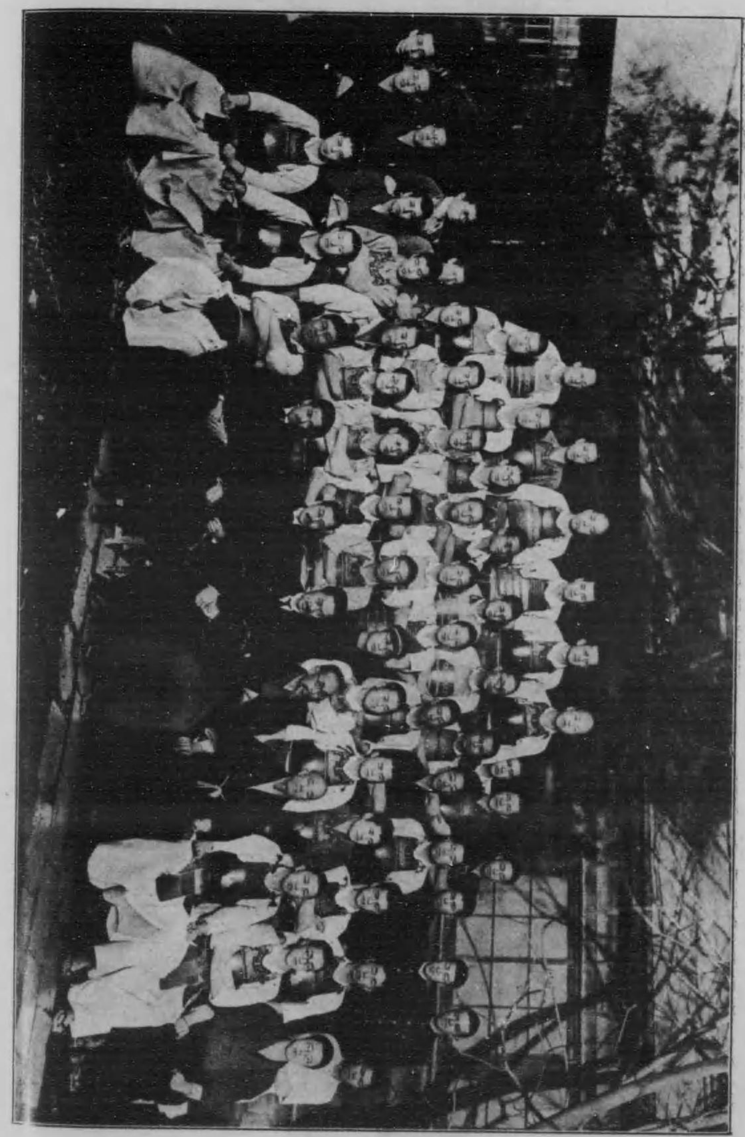
撃剣部舊道場内部

京都内場道新



手選戰高二對度年一十正大

# 柔道部部史



大正十三年度

# 柔道部部史

筆者　西川於莵六

一、沿革附本部規則——二、歷代部長師範委員——三、有段者姓名——四、對外試合

## 一　沿革

我柔道部が始めて校友會の一部として呱々の聲を擧げしは今を去る事二十有餘年の昔明治二十三年秋も半ばの頃にして木下會長の時なりき。

六十疊の舊道場が新たに建てられたるも實に此時にして再來二十餘年の間輩出せし幾多の名手幾多の俊豪も皆此道場に歷代の會長部長及熱誠なる良師の指導の下に身心を鍛へしものなるが明治四十三年寄宿寮創立二十年の祝典に際し紀念事業として柔劍道々場新築の運に遇ひ遂に本年三月最新且廣大なる現今の道場を得たり。

翻て明治二十四年我部初めて大會を開き都下各學校選手を招待し互に技を爭ひしが今に至る迄回を重ぬる事玆に二十有二、明治二十七年又初めて寒稽古を行ひしより毎歲嚴冬三旬の間息も凍らん許りの未明蓼々の聲絶ゆる間なきも勇ましや。

明治二十八年に至り新たに横山作次郎氏を師範として聘するに及び良師なきに苦しみし部員は此我國柔道界の鬼神を得て勇氣忽ち倍し益熱烈なる稽古を積むに至りぬ。明治二十九年本部規則を改正し四十五年更に內規約を設けぬ。

明治三十一年北國の重鎭二高軍を迎へ其輸贏を爭ひしを嚆矢として對外試合を擧行する事五度其數決して多からずと雖

も大塚臺上一橋軍を迎へて二度共に見事に擊破したりし其意氣、最近二高軍と會戰せし當時の悲愴耳を蔽ふべき逸話、嗚呼是れ我柔道魂の發現に非ずして何ぞや。

由來我一高は豪健を以て天下に鳴る而して我武士道に於ても亦豪健は其最も重んずる所なり我國古來の武術に身心を鍛練しつゝある我部員諸子豈健豪以て我校風に叶ひ且は又光榮ある歴史を穢さゞらん事に心せずして可ならんや。

○本部規則(明治二十九年一月改正)

第一條　本部ハ柔道ヲ修業シ心身ヲ錬磨スルヲ以テ目的トス

第二條　本部々員タラント欲スルモノハ其旨委員ニ申込ミ承諾ヲ受クベシ

第三條　本部々員ハ左ノ諸項ヲ服膺スベキ者トス

第一項　漫リニ稽古ヲ中止シ或ハ缺席スベカラザルコト

第二項　深ク禮讓信義ヲ重ンジ浮躁粗暴ノ擧動アルマジキコト

第三項　道場ニ入ル時洋服或ハ袴ヲ着ケ且脫帽スベキコト

第四項　道場ニアリテハ衣類ハ凡テ定所ニ置クベキコト

第五項　溜所外ニ於テ喫煙シ又ハ裸體其他不體裁ノ所爲アルマジキコト

第六項　稽古時間外ニハ道場ニ入ルベカラザルコト

但委員ノ承諾ヲ得タルモノハ此限リニ非ズ

第七項　第八項　ハ內規約ニ改正セリ

第九項　皮膚病其他傳染ノ恐レアル病ニ罹レル者ハ必ラズ遠慮スベキコト

第十項　出席者ハ必ラズ出席簿ニ姓名及本數ヲ記入スベキコト



第四條　稽古時間ハ委員ニ於テ時々之ヲ定ム

第五條　本部ニ部長一名委員二名ヲ置ク(後委員三名ト改正セリ)

第六條　部長ハ本校職員中ヨリ校友會長之ヲ選定ス

第七條　(內規約ニ改正セリ)

第八條　部長ハ本部ノ庶務ヲ掌理ス

第九條　委員ハ部長ヲ補佐シ本部ニ關スル一切ノ取締ヲナス

第十條　本部ハ每年一回大會ヲ開キ且臨時勝負ヲ執行スルモノトス

第十一條　部員中技術ノ優劣ニ從テ之ヲ六級ニ分ツ

但シ其進級及編入ハ勝負、業、出席ノ三者ヲ參考シテ本校部員之ヲ定ム

第十二條　二級以上ノ者ヲ以テ稽古掛トシ本部制定ノ帶ヲ用ヰシム

第十三條　本校出身者ニシテ特ニ本部ニ功勞アリシ者ハ永久之ヲ優待スベシ

第十四條　校友外ト雖モ斯道ノ熱心家ニシテ委員ノ許可ヲ得タルモノハ來場ヲ許スコトアルベシ

第十五條　本部規則ハ部員會議ニ於テ多數ノ同意ヲ得部長ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ變更スルヲ得ズ

附記　第三條第七項第八項ノ稽古着ニ關スル件及第七條委員選擧ニ關スル件ハ內規則ニ改正セリ內規則ハ略ス

## 二　歴代部長師範委員芳名

委員　河合慶二郎

| | | |
|---|---|---|
| **明治二十四年** | | 加納德三郎 |
| | 委員 | 川合得二 |
| | | 本間九介 |
| **明治二十五年** | | |
| | 委員 | 松方五郎 |
| | | 丸田愛熊 |
| **明治二十六年** | | |
| 部長 | 織田顯次郎（二月より） | |
| | 委員 | 谷益藏 |
| | | 不明 |
| **明治二十七年** | | |
| 部長 | 織田顯次郎 | |
| | 委員 | 大島次郎 |
| | | 谷益藏 |



| | | |
|---|---|---|
| **明治二十八年** | | |
| 部長 | 織田顯次郎 | |
| 師範 | 横山作次郎 | |
| | 委員 | 松村定次郎 |
| | | 篠田次策 |
| **明治二十九年** | | |
| 部長 | 織田顯次郎 | |
| 師範 | 横山作次郎 | |
| | 委員 | 彌永克己 |
| | | 長澤傳六 |
| **明治三十年** | | |
| 部長 | 織田顯次郎（十月まで） | |
| | 飯島（十一月より） | |
| 師範 | 横山作次郎 | |
| | 委員 | 平山金藏 |
| | | 布施嘉吉 |
| | | 長島隆二（九月より） |
| **明治三十一年** | | |
| 部長 | 飯島（七月まで） | |
| | 藤代禎輔（九月より） | |
| 師範 | 横山作次郎（四月まで） | |
| | 永岡秀一（五月より） | |
| 柔道部部史 | | |
| | 委員 | 平山金藏 |
| | | 布施嘉吉 |
| | | 中村茂 |

**明治三十二年**

部長　藤代禎輔
師範　永岡秀一
委員　北村耕造
　　武谷次造
　　廣田丈太郎

**明治三十三年**

部長　藤代禎輔（十月まで）
　　原勝郎（十一月より）
師範　永岡秀一
委員　織戸悦造
　　廣田弘毅
　　米原竹次郎

**明治三十四年**

部長　原勝郎
師範　永岡秀一
委員　淺野音四郎
　　澤邈興
　　龜屋秀三

**明治三十五年**

部長　原勝郎
師範　永岡秀一（七月まで）
　　前田榮世（九月より）
委員　杉村陽太郎
　　福永吉雄
　　鳥潟碩



**明治三十六年**

部長　原勝郎
師範　前田榮世
委員　瀧田正二
　　杉村陽太郎
　　福永吉雄

**明治三十七年**

部長　原勝郎（七月まで）
　　鹽谷時敏（九月より）
師範　前田榮世
委員　瀧田正二
　　增田次郎
　　山上榮一

**明治三十八年**

部長　鹽谷時敏
師範　横山作次郎（一月より）
委員　新井源水
　　山上岩二
　　關川貞雄

**明治三十九年**

向陵諸

部長　鹽谷時敏
師範　横山作次郎
委員　新井源水
　　越川彰
　　大浦壽清

**明治四十年**

部長　鹽谷時敏（十一月まで）
　　菅虎雄（十二月まで）
師範　横山作次郎
委員　南澤遊龜治
　　宮澤源吉
　　佐竹義雄

**明治四十一年**

部長　菅虎雄
師範　横山作次郎
委員　粟野俊一
　　佐竹義雄
　　上谷長雄

**明治四十二年**

部長　菅虎雄
師範　横山作次郎
委員　粟野俊一
　　佐藤傳次郎
　　西川友德



**明治四十三年**

部長　菅虎雄
師範　横山作次郎
助手　新井源水（四月より）
委員　關根鐵造
　　河口四郎
　　永野護

**明治四十四年**

部長　菅虎雄
師範　横山作次郎
助手　新井源水
委員　大野六郎
　　森規矩夫
　　關根鐵造（七月まで）
　　西川於蒐六（九月より）

**明治四十五年——大正元年**

部長　菅虎雄
師範　横山作次郎（九月まで）
　　新井源水（十月より）
助手　丹波貫三
委員　西川於蒐六
　　龜井貫一郎
　　西川總一

**大正二年**

柔道部部史

| | | |
|---|---|---|
| | 部長 | 菅虎雄 |
| | 師範 | 新井源水 |
| | 助手 | 丹波貫三 |
| | 委員 | 輕部久喜 |
| | | 鈴木智一郎 |
| | | 宮崎親友 |
| 大正三年 | 部長 | 菅虎雄 |
| | 師範 | 永岡秀一 |
| | | 金光彌一兵衛 |
| | 委員 | 齋藤壯一 |
| | | 秋山德三郎 |
| | | 小林義雄 |
| 大正四年 | 部長 | 菅虎雄 |
| | 師範 | 永岡秀一 |
| | | 金光彌一兵衛 |
| | 委員 | 粟屋仙吉 |
| | | 織田信太郎 |
| | | 細川丸郎 |
| 大正五年 | 部長 | 菅虎雄 |
| | 師範 | 永岡秀一 |
| | | 金光彌一兵衛 |
| | 委員 | 田代重德 |
| | | 荻原長谷雄 |
| | | 久野昇 |



| | | |
|---|---|---|
| | | 倉田太一（十月より） |
| 大正六年 | 部長 | 菅虎雄 |
| | 師範 | 永岡秀一 |
| | | 倉田太一 |
| | 委員 | 西久保良行 |
| | | 稲垣征夫 |
| | | 田原敏夫 |
| 大正七年 | 部長 | 菅虎雄 |
| | 師範 | 永岡秀一 |
| | | 倉田太一 |
| | 委員 | 中村榮治 |
| | | 郷達夫 |
| | | 東俊郎 |
| 大正八年 | 部長 | 菅虎雄 |
| | 師範 | 永岡秀一 |
| | | 倉田太一 |
| | 委員 | 宮崎公平 |
| | | 多賀佐重 |
| | | 柿沼三郎 |
| 大正九年 | | |

| | | |
|---|---|---|
| 部長 | 菅虎雄 | 委員 田代秀徳 |
| 師範 | 永岡秀一（九月より） | 村山藤四郎 |
| | 橋本正次郎 | 沖野悟 |

**大正十年**

| | | |
|---|---|---|
| 部長 | 菅虎雄 | 委員 水池亮 |
| 師範 | 永岡秀一 | 志賀義雄 |
| | 橋本正次郎 | 赤池芳雄 |

**大正十一年**

| | | |
|---|---|---|
| 部長 | 菅虎雄 | 委員 美濃部洋次 |
| 師範 | 永岡秀一 | 福田一 |
| | 橋本正次郎 | 松原榮一 |

**大正十二年**

| | | |
|---|---|---|
| 部長 | 菅虎雄 | 委員 下村三郎 |
| 師範 | 永岡秀一 | 後藤重武 |
| | 橋本正次郎 | 菅野眞玄 |



| | | |
|---|---|---|
| 部長 | 菅虎雄 | 委員 近藤一男 |
| 師範 | 永岡秀一 | 佐藤止才夫 |
| | 橋本正次郎 | 市川保雄 |

**大正十三年**

| | | |
|---|---|---|
| 部長 | 菅虎雄 | 委員 加藤易藏 |
| 師範 | 永岡秀一 | 森繁雄 |
| | 橋本正次郎 | 秋吉勝廣 |

**大正十四年**

以上

## 三 有段者姓名

### 卒業生

五段 杉村陽太郎　新井源水　澤逸興

山上岩二　大野六郎

四段 加納德三郎　福永吉雄　鈴木智一郎

平山金藏　粟屋仙吉　西久保良行

三段

久富達夫　川上得二　北村耕造　粟野俊一　角喜久治　大河原泰次郎　齋藤壯一　小林義雄　稲垣征夫　酒井又夫　美濃部洋次

二段

龜山秀三　江木定男　山本平馬　小池四郎　松田哲　石山福二郎　齋藤靜也　河合慶治郎　故増田次郎　宮澤源吉　村尾重孝　永野護　田代重徳　内山圭悟　福井靜　香川三酉　松原榮一　鳥潟碩（あたる）　阿部彦郎　堀切善次郎　金野豐　龜井貫一郎　細川太郎　久野昇　矢作榮造　岩永祐吉　田上榮一　佐藤傳次郎　森規矩夫　中村榮治　森川親友　三澤憲　村山藤四郎　高木覺　越川彰　山崎直　小倉源次郎　末松菊之助　澁澤正雄　故瀧田正二　津田秀榮



初段

秋山德三郎　輕部久喜　柴田健太郎　名倉英二　齋藤憲一　平塚信三　東俊郎　宮崎公平　仁田勇　木下半治　福田一　下村三郎　加藤五郎　飯島滿次　武谷次直　廣田丈太郎　長島隆二　松方五郎　佐藤重遠　那須好一　田原敏夫　三井岩雄　安東義良　三宅傳七　堀江英二郎　多賀祐重　松澤美雄　難波經一　三宅悌藏　後藤重武　佐野孝次郎　長澤傳六　田原明　故外山岑作　淺野晉四郎　島川直英　三輪壽壯　箕作秋吉　濱口雄彦　東陽一　中島千鹿男　荒木長太郎　堀瀬農　近藤綸二　沖野悟　木村仁　本山平次　菅野眞玄　彌永克己　飯尾藤次郎　中村茂　宮部徹　田邊治一郎

宮脇梅吉
時永浦三
渡邊鐵造
河合榮三郎
長瀨貞一
南澤遊龜治
故平山成一郎
石本惠吉
西川友德
渡邊逸郎
宮野容吉
横井眞興
西川總一
目崎憲司
川崎舍恒三
村上攝郎
大竹虎雄
金子隆三

青木幹一
納富清篤
吉武繁
關川貞雄
加藤大一郎
長東龍三郎
井上鐵四郎
佐竹義雄
高橋權三郎
西川於莵六
宇賀四郎
井上健彦
吉原昇三
横井存
山口義一
矢田部達郎
織田信太郎
田村一郎

入谷鉾之助
玉井潤次
大河內一要
大浦壽清
金井清
松本藤四郎
河口四郎
關根鐵造
杉村英三郎
筒井省二
渡邊軍治
吉野慶次
伊藤和雄
吹野勉
上谷長雄
田中義一
伊藤保次郎
萩原長谷雄



小山壽夫
福井清
中島宗一
渡正監
伊藤覺
高木幹夫
關宏二郎
寺田省一
水池亮
尾高鮮之助
清水虎雄
阿部豐

石井康
山田武雄
尾高朝雄
伊藤隆治
林半一郎
原武

前原達一
三宮錫馬
今松治郎
濱田洲一
田原東
小林良雄

## 在校生

四段　加藤易藏
三段　木村修
二段　近藤一男
初段　金持一郎
松本武夫

佐藤止戈夫
倉田藤一
吉田信行

市川保雄
森繁雄
前田贊郎

秋吉勝廣　柴田芳助

## 四　對外試合

### ○第一回對二高試合

抑我部が對外仕合を擧行せしは、明治三十一年に始まりたりと雖も其源は已に遠く明治二十四年我部創立せられて間もなきの時に萌せり、即ち明治二十四年十月第一回大會の當日學習院の殿原を招き、三本勝負に其輸贏を爭ひしを始めとせしが時我れに利あらず、翌年に至り續いて仕合をなす事二回遂に我部は美事昨の恥を雪ぎぬ、爾來他に强敵を見ず、年をけみする事正に六年明治三十一年彌生半ば春色漸やく濃ならんとする時羽檄一箭突如として東北の天を掠めて來る、啓けば即ち同胞二高の勇士が斯道の爲めに輸贏を決せんことを挑むの書なり、我部は喜んで即日之れが應諾の旨を答へたり。

二高尙志會柔道部は夙に剛健の音高く皚々たる白雪凜烈たる朔風に其鐵腕を鍛錬し斯道の研鑽に熱心なりとは屢々吾人の耳朶に觸したる所なりき、殊に本年は剛勇の士東北の天に集まりしと聞きしが果せるかな當日の勝負は實に見るものをして覺えず快哉を叫ばしむるもの多かりき、兩校の勝負愈々四月十五日我校第一大教場と定まるや部員は勿論滿校にわかに色めき渡りぬ。

當日、日朗らかにして櫻花正に爛漫の時なれは、兩校の勝負を傳へ聞きたる面々は午後一時頃より犇々と推し寄せ來り、倫理講堂迄も立錐の餘地なく其數約二千と注せられぬ、午後三時兩校選手は順次拍手喝采の中に迎へられ場の中央に入りぬ、審判者富田氏勝負法審判法に就て一言せられぬ當日兩校選手及勝負表左の如し。